

503
88



始



36.2. 9

503-88



故三浦修吾著

修吾全集

東京隆文館發行

大正
11. 5. 20
内交



明治十四年姫路師範時代之三浦君



高等小學校時代の三浦君(向つて左方)



(目番三ちか右列前)君浦三の代時生徒師岡

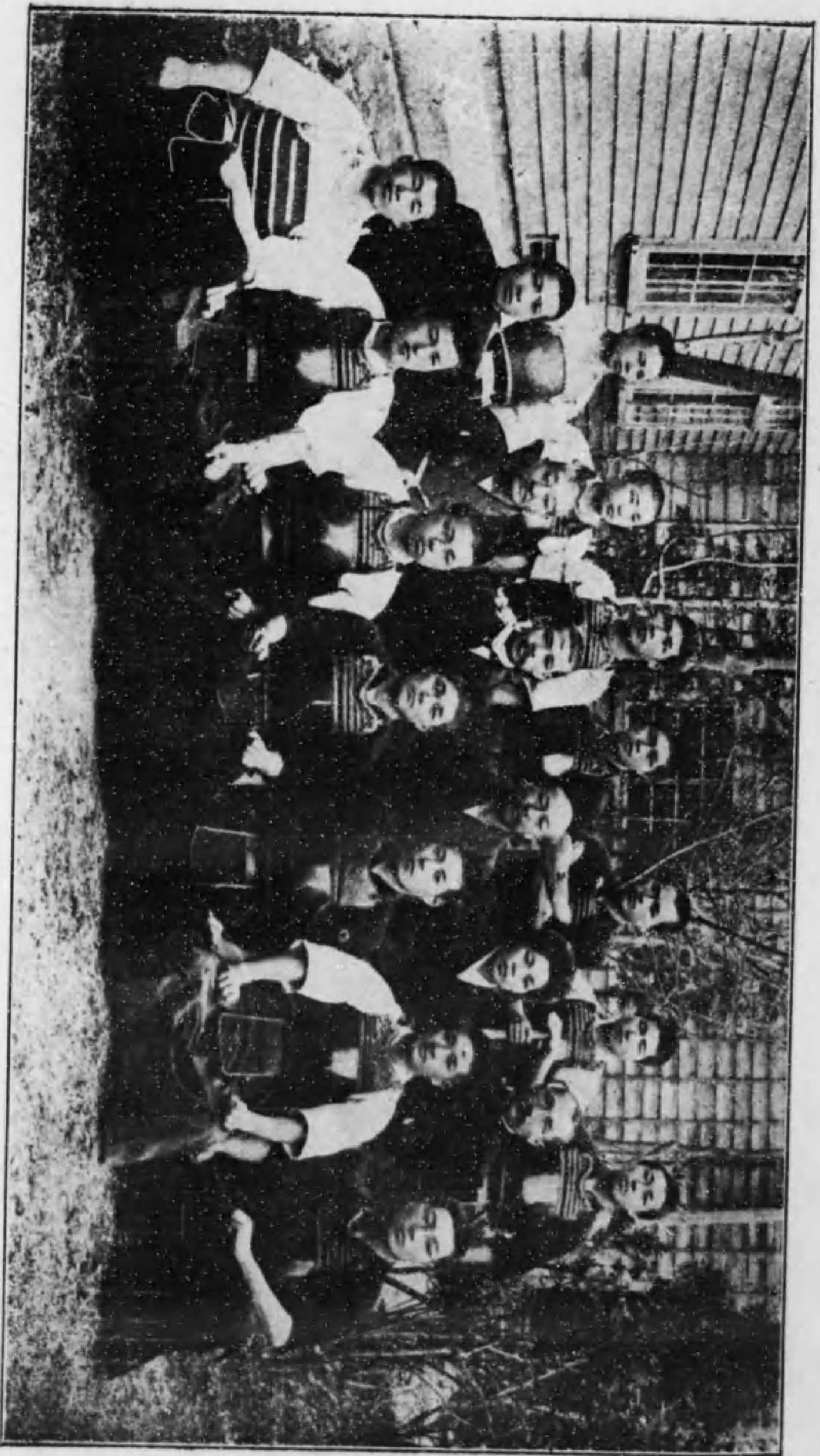




明治三十四年福岡師範卒業當時の三浦君
中央は母の堂向つて左方は令妹



明治十四年島師範が姫路師範に轉任の際
方左は先夫二人の婦人及島師範の生徒



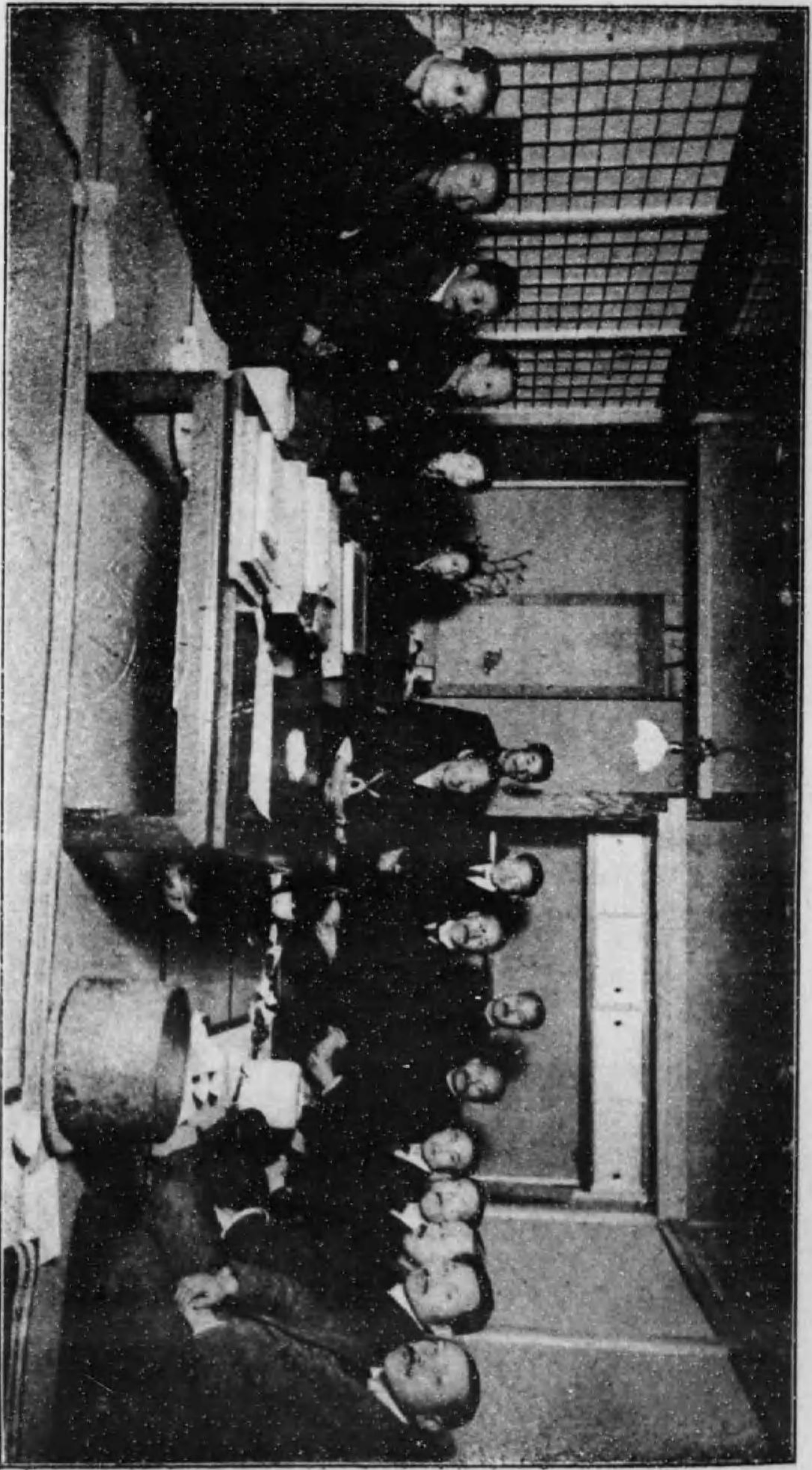
（口番一から右でつ向列中）君浦三の代時純師路姫
たつあで員任担の道銀時當



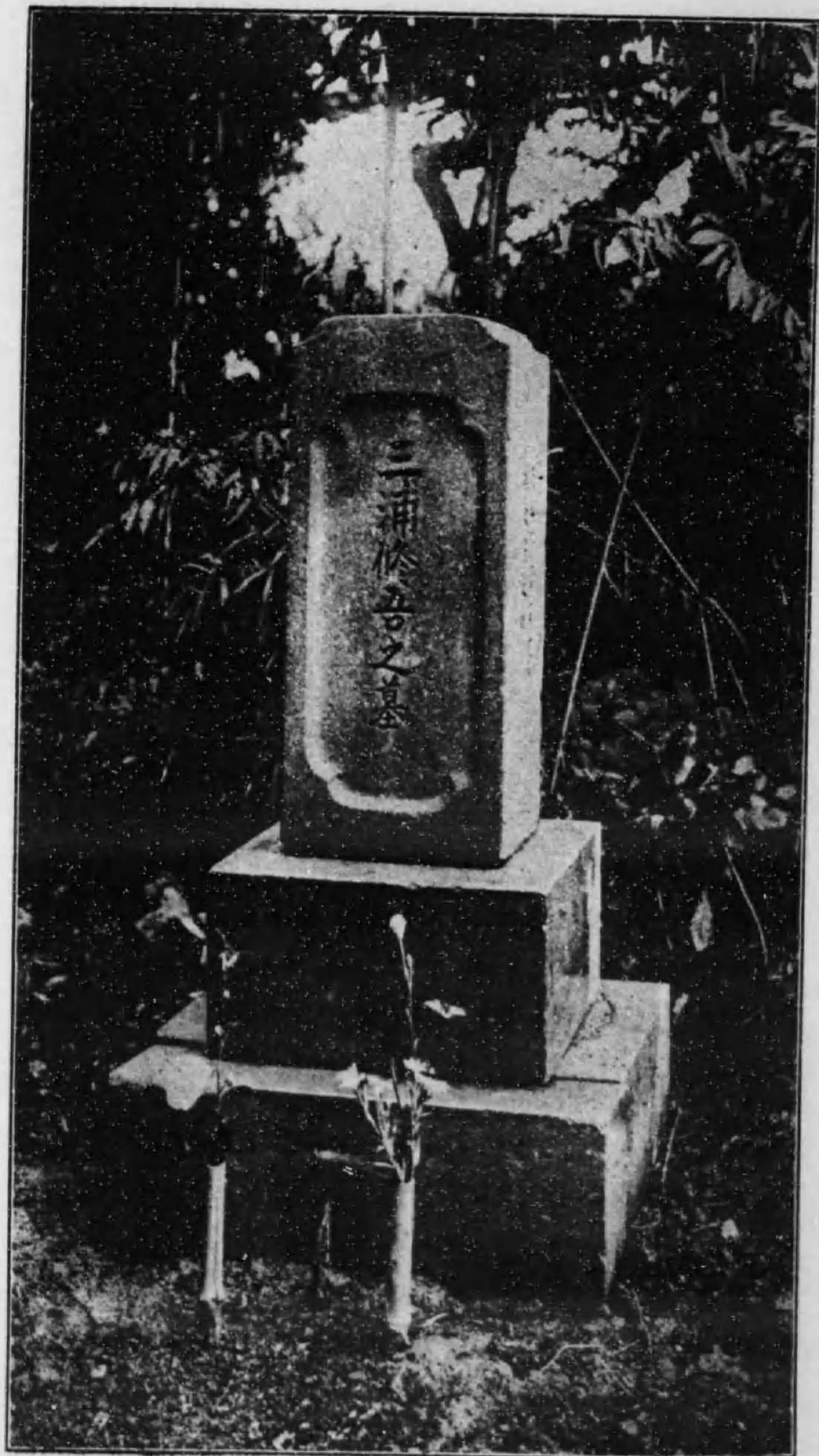
大正四年四月新影撮夫人つま子さんを迎へてなまともきと
圖中右方は長女さん左方はつま子夫人



君三明の子末は央中婦夫君浦三の京東



會仲退君浦三故たれか開てに宅氏口野袋池日本月一年十五大
人夫子つせは人婦の面正



三浦君之墓
新設にせられたる同君の墓

修吾全集序

故三浦修吾君の眞生活は、或意味から言へば、君が成蹊學園長中村春二氏に知られて、東京に来て其の「新教育」に筆を取つた時から始まると言つてもよい。此の時代から君の思想は廣く天下に知られ、一部の教育者達から非常に尊敬を受けたのである。若し君が今少しく長生して居たならば、其の影響は一層廣く一層深く人心に影響したであらうと思ふ。惜しい事には東京の生活は長いことではなかつた。然し其の短い間に書いた作物は頗る多く、又随分深く人心に徹して感化を及ぼす力のあるものであつた。勿論君の在世中から大部分は既に單行本として世に行はれて居たのであるが、更に君の感化の力を一層廣く一層深いものとし、君を精神的に生かして置く爲に

は、是等の著書やまだ世に發表せられて居れない論文や書簡等を一纏めにして、世に發表するに限ると思つたので、君の教を受けた小原(鯨坂)國芳氏と圖りて修吾全集を發行することゝしたのである。右の中第三卷の書簡集、論文集、日誌等の整理は、小原氏が特に苦辛して蒐集し編纂されたものである。又第一集の「愛の學校」は修吾君が生前その友人中山三郎氏に原稿を譲り渡したものであるが、同氏は該書を何等の條件もなく全集中に收めて出版することを承諾せられたものである。其他の書物も皆夫々以前の出版人から好意を以つて全集として出版することを承認せられたのである。私は茲に深く小原氏の勞を謝すると共に中山氏が舊交を思ふて快く「愛の學校」の合本出版を承諾せられたのみでなく、氏の保存せられて居る多くの書簡を提供せられたことを深く感謝する。之と共に私は故修吾君の辱知中村

春二氏が生前特に同君を庇護し、其の歿後に於ても色々と好を誼以つて遺族の爲に盡して下さつたのみでなく、成蹊學園出版部の出版にかゝる「教師論」の合刷をも承諾して下さつた好意に對しては、此の序を以つて廣く故修吾君の同情者に報告するの義務があることを深く感じて居ます。猶卷頭に掲げて置いた修吾君の追悼記念會の寫眞は故人の友横濱野毛坂の寫眞師中村金藏氏が特に撮影寄贈せられたものである。こゝに附記して同氏の好意を謝する。

大正十一年一月三日

野口 援太郎 識

高等師範が生んだ異彩ある教育家

野口 援太郎

三浦修吾君は逝いた。而かも極めて淋しく逝いた。十二月二十七日と云ふ押し詰つた日に、年頃の陋巷に唯夫人と弟と長女とに圍繞せられた儘逝いたのである。葬式も親戚知友の三四に送られたに過ぎなかつた。誠に淋しいことであつた。若し人間の價打を所謂死に際の華々しさと寂しさとで判断するならば、三浦君の死際の値打は儘に小さいものであつた。何等人の記憶によるべき程のことでもない人の死に過ぎなかつたのである。されどかゝる判断は皮想の判断である。眞の人間の値打はこんな皮想の事實で判断すべきもので無いことは言ふ迄も無いことである。

三浦君は或る方面の人々には多大な勢力を有つて居た。多くの若い教育家から存外大きな尊信を贏ち得て居た。是は君の友人や先輩等で君をよく知つて居る人々でさへも餘り細かには知つて居まい。最も深い最も久しい關係を有つて居る私なども實際は詳しく知らない位である。唯君の死後諸

方面の人々の話によりて始めて其の感化の力が如何に偉大であるかを想像して、今更ながら其の潜勢力の強いのに驚かされる位である。今に至つて私は始めて君を以つて東京高等師範が生んだ異彩のあるそして成功した立派な一教育家であつたと云ふことを悟つた位である。君の死際は實に淋しかつたと同様に君の一生の生涯の徑路は荆棘の多い慘めな生活であつた。而も私は敢へて君を評して成功した立派な教育家と云ふのである。決して君の死際の淋しかつたことで君の人間としての値打を教育家としての値打を減却するものではない。却つて君をして斯く成功せしめ、我が教育界中にありて慥かに一異彩を放つに至らしめたのは、君の生涯の悲惨、従つて君の死際の淋しかつたことが其の一大原因であると私は断言するに躊躇しないのである。私をして暫らく此の断定に達せしめた君の一生の事歴心事の概要を少しく語ることを許して頂きたいものである。

二

此の異彩ある教育家は別に其の經歷に於ては變つたことは無い。幼時は大人しい兒で、久留米中學に學んだ。明治二十八年福岡縣師範學校に入学し、同三十二年同校を卒業すると、直に東京高等師範の英語科に入り三十六年同校を卒業した。そして鹿兒島縣師範學校の教諭となり、止まること

二年有餘、三十八年五月私の管理した姫路師範に轉じ、勤續十二年大正六年東京に移り、成蹊學園發刊「新教育」に筆を執ること六年、大正九年十二月二十七日に物故したと云ふ様に、別に何も新徑路を取つたと云ふのでは無く、極めて平々凡々たる生活であつた、而かも其の二十年足らずの短生涯に於てよく教育者として成功し、今後猶其の感化を世人に及ぼさんとして同じ教育家中に異彩を放てるは何故であらうか。

君の體格は元來弱い方では無かつたか、高等師範時代に胃を害して後、始終其の徴が見えて居た。口中が乾いて唇の皮が少しつ、剥けかけで居た。併し是は君に取つては別に大したこと無かつた。最も君の生涯に大きな影響を及ぼしたのは明治四十一年の頃に起つた肺結核であつたことは言ふ迄も無い。此の病氣は君の生涯をして悲惨ならしめたと共に、君の思想をして大に深からしめ且力あるに至らしめた最大の原因であると私は思ふ。君が此の病を患ふるや、夫人浪子さんは力を盡してその看護の勞に服せられた。然るに痛むべし、夫人も亦其の病に感染して、遂に同病相憐むの境涯に至つたのである。修吾君の心中は果して如何であつたらう。浪子さんは泥谷夫人の令妹で、肥前大村の生れである。修吾君が高師を卒業して鹿兒島に赴任の途中姫路に於て、私の宅で結婚式を舉げ爾來數年琴瑟相和し、相愛し相扶けて始終苦樂を共にした最愛の婦人であつた。その人が今自

身と同じ病氣にかゝつて生死の程も確かでないと言ふのも、修吾君としては當然憂慮せざるを得ないのであらう。君が夫婦相携へて、病を夫人の郷里大村の附近なる湯宿に養うて居た頃の話を始終聞いて居たが、當時の悲惨は想像するに堪へ難いやうな氣がする。二年の後幸にして自身は大に健康を快復して居たが、夫人は遂に全快せず、姫路に於て不歸の客となつた。三浦君に取りては如何ばかり落膽したことであらう。最愛の夫人を先き立たせ二人の遺児を携へて、而も病の身を以つて生活の爲に奮闘せねばならぬ。君の境遇は轉々悲惨のものであつた。是が爲に君の行爲は多少變化を來し狭斜の巷に足を容るゝが如きこともあつたと云ふことである。是れ君が悶々の情を遣らんが爲にせる一時の快を貧るに過ぎないことで、寧深く同情に値することである。當時君の煩悶は如何に激烈であつたであらう。其の後長男菊雄君の急死に逢ひ、君の試練は益々辛烈を極めるのであつた。加ふるに多年君の世話をして居られた老母も遂に長逝せられると云ふ風で此の數年間に實に君の身に取りては悲惨な事が相次いで襲來した時期であつた。然るに君は病餘の衰弱せる身體にも拘らずよく是等人生の大慘事に堪へて來たと云ふ事は實に健氣な闘争であつたと思ふ。其の後今の夫人まつ子女史を迎へ稍安慰を得たと思ふ。間もなくやがて宿病の再發に依り再び病院に起臥する身となつたのである。君はもとよりまつ子女史の心中は如何にあつたであらう。

鐵は鍛はれて益々堅くなり又は磨かれて益々切味がよくなる。修吾君の生涯は實に此の試練の悲劇であつた。序幕早々から此の悲劇の一齣一齣が連続して終つたのであつた。而も君はよく此試練に堪へ得て、益々其の切れ味を増して來た。其の最後數年間『新教育』の主筆時代は論說、講演、著述等に君の多年實感し實驗して得た深刻な思想は、君の本來の性質である無邪氣な玲瓏玉の如き美はしい温かい感情も、而も何處となく強味のある氣象と相合して滾々として流露したのである。斯くの如き思想斯くの如き文章言辭は人の同情を喚起さざるを得ない。特に單純平直な若い人々の心に觸れて、之を覺醒し、之を與起せしめざるを得ないのである。君の思想は單に空虚な言辭では無い。冷かな理論では無い。貴い高深な實驗から得た實感であるのである。温かい軟らかな而も強みのある教訓である。是が何で人の内部琴線に觸れないで終るものであらうか。「新教育の讀者は先づ君の文章を読み、君の文章を読んだ人々は君を聘して其の直接の聲咳に接し、眼のあたり君によつてその實證を得んこと」を望んで居たのである。かくて君の思想上の感化は廣く教育者の間に傳播せられ、君を尊信する人々の數は次第に多きを加へつゝあつたのである。されば君が教育者とし

ての感化は、別に君が教育上の研究の結果であると云ふのでも無い。君が哲學上の思索の結果だと云ふのでも無い。全く君の實生活上に於ける沈痛深刻な經驗から得來つた實感實想の賜であると言はねばならぬ。實際君は多くを讀む云ふ風でもなかつた。君の書齋には別に多數の書物があると云うでも無い。唯一つの書架に數十冊の平凡な書物が淋しく列べられてある位に過ぎなかつた。又勿論教育の實驗場を有する譯でも無かつた。君の思想は外から借りて來たものでは無い。君自身の生命を賭し妻子を賭してこの實驗から得來つた貴重な材料から得たものに外ならぬものである。

世の中には色々の不幸艱難に遭遇して居るものが尠くない。たとひ夫れ等の人々が知識もあり文章も出來ると云ふ人々であつても、夫が必しも人を感化する様なことの出來るとは言はれない。況して多くの人々は重り來る不幸に堪へ得ないで、心神沮喪して、早く世を辭する人も極めて多いことである。然るに修吾君は常人では到底堪ふることの出來ない試練によく、堪へ得たのみでなく、悲惨な生涯の間に於て、南船北馬、文章に、講演に、よく大きな活動をなして人をして其の思想教訓に渴仰せしむるこゝが出来たのは、何故であらうか。試練に負けないで、却つて之を自分の用に供したのは何故であらうか。是は全く君の本來の性質によると云ふの外は無いと思ふ。

四

修吾君の幼時の生活は私は知らない。私の修吾君を知つたのは君が福岡師範の時代である。私が福岡師範の教諭として同校に居た時代からのことである。されど修吾君が時折私にその幼時の事を語つて居た處によると、幼少の頃は、極めて内氣な大人しい可愛いらしい兒であつたらしい。君の幼時の寫真を見るとフツクリ肥えて美しい少年である。然し幼少の時から文章は甘い方で久留米中學の時代から雑誌なまに投書をして居たさうで、よく夫が掲載されて居たことを語つて居た。此の雑誌の投書に就ては君の性格を窺ふべき一話がある。夫は福岡師範の一年生時代のことであつた。女子部の一生徒がある事件で退學させられたことがあつた。此の女子は將來の方向に迷つて遂に博多の柳町と云ふ遊廓の一樓に身を沈めたと云ふことであつた。修吾君は別に此の婦人と何等の關係があつたと云ふのでは無い。又知己の間でも無かつたのであるが、唯其の事實が如何にも氣の毒ださ云ふので、遂に其の事實を書いて學校の處置の冷酷なことを非難して、之を或る少年雑誌に投書した。雑誌は之を掲載した。そこで是が問題となつて學校では三浦と云ふ生徒は如何にも不都合だ。學校に居ながら學校の非難をすると云ふのは怪しからぬと云ふので退學にも處し兼ねましき有様で

あつたが、三浦を呼び出して能く聞き糺して見ると別に何等學校に對して悪意があつて遣つたことでは無く、唯其の事實を耳にして、其の婦人の境遇に同情して、之を記述し、夫に對する君の實感を有りの儘に述べたと云ふに過ぎなかつたのである。學校の議は沙汰止みになつたと云ふことである。要するに君は何處迄も美はしい感情の人で優しい性質の人であつた。そして一旦かき感じたことは其の事について再思する暇もなく、直に實行すると云ふ風の人であつた。思想的行爲の人でなくて衝動的行爲をする人であつた。感情の美しい優しかつたことは常に婦人に對する同情の念となつて表はれて來て居る。君が鹿兒島師範に居た時でも、君に對して最も尊敬信頼の念の厚かつたのは女子部の生徒であつた。君は、君がよく私に話して居た所である。ある女子が卒業して大島に赴任するのを慰めて送つて遣つたので、其の婦人から非常に信頼されて居たことなども語つて居た。君が始めの夫人であつた、かの美しい親切な浪子さんを迎へたのも、全く君の感情の美しい賜であつた。夫は君が高等師範在學中夏の休みには三四週間か一ヶ月許りは私の姫路の宅に遊んで行くのが例であつた。其の時泥谷良次郎君が矢張り姫路師範に勤められて居たので、始終一緒に話などする機會があつた。其の話をする間に泥谷君は修吾君の美はしい感情に惚れ込んで、其の夫人の妹である浪子さんを娶はすることに話が纏まつたのである。君の文章演説に現はれる思想に一種の美はし

い優さしい温みのある感情が認められるのも實に君の此の性格によるのである。あの同文館から發行せらる、「小學校」に熊谷鬼堂氏が修吾君を、絹糸の様な感じのする思想と言つて居られるのは實によく評し得た言葉であると私は感心して見たのである。私は修吾君の父上については何等知る所が無いから君が父上から如何なる性質を遺傳せられ如何なる感化を得て居るかは知らぬが、君の私に話して居た言葉によると其の父上は成る程人のよさ、うな性質の人であつたやうに思ふ。然るに母上は私は充分によく知つて居る。私は君の受け得た此の美はしい優しい感情は母から受けついただけのものでは無いかと思ふ。母上は寧ろ小柄な老人で、比較的に蚤世の良人が残した三人の遺兒を育て上げて來た随分苦勞した人であるが、頗る柔しい愛嬌のい、人であつた。そして修吾君の病中から妻君の亡くなられた後に至るまで、老體をも厭はず、家事の取貽ひ子供の世話まで忠實くしく働いた實に忠實な婦人であつた。

五

修吾君は決して弱い人間では無かつた。絹糸は軟かい手觸りの糸ではあるが切らうとしても中々切れない強い糸である。其の通りに三浦君の美しい柔しい感情の中にも凜然として犯す可からざる

一種の氣概があつて夫が中々に強かつたことは明かに認められる。君が彼の重病にも打ち勝ち、襲ひ来る災厄を物ともしないで、よく十數年間各種の活動を續けて來たのは、實に此の強い一種の氣分によるのである。君が此の強い氣分は劍道によりてよく發現されて居る。福岡師範時代から君はよく擊劔を遣つて居た。福岡師範では恐らく一流の遣ひ手であつたであらう。東京に來てもよく遣つて居た。同窓の一人である岸高君は先夜修吾君の追悼會の節に、自分(岸高君)と三浦君とは全く正反對の性質であることを述べた後「唯一つ同じ道を辿つて來たのは劍道である。福岡師範でも東京高師でも、始終一緒に遣つて初段位の腕が出来て居た。然し此の擊劔も實は相反した性質を表はして居た。三浦君は何處迄も規則通りの姿勢で勝敗を眼中に置かず、立派な打込み方であつたが自分は勝ちさへすれば宜しいと云ふ態度で遣つて居た。」云ふ話をされたが、夫は實に面白い話で、又よく實際を穿つて居たことであつた。修吾君の擊劔は姿勢のいゝ、實に立派な擊劔であつた。そして岸高君の言つて居た様に、決して少しも卑怯の振舞などは無かつた。中々強い處があつたあの優しい人にこんな風かと思ふ位であつたが、夫は三浦君の性質を知つて居さへすれば、別に不思議でも何でも無い。強い所が無くては何であの病氣に打ち勝たれよう。何で矢繼早に來る災厄に打ち勝たれよう。清貧に安んじて靜に困難を切り抜けて行くと云ふことは其處に餘程の強みが無くては

ならぬと思ふ。そして私は君の母上に明かに此の強みを認めるのであつた。八十幾歳かで、靜かに大人しく君の貧乏世帯を引き受けて居られた母上の魂の上にも、慥に此の閃めきを認るのであつた。君の或意味に於ける成功した一生は、實に此の強い氣分の賜に外ならぬと思はれる。嗚呼實に君は「絹糸のやうな」強い氣分を持つて居たのである。

六

此の強い氣分と優しい情とがこんがらつて、修吾君の例の美はしい温い中にも、中々根強い一種の性格を君に見出すやうになつたのである。されど此の相反した兩性は唯善良な方面許りを君に現はしたのでは無かつた。君は從順ない、子だとして、人に愛せられて居たと同時に、唯其の刹那の感情に従つて動いたのであつた。是が又君の一面であつた。動もすれば強情と見られる點をも現はして居た。前者は君をして事務的經營的の才幹に缺乏せしめて、多少氣儘など思はしむる所がある様にしたのである。福岡師範時代には器械體操が嫌ひだと云ふので遣らなかつた。夫を體操の教師が怒つて落第すると云ひ出して教員會の問題になつたが、是は幸にして私が大に辯護して兎に角進級せしめた。此の及落の問題は私の力で救ひ得られたが、併し其の他の方面のことは、君に同

情をして居た私の手にも救ふことが出来なかつた、と言ふのは、君の思ひ付き次第の、換言すれば、君の直我を言明する講演風の教授には、學生の方にては大變に信仰するものがある一方には、教科書を離れて無計劃で遣つてのけて行く君の教授には頗る満足しなかつた學生のあつたことも事實である。是は寧ろ眞面目な着實な方面の人々に多かつたのである。君は實際計劃的科學的の仕事には向かなかつた人であつた。講演的論文的の方面に適した人であつた。學校時代に於て多くの生徒の信仰を集むることが出来なかつたにも拘らず、記者時代には却つて成功した所があつたのは、全く此の特性によるのであると思はれる。君は狭い窮窟な教室の教育者では無い。廣い自由な文壇上の教育者であつた。君が姫路師範の主事に失敗したのも此の性質の結果であつた。鹿兒島師範時代にも、一部學生の尊信を受け得たに拘らず、學校當局者からは餘り多くを期せられて居なかつたのも、亦全く之が爲であつた。併し此の刹那の感情に従つて動くと言ふ性質は、猶又君の爲に重大な結果を齎らして居ることを忘れてはならぬ。夫は君の致命傷であつた例の宿痾が矢張り君の刹那主義に原因して居ると思ふことである。尠くとも君の病氣の再發或は三發は、全く君に連續的な抑制的な方面が缺けて居た所から起つたものであると私は確信して居るのである。肺結核の發病しない中から胃腸は頗る悪るかつたが、之に對する連續的の自制は殆ど出来なかつた。發病後と雖も病の著しく昂進した際には充分に靜養もしたが、少しく病が忘ると、又病氣の身にあるを知らない様に、酒も呑めば煙草も吹うて、随分不養生をした。其の結果として少しくするに亦再發し三發すると云ふ風であつた。で、君の病氣は君自身でわざと製造した様なものである。君は常に病氣には負けない病氣を征服すると言つて自慢して居たが、併し私は又君に「君は自ら病氣を製造するのだ」と言つて居た。併し君の病氣が特殊の教育家として君の成功をなさしめたとすれば、君の成功は全然君自身力によるものであると言つても差支は無い。のみならず、君の此の性質も強ち君に取つて不利益なものでも無かつたのである。併し普通の情から考へればこんな性格を君が有して居たと云ふことは、君に對しては實に氣の毒なことである。

七

今一つ此の事が君に對して煩をなして居ることがある。夫は外でも無い。他の人が動もすれば君に對して、忘恩の人、自利的人だと考へることである。是は君の刹那主義から見ればさもあるべきことで、其の考は常に現在のことを以つて満されて居るのは言ふ迄もない。従つて現在の感じに従つて動く。現在の事許りで事物を判斷する其處で動もすれば忘恩的ともなり、私利的にも見える

やうになる。けれど之は決して悪意から出たことでは無い。其の心理傾向が自然とそんな風に傾いて来るからの事である。嘗て君の友人が私に對して「三浦も實に不都合な奴だ。先主からあれ丈けの恩を受けて居つて其の著書中に先生を謗つて居るが實に怪しからぬ事だ」と言つたことがある。併し私は「夫は事實であらうが、併し夫は人々の見る所によつて違ふものだから、そんな事はどうでもよいでは無いか」と答へて置いた。或る一流の武人的氣質の人からは、こんな所から誤解を受けることもあるのは已むを得ない。併し夫は君の悪意から起るものでなく、寧ろ君の性質たる利那利那の感じが、筆にも、行にも、現はるゝものであるからの事だと私には考へられる。

どちらかと言へば、修吾君は愛情には細かな方で、前に述べた福岡師範の女子部生徒の境遇に同情を禁ずることが出来なかつたり、鹿兒島師範の女生徒に注いだ同情となつたり、前後二人の妻君に對する親切の如き、皆之を示して居る。特に昨年今の夫人まつ子女史が重病の爲に入院せらるるや、自分の重き痲苦をも忍んで看護に従事し、最後に病院に迎へに行つた時の如きは、自分が却つて大學で略血して、醫師の厄介になつた程であつた。君は亦聖書に深き趣味を有して若い時にはよく之を愛讀して居た。又佛教特に眞宗の教義についても渴仰する所があつた。されど是とても決して深く研究を重ねると云ふ風でも無く、又凝り固まつた信者でも無かつた。始めは基督教の信者ら

しくもあつたが、實に酒も呑めば、煙草も喫ふと云ふフリー、シンカーであつた。而も其の教への基本である慈善博愛の精神は君の最も愛好する方面であつたのである。されば私は君を或る一定の信仰を有する人としては見ない。君が是等の宗教上の書籍を繕いて居たのは堅い信者として敬虔の情よりは、寧ろ「カルチュア」を以て之を讀んで居たものと推察するが當然であると思ふ。君は決して堅固な信仰を有して居た人では無かつたのである。唯博愛人道等の諸徳は君の性質の深く共鳴する所の思想で、君は之を味はんが爲に讀んだのであらう。君は何處迄も自利的の卑むべき性質の人では無かつた。唯君をしてかゝる色彩を多少帯ばしむるに至つたのは、君が感情的の人で、利那の刺戟に動かされて居たからである。君は何處迄も文士の性質を享けて生れたのであつた。

八

修吾君が、異彩ある教育家として成功した一つの要素は實に此の文士的の特徴であつた。君は幼少の時からして文學が好きであつた。又上手であつたことは前に述べた通りである。福岡師範時代には、數學や理科には趣味を有たないで、教育とか地理とか歴史とかには興趣を見出して居た。高等師範時代にはよく「ウォルウオーズ」や、「ホーリーバイブル」やなぎを耽讀して、餘り學科の方

には勉めなかつたと云ふ事である。卒業後に於ても、學問の研究に没頭すると云ふが如きことは無かつた。其の讀む所のものは多くは文學に關するもので、梁川の文などは好んで玩味したものであつた。之は實に君の成功の一大要素であつたのである。君の文は漂渺たる氣高きがあると共に、又温みのある氣のおけない様な心持のする文章であつた。其の譯著「愛の學校」は翻譯文の模範として數へられ、文部省の編輯官であつた八波則吉氏は非常に之を推奨し、又其の文をも國語讀本中にも採用して居られるのである。氏の「愛の學校」の著者にと云ふ雜誌「小學校」の論文は、修吾君の死をも知らないで寄稿せられたものであると云ふことであるが、惜いことには、著者をして此の言を聞くに至らしめなかつたことである。此の伊太利の名著を我國に紹介した著者の名文は、原著者に對して決して耻しからぬものであると共に、此の一篇のみでも修吾君の名を不朽に垂れしむるのである。此の書については面白い逸話がある、其の譯成るや君は此の處女作をして榮えある装をして世に出でしめようと云ふ希望から、時の兵庫縣知事服部一三氏の題言を求めたいと云ふので、私に紹介を願うた。私は請はるゝまゝに夫を與へた。修吾君は此の紹介狀を持つて知事官邸を訪ねて題言を請うた。服部氏は大に怒つて、折角書いた書を引き裂いたと云ふ事である。今となつては寧ろ此の題言が無いのが結局増しであつた。又是と相類した一挿話もある。夫は始めての文士とし

ての作なれば、世人の注目を引かんが爲に、徳富蘆花氏に請うて、合譯のことにしようとしたが、蘆花氏から斷然斷られて、唯序文のみを書いて貰ふこととなつた。是も寧ろ生中合譯などとしなかつた方が何れ程宜しいかも知れないのである。兎に角こんな風で此の名譯に全く三浦修吾の名を以つて世に行はれて持て囃さるゝに至つたことは、修吾君の爲に賀すべきことである。

君は幼時から内氣で寧孤獨を好む方であつたが、夫が生活にも文章にも表はれで、別に華美な色彩は君の文章には認められない。又其の生活に於ても清貧を樂みつゝ、別に世に求むる所も無かつたのは、君の思想をして俗離れのした漂渺たる趣あらしめたのである。一寸俗抜けのした氣高きが感ぜられるのは君の此の性質から來たのであると思ふ。君は此時健脚でよく郊外に散策を試みて居たが是も君が此の性質から來たもので、夫は又よく君の文に現はれて居る。

今一つ君の文に逃すべからざる所で、而も君の性質の一特徴とも言べきは、君の文章が誠に奇麗で一點の邪氣の無いことである。君の性質は寧ろ潔癖に近い程清潔を好んだのである。君の室に這入つて見れば、机上と云ひ、書架と言ひ、一點の塵をも止めない。而も筆はチャント筆架にかけられ、書物は順序よく規丁面に並べられてある。其の上君の愛らしいそして無邪氣な性質を表象する何等かの愛らしい飾物がいつか机にあつた。本當に君の書齋は君の文章其の儘であると言ふべきで

ある。

「文は人なり」である。君の文は實は君の人格のすべてを反映したものである。君の文章を味へば君の性格はスツカリ現はれて居る。夫に君の悲愴な生涯から得た深刻な實感が織り込まれて居るのである。此の關係をよく呑み込で君の文を見るならば、單に文字の上に現はれて居る意義以外、更に、より深い、よりの確な味が味はれるであらう。要するに君の文は君の全性格の現はれである。天性も経験も盡く君の其の儘反映して居るのである。そして君をして成功した一教育家として誠に異彩を放つ爲に組み成れたものである。(完)

三浦修吾全集上巻目次

愛の學校

十月の卷

目	次	1
始業日……………	受持の先生……………	三
災難……………	カラブリアの少年……………	五
	同窓の友人……………	八
	義侠なる行爲……………	一〇
	我が女先生……………	一四
	貧民窟……………	一六
		一九

學校……………一二二

少年愛國家(月並講話)……………一二四

烟突掃除人……………一二七

萬靈節……………二一九

十一月の巻

親友ガロリン君……………三二二

炭賣と紳士……………三三四

弟の女先生……………三三六

我が母上……………三三九

親友コレツタイ君……………三四一

校長先生……………三四六

兵士……………三四九

ネリー君の擁護者……………三五一

級長……………五四

少年斥候(月並講話)……………五六

貧民……………六三

十二月の巻

商法人……………六六

虛榮心……………六八

初雪……………七一

『石屋さん』……………七三

雪球……………七五

女教師……………七八

負傷者訪問……………八〇

少年筆耕(月並講話)……………八二

鐵石心……………九二

感 恩……………九五

一月の巻

目 次

助手先生……………九七

スタルデイ君の圖書室……………九九

鍛冶屋の息子……………一〇一

友人の來訪……………一〇四

ヴイツトリオ、エマヌエレ王の大葬……………一〇六

フランテイ君の放校……………一〇八

少年鼓手(月並講話)……………一一一

愛 國……………一二二

嫉 妬……………一二四

フランテイ君の母……………一二五

希 望……………一二九

二月の巻

目 次

賞牌授與……………一三二

決 心……………一三五

玩具の汽車……………一三七

高 慢……………一四〇

勞働者の負傷……………一四二

囚 人……………一四五

爺の看病(月並講話)……………一四九

鍛冶工場……………一六二

幼い藝人……………一六五

謝肉祭の木目……………一七〇

盲 兒……………一七三

先生の病氣……………一八一

街路……………一八四

三月の巻

夜學校……………一八七

喧嘩……………一八九

兒童の父母……………一九二

七十八號の囚人……………一九四

小兒の死……………一九七

三月十四日の前夜……………一九九

賞品授與式……………二〇一

争ひ……………二〇七

僕の姉さん……………二一〇

ロマグナの血(月並講話)……………二一二

病床についた「石屋さん」……………二二三

四月の巻

カプール伯……………二二七

春……………二三一

ウムベルト王……………二三三

幼児院……………二四〇

體操……………二四四

老教師……………二四八

全快……………二六二

勞働者中に友人は居る……………二六五

ガロンの母……………二六七

ギウセツベ、マディーニ……………二六九

少年勳章を受く(月並講話)……………二七二

五月の巻

畸形児……………二七九
 犠牲……………二八一
 火災……………二八五
 母を尋ねて三千里を行く(月並講話)……………二九〇
 夏……………三三六
 詩……………三三八
 舞臺……………三四一

六月の巻

ガリバルディー將軍……………三五五
 軍隊……………三五七
 伊太利……………三五九

七月の巻

九十度の暑さ……………三六一
 僕の父さん……………三六四
 田舎へ……………三六六
 労働者への賞品授與式……………三七〇
 女先生の死去……………三七三
 感謝……………三七六
 難破船(最後の月並講話)……………三七八

我が母の最後の教……………三八九
 試験……………二九一
 最後の試験……………三九四
 告別……………三九七

林檎の味

目次	頁
一 林檎の味	四〇五
二 土	四〇七
三 最大抵抗に向つて	四二二
四 人様々	四一九
五 老儒者	四一九
六 月と兎	四二一
七 かさなる不運	四二二
八 大きな石の顔	四二六
九 新橋山莊記	四三一
一〇 批評と理解	四三四
一一 獨創と獨斷	四三五
一二 畫神草坪	四三六

目次	頁
一三 教壇上で柏餅	四三八
一四 敵	四三八
一五 砂糖の味	四四〇
一六 眞理	四四〇
一七 新しき力	四四一
一八 襖が逆さだ	四四一
一九 蘇鐵	四四二
二〇 私の願ひ	四四二
二一 自警	四四三
二二 愛の眼	四四四
二三 御初穂	四四六
二四 二度目の花	四四九
二五 月光	四五七
二六 秋の風	四五八

二七	武蔵野の一角に立ちて	四六四
二八	光悦の母	四六六
二九	愛山文集を繕く	四六七
三〇	鳴濱村	四六八
三一	瀧山十太夫翁	四八〇
三二	靜岡行	四八七
三三	田沼行	四九六
三四	白河行	五〇七
三五	入 峽	五一五
三六	兒童心身の鍛練	五一八
三七	箱根行	五三八
三八	三浦半島と九十九里濱	五四八
三九	松江まで	五五七
四〇	旅の十菴	五七〇

四一	松山ゆき	五八九
四二	私の行つて見たき所	五九四
四三	古 鐘	六〇〇
四四	豚	六〇二
四五	犬と影	六〇六
四六	落合村より	六一〇
四七	猫	六一五
四八	東京郊外より	六二五
四九	信州へ	六三二
五〇	鐵の蓋	六三九
五一	蟲の音	六四一



の
學
校

愛
知
縣
立
學
校

徳富蘆花先生序

本書の中に、試験場で學生が互に教へ合ひつこをする條があるから、それにちなんだ余の懺悔を書く。

數年前、或る新聞の翻譯係を勤めて居た頃、余はある日、北米ハアバア週報でリンカルの逸話を讀んだ。リンカルと同じ小學校に居たお婆さんの話に、婆さんまだ十歳前後の小娘で、ある時綴字スペルینگクラスの級で、何とか云ふ語の *i* の字が思ひ出せないで、ぐつと詰まつた。が不圖見ると、首席に圖ぬけてひよる長いアベ・リンカルが、此方見いゝニコニコ笑ひながら、チヨイゝと己が眼を指して居る、眼 *i* に通ずで、はつと思ひついた小娘の婆さんは、首尾よく正當な答をした。其時の嬉しさを終生忘れぬと、婆さんは語つて居る。

讀みゝ余は眞赤になつた。

余が十一の春、郷里熊本で初めて小學校の聯合競争と云ふ事があつて、余の級から、余と次席の本庄と云ふ子が出た。師範學校の大講堂で、大勢列んで、先生が呼ぶ名の

順番に立上つて、大聲に日本略史の讀方と講義をやる。余は事なく濟むだ。借、本庄の番になつて立上つたが、淳仁天皇の淳の字の音讀を忘れ、余の方に窃と頭をさし寄せ、「カウカ、カウ仁天皇か」と小聲にきいた。無論小聲は先生に聞こえぬ程の距離であつたが、余はモジ／＼して教へなかつた。其内、先生に促されて、本庄は大音に「カウ仁天皇」と讀み上げ、首尾よく黒星一つ頂戴し、其の結果、縣令が一々呼び出して手渡す石盤の御褒美にも、余は預かつたが、本庄は素手でスゴ／＼歸つた。

何故余は教へなかつたか。多分試験場の内證事は不正な事と思つたのであらう。余も多少濟まぬ事をした。教へればよかつた、氣の毒な事をした、と思ひは思つたであらう。兎に角十八九年も記憶の底深く埋伏して居た一場の出來事は、偶然の機縁に觸れて電光石火に腦中に爆發し、思はず余を赤面せしめたのであつた。

リンカンは近代の人物中、余の最も好きな人間の一入である。彼が慈眼愛腸、亞米利加を引背負ふて立つた大慈大悲の親心は、一寸した右の婆さんの逸話にも看取されるではないか。思ひがけない處で一痛棒を吃はされ、余は自己の怯懦と輕薄を慙ぢた。何でもない、唯愛の有無である。

勿論教場道徳から云へば、教師の眼をかすめて教へるも教はるも共に僻事であらう。

尋常勝負の場合に優勝劣敗は當然自然で、姑息な人情なんかはもとより禁物であらねばならぬ。苟くも不正な事をばせぬ、また他にもさせぬ。立派なものだ。義理は其れで立つ。但、呆氣ないものは義理、面白くないものも亦義理である。規律を守り、義理を缺かぬ、たゞ其れだけでは、我等は些の生命も嬉しみも無い。所謂「儀文は殺し、靈は活かす」で、我等の心靈は法律や約束の繩量内に鞠躬如として、唯備々焉と左視右顧上踏下踰するに耐へ得ない。愛するに到つて、自己を捨つるに到つて、人の罪を負ふに到つて、はじめて衷心の愉快はあり得るのである。十八九年の間、余が暗い心の底に鬱結して居た後悔の塊を見れば、法を犯す者の刑は必ずしもさもなくて、愛せぬ者の罰は、實に地獄の苦である。

我日本人は義強い國民である。正邪是非の辨別に於て個人間にも國際にも滅多に誤まることはない。若し日本人を動かす動力は何かと云はゞ、其れは義理の觀念と云つても差支ないと思ふ。義理は立派なもの、單に利害に動くよりも、どれだけ優つて居るかも知れぬ。然しながら其の立派な義理すらも、要するに第二義のもので、此關門を越えて、更に靈妙快裕な天地があることを知らねばならぬ。其は仁の世界、愛の天地、規律繩量、時間空間の羈束を超越して自由自在に動く愛の大宇宙。

「神は愛也、愛は神也」。我等は生きねばならぬ。愛に生きねばならぬ。三浦君、名著「クオレ」を翻譯し、「愛の學校」と題し、廣く世の子弟と、父兄及び教育者に讀ませ、我邦人に缺如しがちな愛の培養に資せんとせらるるは、誠に喜ばしい事である。

宇宙は愛の學校である。我等は、大人も子供も此の學校に於て愛の課程を學ばねばならぬ。

明治四十五年五月廿一日 滋雨膏の如く

滿目の縁にしたゝる朝

武藏野粕谷の里にて

徳富健次郎

岡倉先生の書翰

「クオレ」御翻譯中の由、何よりの事に存じ候。同書は情の方面の教育に、極めて有力なる少年の讀物として廣く諸國語に譯せられをり、本國にても、一九〇三年に野生が伊太利にて一本を購ひ候節、既に一百八十二(千部)版に達し居り候。著者は、元は軍人にて伊國の統一戦争後、隱退、専ら文筆を事とす。嗣子を失ひて落膽の餘、大に健康を損じ目下はミラノ市の病床にありと存す。或は既に物故せるやも計りがたく候。Cuore とは伊語にて「心」の義 Courage, Cordia の Caur 又 Cora(is) と同根の語に候。發音はクオレと日本讀に譯すべきなり。英譯本に、Come と、上に、ノ標を附せるは、クオアと英語讀みにせらるゝを避けん爲の譯者の注意にすぎず、原語は Cuore に候。

十月の巻

始業日

十七日月曜日

始 今日から、學校が始まつた。田舎の三ヶ月は、夢の間に過ぎて仕舞つて、僕は又このチャーリンの學校に歸つて來た。今朝母さんに連れられて、學校に行く時には、田舎の事ばかり思つて居た。何處の町にも學校の生徒が一杯で、本屋の前には生徒の父兄が、押し合ふ様にして、革袋や筆記帳などを買つて居た。學校の前にも、人が一杯立ち込んで居るので、小使や、巡查が、一生懸命になつて、道を開けようとして居た。玄關の所で、誰か僕の肩にさはつた者があつた。それは僕の三年級の時の先生であつた。赤い髪の縮れた、愉快さうな顔をした先生だ。先生は僕の顔を見て、

『もうお別れかね、エンリコさん。』

その事は、僕も善く分つて居たが、先生に斯う言はれて、今更悲しくなつて仕舞つた。僕等は漸くの事で、中にはいつた。貴婦人方や、紳士方や、職人や、お神さん達や、役人や、尼さんや、下女下男などが、みな片手に子供を引き、片手に成績簿を抱へて、控所や、階段のあたりに、一杯に

なつて居た。ガヤ／＼ガヤ／＼大騒動をして、まるで芝居小屋へでもはいつた様だ。僕は、久しぶりにあの大きい控所を見た時には、大變嬉しかつた。三年の間、毎日この室を通りぬけて、教場に通つたのだもの。僕の二年級の時の女の先生が、僕を見つけて、

「エンリコさん、あなたは今度から二階の室に行つてお仕舞ひですね。もう私の教場の前は通らないのですね！」

斯う言つて悲しさうに僕を見つめられた。校長先生は婦人達に取りまかれてあつたが、前に見た時よりは、頭が白くなつた様だ。生徒等も、夏よりは、餘程大きく、強さうになつて居た。一年級に始めて入學する小さい子供等は、教場にはいらなと言つて、驢馬の様にすね廻つて居た。無理に引つ張つて入れると、席を離れて逃げ出す者もあり、親達が見えなくなつたので、泣き出す者もある。親達は歸つて来て、なだめるやら、叱るやら、先生方も手の付け様が無いので、困つて居られた。

僕の弟は、デルカライ先生といふ女の先生の組に入れられ、僕は二階のペルボニ先生の教場にやられた。午前十時に皆教場にはいつた。僕等の級は、皆で五十五人、三年級から一緒に上つて来たのは、たつた十五六人しか居ない。何時でも一等賞を取るデロシイ君も其中に居る。夏休みに駆け

廻つて遊んだ森や山の事を思ひ出すと、學校の中は狭くつて、暗くつて、僕はいやだ。僕は亦、三年級の時の先生の事を思ひ出した。何時でもニコニコ笑つて居る善い先生であつた。僕等と間違ふ位小さな先生だつた。あの先生の赤い縮れ髪を、もう見られないと思ふと悲しくなる。今度の先生は、背の高い、鬚の無い、白髪交りの髪が長くのびて居て、額に縦に通つた皺があつて聲の大きい方だ。僕等を一人々々ジロ／＼見つめられる目付は、胸の中まで見透される様だ。そして一向笑はぬ先生だ。僕は斯う思つた、

「ア、やつと一日済んだ。まだ九ヶ月ある。ア、試験、ア、勉強、いやな事だ！」

教場から出ると、早く母さんに逢ひたくて／＼ならなかつた、飛んで行つて母さんの手に接吻した。母さんは斯う言つた、

「エンリコや、元氣を出すのですよ。私も一緒に勉強するのだからね。」

僕は機嫌よく家に歸つたけれど、あの深切な愉快な先生が居られないのだから、學校は、もう以前の様に面白くは無くなつた。

今日から、今度の先生も、やはり好きになつた。僕等が教場にはいつた時に、先生はもう御自分の席に着いて居られた。先生の前學年の受持生徒等が、入口からのぞいて、挨拶をして居た。「先生、お早う！」「ベルボニ先生、お早う！」と口々に云ふ。中には教場にはいつて来て、先生の手にさはつて、又急いで出て行くものもあつた。皆この先生を慕つて、今年もこの先生に教はりたいと皆思つて居るのだといふことがよくわかつた。先生も『御早う。』と返事をして、生徒の差し出した手を取つて振られた。けれど生徒の顔は見られない。挨拶する毎に、笑みはされたけれども額に縦皺を寄せてすぐに眞面目な顔になつてしまはれる。そして、その顔を窓の方にそむけて、向うの家根の屋根を見つめて居られた。生徒に挨拶をされるのが、却つて苦しい風に見えた。それが濟むと、先生は又僕等を一人々々注意して見渡された。僕等に書取をさせ乍ら、教壇に下りて、机の間を歩き廻つて居られたが、顔に赤い粒々の出来て居る一人の生徒を見付けて、書取を中止して、兩手に其子の顔を挟んで、調べて見られた。そしてどうしたのかと聞いて、熱が無いか額にさはつて見られた。

其時先生の後になつて居る一人の子がフイと腰掛の上に立ち上つて、操り人形をやり出した。先生が不意に後を向かれたので、その子は落ちる様に腰掛に着いて、首を俛れて、叱られるのを待つ

て居た。先生は只その子の頭に手を當て、「又とそんな事しないのですよ。」と言はれた。それであつた。

書取を終つてから、先生は又暫く黙つて僕等を見て居られたが、やがて、大層靜かに、太い、親切な聲で、斯う言はれた、――

受持の先生

「皆さん。私共は是から、この一年間を一緒に過すのですから、これを善く過さうでは有りませんか。おとなしくして勉強しなさい。私には一人の家族もありません。皆さんが私の家族です。去年までは母が生きて居ましたが、母が死んでからは私は全く獨身者です。皆さんの外にこの世界中に私の家族は一人も有りません。皆さんの外に私が愛するものは有りません。皆さんは私の子供です。私も皆さんを愛しますから、皆さんも私を好いて下さい。私は一人も罰に加へたく無いのです。どうぞ、皆さんの眞心を私に見せて下さい。皆さんは全級一家族となつて私の慰藉となり、私の誇となつて下さい。私は今、皆さんに、口で約束して下さいとは申しませんが、皆さんはもう心の中で「ハイ」と答へて居なされるのですから、私は爰に御禮を申します。」

この時小使が放課の知らせをして來た。僕等は極めて徐かに席を離れた。あの腰掛の上に立つた子は、先生の側に行つて、戦ひ聲で、「先生、許して下さい。」と云つた。先生は其の子の額に接吻し

災 難

二十一日 金曜日

今朝、學校へ行く途中で、僕は父さんに、先生の言はれた事を話して居た。所が、フト氣が付いて見ると、街には人が一杯居て、それが學校の門の方へ押しかけて居るのであつた。父さんは俄かに斯う云つた、――

「何か事が起つたな。學年の初から縁起でもない。」

僕等は漸う學校の中へはいつた。人が一杯立ち込んで居て、「可哀さうですな、ロベテイさんが。」と云ふ聲が聞えた。大勢の中には巡査の帽子も見え、校長先生の禿けた頭も見えた。すると又高帽をかぶつた一人の紳士がはいつて來た。「御醫者さんが見えた。」と言ふ。父さんは一人の先生に向つて「一體何事です。」と聞いた。「車に轢かれたのです。」と先生が答へられた。「足が碎けたのです。」と又一人の先生が言はれた。ロベテイといふ三年級の生徒が學校へ來る途中、一年生の小さい子供がお母さんの手を離れて駆け出し、街の真中に倒れた所へ、鐵道馬車が來か、つて、其の子を轢かうとする所を、ロベテイが大膽に飛び出して、無事に救ひ出した迄は善かつたが、自分の足を引く間が

愛の學校

なくて、たうとう車輪の下に轢かれたのださうだ。ロベテイは砲兵大尉の子だ。此の話を聞いて居ると、一人の婦人が狂氣の様に駆け来て、人を押し分けて中にはいつた。これはロベテイのお母さんだ。さうする中に、又一人の婦人が飛んで行つて、ロベテイのお母さんの頸に抱きついて嘔泣をした。それは助けられた子のお母さんであつた。二人の婦人は室の中へ飛んで行つた。とりのぼせた聲で、「オ、ギュリオやく〜」と言ふのが聞えた。

この時馬車が一臺玄關に着いた。やがて校長先生がロベテイを抱いて出て來られた。ロベテイは校長先生の肩に頭をもたせて居た。顔は蒼ざめて、眼はつぶつて居た。人々は皆靜まりかへつた。

ロベテイのお母さんの嘔泣の聲がきこえた。暫くして校長先生は抱いて居る子を差しあけて皆に見せられた。父兄も、生徒等も先生方も口々に「ロベテイさん、偉いぞ!」とさ、やいた。近くに居る先生方や生徒等は、ロベテイの手に接吻した。ロベテイは眼を見開いて、「僕の革袋を」といふ。助けられた子の母親が、それを持ってロベテイに見せて、涙をこぼしながら、「私に持たせて下さい、どうぞ、私に持つて行かせて下さいね。」と云ふ。その時ロベテイのお母さんの顔に微笑が見えた。それから、その人達は出て行つてロベテイを工合よく馬車に乗せると、馬車が徐かに動いて行つた。僕等は、皆黙つて教場にはいつた。

カラブリアの少年

二十三日 土曜日

ロベティはたうさう撞木杖に倚つて歩かねばならぬ様になつた。昨日午後先生がこの事を僕等に話して居られた時に、校長先生が見馴れぬ一人の少年を連れて教場に来られた。色の黒い、髪濃いの、眼の大きい、眉の厚い少年であつた。校長先生はその子を先生に引渡して、一二言何かさ、やいて出て行かれた。少年は大きい黒い眼で、周囲をギロ／＼見廻して居た。先生はその少年の手を取つて、僕等に向ひ、――

「皆さん、喜びなさい。今日、此處から五百哩以上離れた、カラブリアのレチオに生れた伊太利の少年がこの學校にはいつて來ました。こんな遠い所から來た人ですから、皆さんは殊にこの同胞を愛して下さい。この人の生れた所は、名所であります。伊太利の有名な人物の出た所で、又強健な労働者と、勇敢な軍人とを出す所です。我が國の中で風景の尤も美しい土地の一つで、大きな森林もあり、高い山岳もあり、住民は才能と勇氣とに富んで居るのです。皆さんは此の少年を親切に待遇して、自分の故郷を遠く隔て、居る事を忘れさせる様にして下さい。伊太利全國何處の學校に行つても、同胞ばかりであるといふ事を知らせて上げて下さい。」

斯う言つて先生は、伊太利の地圖を指して、カラブリアのレチオの位置を示された。それから又大きい聲で、「ユルネスト、デロシイさん。」と呼ばれた。――これは何時でも一等賞を取る子だ。――デロシイは立ち上つた。

「此處へ出なさい。」と先生が云はれると、席を離れて、カラブリアの少年の前に進んだ。

「あなたは級長だから、この新來の學友に對して歓迎の挨拶をなさい。カラブリアの少年に對してビードモントの少年を代表して御挨拶をなさい。」斯う言はれて、デロシイはその少年に抱きついて明瞭した聲で、「善くお出でなさいました。」と言ふ。少年は烈しく、デロシイの頬に接吻した。僕等は皆拍手喝采した。先生は、「靜かに、教場で手を拍つてはいけません。」と言はれたが、先生も矢張り、嬉しさうであつた。カラブリアの少年も喜んで居た。先生が席を指定せられると、少年はその腰掛についた。先生は又

「皆さん、私が今言つた事を、善く覚えて置きなさい。カラブリアの子供がチューリンに來ても、自分の家に居ると同じ思ひをなし、又チューリンの子供がカラブリアに行つても、少しも淋しいと思はぬ様にすな。實に、その爲に我が國は、五十年の間戦つたのであります。三萬の同胞がその爲に戦死したのです。それだから皆さんは互に相敬愛しなければなりません。若し自分等と

同じ地方に生れないといふので、此の學友に無禮を加へる様な者があつたら、その人は我が三色旗を仰ぎ見る資格の無い人であります。』

カラブリアの少年が席に着くと、隣席の生徒等は、ペンや鉛などを與る者もあり、又瑞西の郵便切手を與る者もあつた。

同窓の友人

二十五日 火曜日

カラブリアの少年に郵便切手をやつた子は、僕の一番好きなガローンといふ子だ。同級中で身體も一番大きく、年は十四歳で、頭の大きい、肩の廣い、笑顔の善い子であるが、大人のやうな考へを持つて居る人だ。僕は同窓の友人を大分おぼえた。コレツテイといふのも好きだ。茶色のズボンをはいて猫の皮の帽子を被つて、何時でも面白い事を言つて居る。父は薪屋で、千八百六十六年の戦役に、ウムベルト親王の部下に屬して戦つた人で、勳章を三つ持つて居るといふ事だ。ネリイといふのは氣の毒にも駝背で、身體が弱く、常に蒼い顔をして居る。又何時でも立派な服を着て居る。ゴオテイニといふ子が居る。僕の丁度前には「石屋さん」と仇名の附いた生徒が居る。これは石屋の子で、顔は林檎の様に圓く、鼻は小さい謎の様だ。兎の顔眞似をする事が、大層上手で、何時も

それで人を笑はせる。ボロ／＼に破れた帽子を被つて居るが、よくそれをハンケチの様に圓めて、ボツケットに入れて居る。「石屋さん」の側にガロフイといふ、瘦せて細長い、鼻が鼻の嘴の様に尖つた、眼の法外に小さいのが居る。この子は始終ベンやマツチ箱などを賣買したり、爪に字を書いて置いて、狡猾い事をやつたりする。それからカルロ、ノビスといふ高慢な少年紳士が居る。その兩側に僕と氣のあつた子が二人居る。一人は鍛冶屋の息子で、膝まである上着を着て、病人の様な蒼い顔をして居て、いつも物に怖ぢた様な様子をして、ちつとも笑つた事がない。今一人は、髪の赤い、片手が利かないので、頸の處からブラリと下つて居る子だ。父はアメリカに行つて居るとかで、母親が野菜を賣り歩いて居る。又、僕の左側に奇妙な子が居る。×タルデイといつて、背が低くて、肥つて居て、頸はまるで無い様だ。粗暴な子で、誰にも物を言つた事がない。何にも分らぬ様子だけれど、先生の話は瞬もせずに、眉根に皺を寄せて、口をしつかと結んで聞いて居る。先生の御話中に、人が物を言ひ掛けると、二度目位までは、黙つて居るが、三度目になると、腹を立て、足で蹴るのだ。その側に、無遠慮な、狡猾い顔をした子が控へて居る。其れはフランテイといふ子で、外の所で退校になつて來たんだと言ふ事だ。この外に大層よく似た二人の兄弟で、同じ様な服を着て同じ様な帽を被つて居る。是等の同窓の中で、容貌も一番立派で、一番才能のあるのは、無論デ

ロシイで、今年も一番になるに違ひない。けれど、僕は鍛冶屋の子の、病人の様なブレコシが好きだ。父親はあの子を打擲するさうだ。非常に内気で、人に物を言ひかける時とか、又はちよつと人にさはる時には、屹度「御免なさい。」と云ふ。そして親切らしい悲しさうな眼付で人を見つめる。併し、一番大きくて立派なのはガローンだ。

義侠なる行爲

二十六日 水曜日

ガローンがどんな人かといふ事は、今朝の出来事で分つた。僕は、二年級の時の女先生から、何時頃家に居るかと問はれてゐたので、少し遅れて、教場にはいつた。先生はまだ出て居られなかつた。見ると三四人の子供が、可哀さうに、あの髪の赤い、片腕の動かない、野菜賣の子のクロシイといふのを取りまいていぢめて居た。定規でつゝいたり、顔に栗の殻を投げ附けたり、片輪だの、化物だのと言つて罵つては、頸から腕のぶら下つて居る眞似をしたりするのであつた。クロシイは獨り腰掛の隅に青くなつて、どうぞ許して呉れと、頼む様な眼付で一人々々の顔を眺めて居た。周圍の者は益々つけ上つて、からかふので、クロシイも終には怒つて、顔を赤くして身震ひをして居た。するとフランテイといふ、あのいやな顔した子が、フイと腰掛の上に立つて、手に籠を下けて

居る様なこなしをして、クロシイのお母さんの眞似をした。このお母さんと云ふのは、能くクロシイを迎へに學校へ來たのであるが、今は病氣で床について居るさうだ。多くの生徒がよく知つて居るので、フランテイの身振りを見て笑ひ出した。それを見て、クロシイはクワツト怒つて、イキナリ其處にあるインキ壺を取り上げて、フランテイの頭を目がけて、投げつけた。フランテイが素早く身をかはしたので、インキ壺は、丁度その時はいつて來られた先生の胸に當つた。

皆自分の席に飛んで行つて、怖ろしさに黙つて居た。先生は顔色を變へてテーブルの所に行つて、嚴かな聲で「誰です？」と云はれた。一人も答へる者が無い。先生は、さらに聲を高くして「誰です？」

この時ガローンがクロシイを可哀さうに思つたのか、突然立つて、決心した様子で「私で御座います。」と云つた。先生はガロンを見つめて、又、あきれ返つて居る生徒等を見渡して、靜かに、「あなたでは無い。」と言はれた。

暫くして又、「決して罰を加へませんから、投げた人は立ちなさい。」と云はれた。クロシイは立つて、泣きながら、「子供等が私を撲つたり、いぢめたりしたのです。それで私は思はず氣が狂つて、それを投げましたのです。」と云つた。

「宜しい、此の人をいぢめた人は立ちなさい。」と云はれると、四人の生徒が立つて首を俛れた。
 「あなた方は、何の罪もない人を苦しめたのです。あなた方は、不幸な子を侮り、弱い者をいぢめました。あなた方は最も淺間しい、最も恥づべき行をしたのです。卑怯者です！」
 先生は斯う言つて、それから、ガローンの傍に行つてその腮の下に手を當て、俛れて居る首を上げさせ、眞直にその眼を見つめ、――

「あなたの精神は立派だ。」

ガローンは何か先生の耳に囁いた。先生は四人の犯罪者の方を向いて、出しぬけに、――
 「許します。」

我が女先生

二十七日 火曜日

僕が二年級の時に教はつた女先生は、約束を違へず今日訪ねて来て下さつた。一年ぶりに僕等は先生を家に迎へたので、皆大喜びで、もてなした。先生は以前と少しも變らず、帽子の周りに緑色の面被をかけて居られる。着物は極質素で、髪も繕はず、中々身の廻りを綺麗にして居なさる様な暇は無いのだ。去年よりは、少し顔の赤みが薄くなつた様だ。髪も、いくらか白くなつて、絶えず

咳嗽をせられる。

「して、お身體の工合は？先生、あなたはお身體にもつとお氣を附けなさらなくつては。」と母さんが言つた。

「何でも有りません。」と先生は喜ばしさうな、それでも何となく憂へを帯びた笑ひをして答へられた。

「先生は餘り、お聲が高すぎますよ。子供等の爲に、お身體を、餘りお使いなさり過ぎますわね。」と母さんが又言つた。

17 我が女先生

本當にさうだ。先生のお聲の聞えて居ない事は無い。僕は覺えて居るが、先生は始終、話しつつけて、一寸でもじつとして居られる事は無いので、生徒は傍目をする事も出来なかつた。先生は御自分の教へられた生徒を忘れなすつた事がない。何年も前に教へた生徒の名を皆覺えて居られる。月々の成績調査の時には、校長さんの所に行つて、其の成績を尋ねられるさうだ。時には學校の入口に生徒を待ち受けて、作文帳などを出させ、どの位進歩して居るか調べられる事もある。中學校に行つて居る人で、長いズボンを着いて、時計を下けて、先生に逢ひに来る人もある。今日、先生は受持の生徒を、繪畫展覽會に連れて行つて、その歸りに僕の家に立ち寄りられたのだ。僕等の時に

も、火曜日には何時でも博物館に連れて行つて、色々な物を説明して下すつたのだ。先生はあの頃よりは、餘程弱くなられた。それでも中々元気で、學校の事になると、いつも活々として話される。二年前に僕が大病で臥て居た時、先生が見舞に來て下すつたことがある。あの時僕が寢て居た寢臺を見たいと言はれた。それは今弟の寢臺になつて居る。先生は暫くそれを見て居られたが、何も言はれなかつた。先生はこれから受持の生徒を一人、見舞ひに行かねばならぬと急いで居られた。馬具匠の子で麻疹で臥て居るのださうだ。その上に先生は今晚中か、つて直さねばならぬ成績簿を抱へて居られた。それから又、日暮までに、ある商店のお神さんが算術を習ひに行くさうだ。

「ね、エンリコさん、」先生は出がけに、僕に向つて言はれた。「あなたは困難な問題が出來たり、長

い文章が書ける様になつても、やはり昔の女先生を好いてくれますか。」

斯う言つて、僕に接吻して下すつた。それから歸りがけに、階段の下から、今一度聲をかけて

「私を忘れないでゐて下さいよ、エンリコさん。」

あゝ親切な先生！僕はどうして／＼あなたを忘れるものですか。大人になつても矢張り先生を思ひ出して、學校へ訪ねて参ります。何處へ行つても、學校の傍を通つて、女教師の聲を聞いたら、何時でも、先生の御聲を聞く様な氣がして、先生に教はつた二年間の事を思ひ出すでせう。あゝ、二

年の間に、どんなに澤山の事を學びましたか、あの頃、先生はよく御病氣で弱つてお出だつたけれど、何時でも熱心に、僕等を可愛がつて教へて下すつた。僕等の文字に悪い癖がつくと、大層心配をせられた。試験係が僕等に質問をする時には、落ちつかぬ程心配をしておいでだつた。僕等が綺麗にして居ると、心から喜んで下すつた。始終母親になり代つて僕を親切にいたはつて下すつたあの善い先生を、僕が、どうして忘れるものですか。

貧民窟

二十八日 金曜日

昨日午後、母さんとミルヴィア姉さんと三人で、新聞に出て居た貧しい女に、布を持つて行つてやつた。僕がその布を携へ、姉さんが、その女の住所と名の頭字とを書いた紙を持つて行つた。僕等は大層高い家の屋根裏の部屋まで登ると、其處に長い廊下があつて、室が幾つもこれに通じて居る。母さんは、その一番終ひの室の戸を叩いた。戸が開いて、まだ年の若い、色の白い瘦せた女が出た。今までよく見たことのある女で、常の様に頭に青い頭巾を被つて居た。

「あなたが新聞に出て居るあの方ですか。」
と母さんが尋ねた。

「ハイ、左様で御座います。」

「それでは、此處に、布を少しばかり持つて参りましたから、どうか御取り下さい。」

女は大層喜んで、御禮の言ひ様が無いといふ様子であつた。この時、道具も何も無い、小暗い室の隅に、一人の子供が、向う向いて、椅子の前に屈んで、書き物をして居る様なのが、僕の目についた。よく見ると、矢張り書物をして居るので、椅子の上に紙を戴せて、インキ壺は床の上に置いて居るのだ。こんな暗い室で、どうして物が書けるのであらうかと思つて居るま、フトその子の赤い髪と、破れた上衣とに氣がついた。これはクロシイ——野菜賣の子の、片腕の利かないクロシイだといふ事が始めて分つた。母親が品物を片づけて居る際に、僕は母さんに、そつと、その事を言つた。

「叱ッ！」と母さんは言つた。「自分の母親が、自分の友達から、施物を貰つて居るのだと知れたら、恥ぢ入るだらう、黙つて御出でよ。」

けれど、此時、クロシイが後を見返つた。僕はどうしようかと思つた。クロシイは僕を見て、微笑した。母さんが僕の背をそつと突いた。僕は走つて行つてクロシイに抱きついた。クロシイは立つて僕の手を取つた。

クロシイの母は僕の母さんに向つて語つて居た。——

「私はこの子と二人きりで御座います。主人はこの七年といふもの、アメリカへ行つて居ますし、お負に私が病氣をしまして、もう野菜を賣り歩くことが出来ませんので、机も何も賣つて仕舞ひまして、この子が勉強するに差支へます。小さい燈もつける事が出来ないものですから、眼が悪くなるのです。それでも、有り難い事には、教科書や、筆記帳は市役所から給けて下さいますので、學校へも出す事が出来るのです。可愛さうに、學校が大層好きで御座いますけれど——本當に私の様な不幸な者はありません。」

母さんは巾着の中から、あり丈の金を出して與へ、クロシイに接吻して、泣かんばかりにして、出て行つた。そして僕に斯う言つてきかせた、——

「エンリコや、あの可哀さうな子を御覽よ。随分苦しい勉強をさせられて居るではないかね。お前なんか、何でも自由が利いて、それで居て勉強がつかいのだものね。ア、本當に、お前が一年の働きよりも、あの子の一日の働きの方が、何程偉いか知れない。あんな子こそ、一等賞を貰はねばならぬのだね。」

學 校

二十八日 金曜日

我が愛しきエンリコよ、お前は勉強が足りなくなつたのだね。母さんの言つた通りだ。私は、喜び勇んで學校に出かけて行く御前の姿を、未だに見た事がない。だがね、お聞きよ、若し學校に行かなかつたら、お前の毎日の暮しは、如何につまらない、退屈なものであらう。一週間もさうして過ごしたら、お前は又手を合はして、學校にやつて呉れと願ふに違ひない。遊びも毎日ではすぐに飽いて仕舞ふものだからね。

今日の世の中では、どんな人でも學問をせぬ者はない。考へて御覽、職工等は、一日の勞働がすんでから、夜學校に通つて居るではないか。町のお神さん達や、娘達も一週間働いて、日曜日には學校に行くでは無いか。兵士等は一日の勤務に勞れ果て、も、營内に歸つて書物を讀んで居るでは無いか。啞や盲でもやはり物を學んで居る。監獄の囚人でも同じく讀み書きの稽古をして居るでは無いか。

毎朝學校へ出かける時には、かういふ事を考へて見なさい。唯今、この市内で、自分と同じ様な三萬人の子供等が學校に出かけて居るのである。又同じ時刻に、世界各國幾千萬の兒童が學校

へ通うて居るのである。閑靜な田舎道を三々五々群をなして通つて居るのもあらう。雜沓な都會の市街を歩いて行くのもあらう。河や湖の岸に沿つて歩いて居るのもあらう。燃ゆるが様な太陽の直下を歩いてゐるものもあれば、霧の深い運河の上を短艇で通つて居るものもあらう。雪の上を橋に乗つて行くもの、谷を渡り、丘を越えて行くもの、森林や、急流を横ぎつて、寂しい山路を辿つてゐるもの、馬に乗つて茫々たる野を行くものもあるであらう。一人で行くもの、二人連れ立つて行くものもあれば、或は群をなし列を作つて行くものもあり、様々の服裝をし、様々の國語を語り、氷に鎖されたる露西亞の果から、椰子樹の陰深きアラビアの果に至るまで幾千萬とも知れぬ兒童が、皆書物を抱えて同じ様な事を學びに、同じ様に學校へ行つて居るのでは無いか。この數限りのない多くの兒童でつくられた、大きな群を想像して御覽よ。さうして、この大なる群が、どんなに大きい運動をなして居るかを想像して御覽よ。そして考へて御覽、若しかこの運動が止まる様なこじがあつたら、人類はまた野蠻の状態に後戻りをして仕舞ふだらう。この運動こそは、世界の進歩であり、希望であり、光榮である。奮起せよ、御前はこの大きな軍隊の兵士である。お前の書物は武器で、お前の級は一部隊だ。全世界が戦場で、勝利は人類の文明である。エンリコよ、卑怯な兵士となるのではありませぬよ。

少年愛國家(月次講話)

二十九日土曜日

さうして卑怯な兵士になる者か。決してならぬ。だが、先生が若し今朝の様な面白い話を毎日聞かせて下さつたら、僕も尙更、學校が好きになるであらう。先生は、これから毎月一つ宛こんな美しい行ひをした少年の話をして聞かせて、又それを書いて渡さうと言はれた。これが今朝の少年愛國者の話である。

愛の學校

西班牙のバルセロナから伊太利のゼノアに向けて出帆した一艘の汽船があつた。船中には佛蘭西人、伊太利人、西班牙人、瑞西人などが乗つて居た。その中に十一歳になる一人の少年が居た。みすぼらしい身装をして、野獸の様に、獨り人を離れて、打ち沈んだ眼付で、人をジロ／＼見て居た。彼がこんな眼付をするのも無理の無い事で、今から二年以前に伊太利の田舎に百姓をして居る彼の両親が、彼を輕業師の一行に賣り渡した。その一行は、彼を撲つやら蹴るやら、飢い目にあはすやらして藝を教へ込み、佛蘭西や、西班牙あたりを引つ張り廻し、始終打擲して、食物も十分に與へなかつた。一行がバルセロナに着いた時、彼は虐待と飢餓とに堪へ切れないうで、たうとう遁け出

して仕舞ひ、伊太利の領事館に行つて保護を求めた。領事は深く同情して、彼をこの汽船に乗せてやり、ゼノアの出納官に宛てた紹介狀を渡して呉れたのである。そこから、無慈悲な両親の許へ、送り歸して貰ふ都合なのだ。少年はあそこ、に傷を受けて居て非常に衰弱して居た。二等室に乗つて居るので、人々が不思議に思つて彼を眺めて居た。人が物を言つても返辭をしない、凡ての間を悪み厭ふ様に見えた。かくまでに彼の心はひがんで居たのであつた。

三人の乗客が色々問ひ試みて、たうとう彼の口を開かせた。彼は伊太利語に、佛蘭西語と、西班牙語との雜つた無器用な言葉で、概略その身の上を物語つた。この三人は伊太利人では無かつたが、彼の云ふことが分つたので、半分は同情からと、又半分は酒に酔つて居たからとで、金を少しばかり呉れて、なほ話しつづけさせた。その時大勢の婦人達がその室に入つて來た。少年の話を聞いて、彼等は、人に見えるやうにして、いくらか金を出して、「これをやらう。これもお取り。」と言つて食卓の上にガラ／＼と投げ出した。

少年は低い聲で禮を言つて金を皆ポケットに入れた。苦しみ切つた顔の上に始めて嬉しさうな笑を見せた。それから彼は自分の寢所にはいつて幕を引いて、靜かに横はつて、考へに耽つた。この金があれば、船中で美味しい物を買つて、二年間も飢ゑて居た腹を肥やす事も出来るし、ゼノアに

着いたら、上着を買つて襦袢を脱ぎ棄てる事も出来る。又金を持つて家に歸れば、無一文で歸つたよりは、父母から少しは人間らしい待遇を受ける事も出来るのだ。この金は彼に取つては一かどの財産であるのだ。彼は寢所の中でこんな事を考へて、快い思ひに耽つて居た。その時、かの三人の旅客は、二等室の食卓を取り巻いて、しゃべつて居た。彼等は酒を飲みながら、旅行中に見た國々の話をして居るのである。話は遂に伊太利の事に及んで、一人は伊太利の宿屋に對して不足をいふ。一人は汽車を攻撃する。だんだん酒が廻るに連れて、彼等は何もかも悪く言ひ募る様になつた。伊太利に行くよりか、北極にでも行つた方が善いといふ。伊太利には騙詐者や、追剥が居るばかりだと云ふ。しまひには伊太利の役人は字も知らないと言つて罵る。「無智な國民だ。」「穢多見たいな國だ。」「ぬす……」

一人が今や、盜賊と云はうとして、言ひも果てない中に、銀貨銅貨の礫が雨の様に、彼等の頭の上や肩の上に落ちて來た。そして恐ろしい音をして食卓の上に飛んだり、床を轉がつたりした。三人の旅客も憤然として起き上ると、又一握みの銅貨が彼等の顔に、打ツつけられた。

「持つてうせろ！」少年は寢所の幕の間から、顔を突き出して、怒鳴つた。「己の國の悪口つく奴等から、何貰ふかい。」

烟突掃除人

十一月一日

烟突掃除人

昨日午後、近い所にある女子小學校へ行つた。これはシルヴィア姉さんの先生が、ある少年愛國家の話を讀んで見たいと言はれたので、持つて行つて御目にかけてのだ。この學校には女の子供が七百人程居る。僕が行つた時は丁度放課時間で、生徒等は皆明日から、萬聖節 (The holiday of all saints) 萬靈節 (The holiday of all souls) の祭日が二日續くと云ふので、大喜びで歸りかけて居た。僕は此處で大層美しい事を見た。學校の向側の街の隅に、顔の眞黒い烟突掃除人が立つて居た。まだ小さい子で、片手を壁にもたせ、片腕に頭を支へて、嘔泣して居るのであつた。三年級の女生徒等が二三人近づいて行つて「どうしたの？何故泣くの？」と問うた。けれど、何とも答へないで、矢張り泣いて居た。

「よう、さうしたの？何故泣いてるの？」少女の兒童は繰り返して尋ねた。その時、少年は漸く顔を上げた。赤ん坊の様な顔であつた。涙を流し乍ら、あちこちの烟突を掃除して、三十錢程貰つてゐたのを、ポケットの破れ穴から何時の間にか落してしまつたと云つて、其の孔を出して見せた。その金が無ければ家に歸られないと云ふのであつた。

「親方が打つんです。」と言つて彼は又嘔り上げて泣いた。そしてまた腕の上に頭を落して、途方に暮れて居た。女生徒等は皆その周圍に立つて、氣の毒さうに見つめて居た。此時、また他の女生徒等が、革袋を小脇にかいこんで、やつて來た。帽子に青い羽をつけた。大きい女の兒が、ポケットから二錢の銅貨を出して、

「私、たつた二錢しか無いのよ、もつと集めるとい、わ。」と云ふ。「私も二錢もつて居てよ。」と赤い服を着たのが續いた。「みんなで出したら、屹度三十錢位にはなるわね。」そして外の生徒達を呼びかけて「アマリヤさん、ルイチアさん、アアニナさん、一錢宛出して頂戴、誰かお錢を持つて居なくつて?」

花や、筆記帳を買ふ爲に、金をもつて居る生徒がいくらもあつた。皆、それを出した。小さい女の子は五厘銅貨を一つ出すのもあつた。青い羽を附けた女の子が、それを集めて、大きい聲で數へる。――

「八錢、十錢、十五錢。」まだ足りない。

この時、先生のように大きい女の子が出て來て、十錢銀貨一つ出したので、皆が喜んだ。けれどもまだ五錢足りない。

「五年の方々がいらしてよ。あの方々はきつと持つて居らつしやるわ。」と一人が云ふ、五年の女生徒が來ると、銅貨が澤山に集まつた。皆急いで駆けて來る。哀れな烟突掃除人が、綺麗な着物や、風に揺く鳥の羽や、リボンや、巻毛に取り圍まれて立つて居る様子は、本當に美しかった。三十錢は、とうに集つて、なほ餘分に出來た。金を持つて居ない小さな女の子は、大きい女生徒の中を押し分けて入つて、お金の代りに花束を少年にやつた。この時不意に小使が出來て、「校長先生ですよ。」と言ふと、女生徒等が雀の子の様に、方々に飛び散つて仕舞つた。掃除人は、獨り街の眞中に立つて、嬉しさうに涙を拭いて居た。手には錢を一杯もつて、上衣のボタン孔にも、ポケットにも、

帽子にも、花が一杯、又足のあたりにも、散り布いて居た。

節 *メーデー* 萬靈節 (All souls' day)

十一月二日

エンリコさん、萬靈節といふはどんな日か、知つて居ますか。この日は昔から今日までに死んだ人を祭る日です。この日には、子併等は皆、死んだ人――取りわけ、子供の爲に死んだ人の事を念はねばなりません。昔から死んだ人が、何程あるでせうか。また今日只今も、如何に多くの人が、死に瀕して居るでせうか。お前は思つて見た事がありますか。どんなに多くの父

親が、勞苦の間に其の生命を失つたでせう。如何に多くの母親が、その子を育てる爲に、辛苦に身を痛めて、時ならぬに、墓に下つて行つたでせう。我が子の不幸に陥るを見るに忍びず、絶望の餘り自殺した男は、いくらも有ります。我が子を失つた爲に、或は水に身を投げ、或は悲みの餘り氣が狂つたり、死んだりした女が、いくらも有ります。多くの先生方が、生徒を愛する餘り、學校の事に身を使い過ぎて、まだ若い中に、その生徒等に思ひを残して死んで行つたことを思ひなさい。子供の病氣を癒さうと云つて、自分の身を犠牲にし、傳染病に仆れた幾多の醫師のある事を思ひなさい。難破船や、饑饉や、火災や、非常な危難の際に、最後の一口パン、最後の安全な場所、火災より免るべき最後の繩を稚き魂に譲つて、自分はその犠牲に満足して従容して死に就いた幾多の人々のある事を思ひなさい。

あ、エンリコさん、この様な死者は數へることの出来ない程有りますよ。何處の墓地にも、こんな聖い魂が幾百となく眠つて居ます。若しも、これ等の人々が暫しの時を得て、この世に浮び出づる事が出来たならば、彼等は會て、己が壯年の快樂、老年の平和、愛情、才能、生命を捧げた所のその子供等の名を呼ぶに違ひありません。二十歳の妻、盛りの男、八十の老人、若い者——幼き者の爲に身を殉じたる、これ等無名の英雄——これ等の高尚、偉大な人々の墓

に撒くだけの花は、とてもこの地球上には生じ得ないのです。これほど、お前がた、子供等は愛せられて居るのですよ。だから、エンリコさん、萬靈節の日には感謝報恩の心を以てこれ等の亡き人々の上を念ひなさい。そして、お前は自分を愛する人々、自分の爲に勞苦して呉れる人々に對して、一層親切に、一層情深くなる事が出来ませう。お前は本當に、仕合せな人です。お前はまだ萬靈節の日に、念ひ出して泣くべき人が無いのですもの。

母より

十一月の巻

親友ガローン君

四日 金曜日

愛の學校

僅か二日間の休暇であつたけれど、僕は長いこと、ガローンを見なかつた様な気がする。親しくなればなる程好きになるのはガローンだ。僕はかりで無い、誰でもさうなんだ、たゞ高慢な奴等ばかりは、ガローンを嫌つて物も言はぬ様にする。これもガローンに對しては、一向壓制が利かないからだ。大きい奴が手を振り上げて、小さい子を打たうとする。さうすると、その小さいのが、直ぐ「ガローン君！」と叫ぶ。大きい奴は忽ち、手を引ッ込めて仕舞ふといふ様な風だ。ガローンの父親は鐵道の機關士だ。ガローンは小さい時に病氣であつたので、學校に後れてはいつたのだ。僕等の級で背も一番高く、力も一番強い。片手で腰掛をさし上げて平氣なもんだ。始終何か食べて居る。中々善い人で、人が請へば、鉛筆でも、ゴムでも、紙でも、小刀でも貸したり與へたりする。授業時間には、話もせず、笑ひもせず、小さい腰掛に石を据えたやうに、大きな頭を兩肩の上に乗つけて、背骨を前に屈めて坐つて居る。僕がガローンの方を見ると、何時でも眼を半分閉ぢて笑

親友ガローン君

つて見せる。それが丁度「ウ、エンリコ君、僕等は仲好しだものね。」と云つて居る様に見えるのだ。僕はガローンを見るに、何時でも笑ひたくなる。背が馬鹿に高くつて、幅が矢鱈に廣くつて、上着もズボンも袖も、小さ過ぎたり、短か、つたりして、帽子なんか、頭から落つこちさうにして居る。外套は糸目が見えて、靴は破れて居る。胸襟は、何時でも、糸の様に縷れて居る。あの顔を一目見れば、誰だつて好きになつて仕舞ふ。誰でもガローンと並んで坐るのを喜ぶ。算術が上手で、何時でも赤い革紐で本を括つて持つて居る。貝の柄の付いた大きなナイフを持つて居る。これは昨年陸軍の演習の時に、野原で拾つたのだ。ガローンはそのナイフで指を骨まで切つた事がある。ガローンはどんな冗談を言はれても腹をたてたことがない。けれど、ガローンが何か言ひ出した時に「そりや嘘だ。」とでも云はうものなら、それこそ大變だ。眼を火の様に赤くして、腰掛も割れよと、鐵拳を打ち下す。土曜日の朝であつた。二年級の小さい子が、金を無くして筆記帳を買はれないと言つて街の真中で泣いて居るのを見て、ガローンがその子に銅錢を呉れてやつた。母親の誕生日には、三日もかゝつて、八頁もある長い手紙をかき、紙の縁に色々な飾りをペンで付けて居た。先生は何時もガローンに目をつけて、傍を通るたんびに、掌で頸の所を軽く叩いてやられるのだ。丁度、柔和な牛の子を遇はれる様だ。僕は本當にガローンが大好きだ。あの大きい手を握つた時の嬉しいこ

と！僕のに比べるとまるで大人の手の様だ。僕は慥かに斯う思ふ、ガローンは實に、友人の生命を助ける爲には自分の生命を顧みない人だ。その事は、ちやんとあの眼付に顯はれて居る。あのどす聲の中に、優しい眞情が籠つて居るといふことは、誰にでもすぐ分る。

炭賣と紳士

七日月曜日

昨日の朝、カルロ・ノビスがベッティに向つて言つた様な事は、ガローンなら決して言はない。カルロ・ノビスはお父さんが身分の善い人だと言ふので、甚だ高慢だ。お父さんと云ふのは、丈の高い、鬚の黒い、落ちついた紳士で、殆んど毎日のやうに、ノビスに附いて學校に来るのだ。昨日の朝、ノビスはベッティと争ひをした。ベッティは一番小さい子で、炭賣りの息子だ。ノビスは、自分が悪かつたものだから、返答に困つて、いきなり「貴様の親父は腐れ乞食だ」と云ひ放つた。ベッティは髪のつけ根まで赤くなつて、何も言はず、涙をボロボロと流して居たが、家に歸つてこれを父親に告げた。炭賣の親父——身體中眞黒な小さい男——は早速午後時間に、息子の手を引いて學校にやつて来て、その事を先生に訴へた。僕等は皆黙つた居た。ノビスのお父さんは例の如く、入口で息子の外套を脱いでやつて居たが、自分の名が聞えたので、「何事か。」と先

生に尋ねられた。先生は「カルロさんが、この方の息子さんに向つて「貴様の親父は腐れ乞食だ。」と云はれたと言つて、訴へて來られたのです。」と答へられた。

ノビスのお父さんの顔が曇つて少し赤くなつた。そして我が子に向つて「お前、さう言つたのか？」と問ふ。ノビスは教場の眞中に首を垂れて居たが、何も答へない。そこで、お父さんが、胸を攫んで、ベッティの側に突きやり、「さあ謝罪しろ。」と言はれた。

炭賣は氣の毒さうに、「いえ、さう致しまして！」と言つて止めようとするけれども、紳士は聞かないで、繰りかへした、——

『さあ謝罪しろ。私の言ふ通りに言つて謝罪しろ。』あなたのお父さんに對して、私が、大層失禮な事を申ししたのは、誠に悪う御座いました。御許し下さい。どうか、私の父に、あなたのお父さんの御手を取らせて下さい。」と斯う言ふのだ。

炭賣は「否々、それは恐れ入ります」と言はん許りの身振りをする。紳士は承知せず、ノビスはたうとう、下を向いた儘に、徐い、斷れぬな聲で、——

『あなたの——お父さんに——對して私が——大層失禮な——事を申し——上げましたのは、誠に悪う——御座いました。——御許し下さい。——どうか、私の父に——あなたの——お父さんの御手を取らせて——下

「はい。』と言ふ。

紳士は炭賣の方に手をのばすと、炭賣は、それを握つて強く振つた。そして、急に我が子を、カ
ルロ、ノビスの方に突きやつて、兩腕にこれを抱かせた。

「これから、どうぞ、この二人を、列ばせて下さい。」と紳士が先生に願はれたので、先生はノビス
の腰掛にベツティを坐らせた。ノビスのお父さんは、これを見て、御禮をして出て行かれた。炭賣
は双んで居る二人の子供を眺め、暫く考へ込んで立つて居た。それから腰掛の傍に行つて、何か言
ひたさうに、懐かしい様な、濟まぬ様な顔色をしてノビスを見て居たが、何も得言はず、手をひろ
けて、ノビスを抱かうとして、これもようせず、だゞ、大きな指でノビスの額を一寸撫で、戸口
の方に出て行つて、又一度振りかへつて、歸つて仕舞つた。

先生は僕等に向つて、――

「皆さん、今見た事を善く覚えて置きなさい。これは恐らく、この學年中での一番美はしい教訓で
すから。」と言はれた。

弟の女先生

十日 火曜日

僕の弟が病氣なので、あのデルカティ先生といふ女の先生が見舞に来て下さつた。あの炭賣の子
も、前に先生に教はつたのださうだ。先生は可笑しな話をして僕等を笑はして下さつた。二年前に
あの炭賣の子の母親が、息子が賞牌を貰つた御禮にと言つて、大きな前垂に、炭を一杯入れて、先
生の御宅へ持つて来たさうだ。要らぬと言つて、いくら断はつても、どうしてもきゝ入れず、持つ
て歸る時には、たうとう泣き出したさうだ。先生は又一人の女が、花束の中にお金を入れて持つて
行つたお話をなされた。僕等は先生のお話が大層面白くて笑つた。弟なんか、どうしても呑まな
かつた藥を、其の時、立派に服んでしまつた。

一年級の子供を扱ふのは、どんなに手のかゝる事か。老人の様に齒が無いのがあるので、發音が
巧く出来ない。咳嗽をする。鼻血を垂らす。腰掛の下に靴が隠れて見えぬと言つて騒ぐ。ペンが手
に立つたと言つて吼える。習字帖の一と二とを取り違へて来たといつてわめく。柔軟かくした小さい手
をして居る五十人の子供に書き方を教へるのは大抵の事ぢや無い。ポケットの中には、甘草かんそうだの、
ボタンだの、瓶の栓だの、瓦の缺だの入れて居る。先生がそれを捜して歩くと、靴の中にまで隠す
のだ。先生の言はれる事なんか、少しも聞きはしない、窓から蠅がはひつたと言つては、大騒ぎを
する。夏などは、草を持ち込んだり、甲蟲を放したりする。それがクル／＼と室の中を飛び廻つて

インキ壺の中に落込んで、習字帖の上に、インキをべつたりぬりつける。先生は子供等の母に代つて、彼等の服装を整してやつたり、傷ついた指を繻帯（きんぎょ）へてやつたり、落した帽子を拾つてやつたり、外套を取り違へぬ様に氣を附けてやつたり、騒いだり、わめいたりせぬ様に心を配つたりなさらんければならぬのだ。本當にお氣の毒な事だ。

お負けに生徒の母親達が来て不平を言ふ、「先生私の子は、どうして、ペンを無くしたんですか。」
「私の子はちつとも覺えないが、一體さうしたんですか。」
「私の子は、あんなに善く出来るのに、どうして賞與が貰へないのですか。」
「うちのピエロが袴を破つたあの釘をどうして取つて下さらないんですか。」

時としては、先生も子供に腹が立つて辛抱し切れなくなるさ、思はず手が上るのを、じつと忤（こ）へて御自分の指を噛みなさるさうだ。けれども、腹の立つた後では、大變に後悔して、叱つた子をしつかと抱きしめてやりなさるさうだ。悪戯な子を教場から出される事もあるが、後では涙を吞んで居られる。生徒の親達が子供を罰するさういつて食物を與へぬ様な事があると、大さう怒つて止めなさるさうだ。

先生は、年が若くて、丈が高くて、身装がさばりして居て、始終活動して居られる。何をなさる

にも、彈機（だんき）の様に、敏捷く、一寸した事にも感じ易くて涙脆い人だ。

「子供等が大層あなたに懐いて居ますね。」と母さんが言つた。

「そんなのも有りますが、それが學年の終りになると、大抵は私の事なんか。構はなくなるんですよ。男の先生に教はる様になると、女の先生に教はつて居たことが恥かしくなるのですもの。二年の間も世話をして、あんなに可愛がつてやるのですから、別れてしまふのは本當に悲しうなりますよ。あの子は、私に懐いて居たから、屹度忘れないであらうと思つて居ると、休暇が終んで御覽なさい。その子が學校に歸つて來るのを待ちうけて私が飛んで行くと、フイと向うを向いて仕舞ふのですもの。」

先生は斯う言つて口を緘（し）まれた。そして濕んだ眼をあけて弟に接吻して、――

「ですがね、あなたはさうで無いのね。あなたは傍を向かないのね。あなたは私を忘れはしないのですね。」と言ひなすつた。

我が母上

十日 木曜日

エンリコよ、お前は弟の先生の居られる前で、母さんに大層失禮な事を言つたね。またあんな

な事があつてはならぬよ。お前の無禮な言葉を聞いた時に、私は胸を刺される様な思ひがした。私は今思ひ出す事がある。數年前お前が病氣をした時に、母さんはお前が死ぬのではないかと心配して、終夜枕許につききりで、脈を見たり、呼吸を計つたりして居た。心配のあまり大層泣くので、私は又氣が狂ふのでは無いかと心配した位だ。これを思ふと、私はお前の行末が怖くなる。お前があのお母さんに向つて、氣に入らぬ事を言ふなんて、本當にあきれて仕舞ふ！お前の一週間の苦痛を救ふ爲には、自分の一年間の樂みも捨てよう、お前の生命を取りとめる爲には、自分の生命をも捨てようといふ母さんだよ。

エンリコよ、よく此事を心に留めよ。お前も一生涯の中に種々の艱難を嘗めねばならぬ、其中で一番苦しい事は、母さんに別れる事だ。お前は年を取つて世の辛酸を嘗めた後に、幾千度も母さんの事を思ひ出し、今一度、唯の一分間でも善いから、母さんの聲が聞きたい、今一度母さんの腕に抱かれて、幼子の様に泣いて見たいと、返らぬ繰言をいふ時があるであらう。其時にはお前は、亡き母に與へた諸々の苦痛を思ひ出して、如何に後悔の涙にむせぶ事であらう。思へば悲しい事では無いか。お前は今母さんの心を痛める様な事をしたら、一生涯良心の苛責に苦しむことであらう。あのお美しい、優しい母さんの面影も、お前の眼には悲しさう

に悔すむ様に見えて、絶えず、お前の魂を苦しめる事であらう。

あ、エンリコよ、心せよ。親子の愛情といふものは、人間のもつてゐる感情の中で、第一番に神聖なもの、この感情を蹂躪ける人は、實に世の中の最も不幸な人であるのだ。假令殺人の罪を犯した人でも、なほ自分の母を敬愛する人であつたら、其胸の中には、まだ美しい貴いものが残つて居る。如何に有名な人でも母親を泣かしたり苦しめたりする様な人は、本當に賤しむべき人なのだ。だから、又と生みの親に對して無禮な言葉を出す様なことがあつてはならぬ。若しか、間違つて、さういふ言葉が口から出た時には、私を煩はさないで、自分の心から進んで、母さんの足許に身を投げ、お前の額から、不幸の汚れを拭ひ去つて下さる様、赦免の接吻をお願ひするのだ。私は固よりお前を愛して居る。お前は私に取つて何より大事な寶だ。けれど、お前が母さんに不幸をする様であつたら、寧ろ、死んで呉れた方が善いと思ふ。近よつてくるでない。私に抱きつかないで呉れ。私は今お前を抱き返してやる心にはなれない。

父より

親友コレツテイ君

十三日 日曜日

父さんは許して下すつた。それでも、僕はまだ悲しかったのだ。母さんは門番の息子と一緒に、川岸にでも行つて、散歩して来いと言つて、僕を送り出した。川の岸を歩いて一軒の店の前に荷車の止つて居る處へ来ると、誰か僕の名を呼ぶものがある。振り返つて見ると、學校友達のコレッテイであつた。身體中汗だらけになつて、愉快さうに薪を擔いで居るのである。荷車の中に立つて居る人が、一抱へ宛薪を渡すと、コレッテイはそれを受け取つて、自分の家の店に運んで、大急ぎで積み上げて居るのだ。

「コレッテイ君、何をして居るの？」と僕は問うた。

「この通りだ。」と、兩腕を薪の方に差し出して答へて、「僕は復習して居るのだ。」とつけたした。

僕は笑つた。けれど、コレッテイは、眞面目な顔して、一抱の薪をだいて走りながら「動詞ノ活用ハ―數―數ト人稱トノ差異ニヨリテ變化シ―」と口の中に繰り返すのだ。

薪を下して、それを積んでから又「又動作ノ起レル―時ニヨリテ變化シ―」

又車の方に、薪を取りに行つて、「又動作ヲ言ヒ表ハス―法ニヨリテ變化ス―」

これは明日の文法の稽古であつた。「僕は忙しくてね、お父さんは要事があつて他所に行つたし、お母さんは病くて寢て居るんだ。それで僕が仕事をせんけりやならん。仕事し乍ら文法を暗誦して

居るんだ。今日のは大層六づかしいな。どうしても覚えられない。――お父さんが七時に歸つてお金を渡すと言つて居ましたよ。」と荷車の人に向つて言つた。

荷車は出て行つた。「一寸はいり給へ。」とコレッテイが言ふので、僕は店にはいつた。店は廣くて、薪や、丸太が一杯積んであつて、その側に秤が掛けてある。

「今日は忙しい日だ、本當に。始終仕事に立たなけりやならんのだ。作文を書きかけて居たら、お客さんがやつて来た。又書きかけるとソレ今の荷車が来たのだ。今朝から二度も薪の市場に行つて来たのだ。足が棒の様になつて仕舞つた。手が固ばつて誰なんか書くんだつたら到底だめだ。」斯う言つて、其所らに散らばつて居る枯葉や、薬屑を掃き出した。

「コレッテイ君、何處で勉強するの？」と僕が聞くと、「此處では無いさ。来て見給へ。」と言つて、僕を店の後になつて居る、臺所兼食堂と云つたやうな小さい室に連れて行つた。卓の上に、本や筆記帳や、書きかけた作文などがある。「此所だよ。僕はまだ、第二問を仕舞はずに居る。――革ニテ作ル者ハ靴、革帶、もう一つ加へねばならぬな――及ビ革袋」彼はペンを取つて見事な字で書き出した。

「御免なさい。」と店に呼ぶ者がある。薪を買ひに来たのだ。「入らつしやい。」とコレッテイは返事

をして、飛んで出て、薪を秤り、金を受取つて、隅の方に置いてある古つばい賣上帳に記入した。それから又歸つて来て、『何でもこの作文を書いて仕舞はんければ。』と言つて、書き續けた。——旅行囊、兵士の背囊、——『オ、珈琲が沸騰つて居る!』と叫んで、煖爐の所に走つて行つて珈琲瓶を取り下した。『お母さんの珈琲だ。僕は珈琲の煮方を習つたよ。一寸待ち給へ。これを二人でお母さん所へ持つて行かうではないか。お母さんが屹度喜ぶからね。お母さんは、この一週間まるで床に就きつきりなんだ。——エー動詞ノ變化ト——僕は何時でもこの珈琲瓶で指を焼くんだがね——兵士の背囊の次には何と書いたら善からうな——何かまだ書かなくちやね——何も考へつかぬな——さあ、お母さんの所に行かう。』

コレツタイが戸を開けた。僕等は小さい室にはいつた。お母さんは大きい寢臺の中に、頭には白い頭巾を巻いてねて居た。

『ア、い、坊ちやんだこも!見舞に来て下さつたの?』とコレツタイのお母さんが僕を見て言つた。コレツタイはお母さんの枕を直したり、布團を掛けたり、火を掻き起したり箱の上に居る猫を追つたりした。

『お母さん、もう上らないの。』とコレツタイは母の手からコップを取つて尋ねた。

『薬はお飲みでしたか。無くなつたら藥屋に行つて参ります。薪はおろして仕舞つてあるのです。四時になつたら肉を焼きませうね。そしてバタ屋が通つたら、あの八錢を渡ませう。何でもよいやうに致しますから、お氣にかけなさんな。』

『大きに!もう行つても宜しいよ。何でも善くして呉れるのね。』お母さんは斯う言つて、僕に角砂糖を一つ食べよと是非に勧めた。コレツタイは、僕にお父さんの寫眞を見せて呉れた。軍服を着て、胸に勳章をかけて居る。千八百六十六年にウムベルト親王の部下に屬して居た時に貰つたのださうだ。顔がコレツタイにそっくりで、同じ様な活々した眼付をして、楽しさうな笑顏をして居る。

僕等は又臺所に歸つた。コレツタイは『分つたぞく』と言つて筆記帳に書き足した。——馬ノ鞍モ亦之ニテ作ル。』あまは今晚にしよう。遅くまで起きてやるんだ。君は結構だね、勉強する時間もあるし、散歩する暇もあるしね。』それから又元氣よく店に出て行つて、薪を臺の上に載せて、鋸で引き出した。

『これが僕の體操だよ。腕ヲ前へ動かセつて言ふのとは、大分違ふね。お父さんが歸るまでに、この丸太を引いて仕舞つて喜ばしてやらう。一番悪い事には、鋸を使つた後で字を書くと、字が蛇の様になるんだ。これはどうも仕方がない。先生にさう言つて置かう。——お母さん、早く善くな

つて呉れるとい、になあ。今日は大分宜しい。嬉しいことだ。明日の朝は、鶏の鳴く頃に起きて、
文法を勉強しよう——ホイ又薪が来たぞ！さあやつつけろ！」

薪を積んだ車が店の前に停つた。コレツティは、その方へ走つて行つたが、又歸つて来て、「もう
お相手が出来んからね、又明日逢はう。よく来て呉れたね。さよなら？愉快に散歩し給へ。君は仕
合せだね。」かう言つて僕の手をしっかりと握つて、それから又前の如く、車と店との間を行つたり戻
つたりして居る。顔は薔薇の様に赤くなつて、見て居ても、氣持の善い程身軽く立ち働いて居た。

「君は仕合せだね。」とコレツティは僕に言つた。さうで無い、コレツティ君、さうで無いのだ。君
の方が僕よりも仕合せなのだ。君はよく勉強もし、又よく働くんだもの。又お父さんやお母さんに
よく盡すんだもの。君は僕より百層倍も偉いんだもの。ねえ君！

校 長 先 生

十八日 金曜日

コレツティは今朝學校で、自分の三年の時の先生が、試験の監督に來られたので、大變に喜んで
居た。その先生はコアティと言つて、よく太つた、頭の大きい、髪がクルクルと縮んだ、鬚の黒い、
眼のギロ／＼した、大砲の様な聲を出す先生だ。この先生はよく生徒を嚇かして、手も足もへし折

つて、警察へ持つて行くと言つたり、いろんな怖い顔をしたりする。けれど、罰を加へるといふ事
は決してせぬ人だ。何時も、鬚の蔭でニコ／＼笑つて居られるが、それが鬚に隠れて、誰にも分ら
ないのだ。男の先生は皆で八人居られる。コアティ先生の外に、子供の様な若い助手の先生も居ら
れる。五年の先生は跛で、何時でも大きな毛の襟巻にくるまつて居られる。田舎の學校に居られた
時、校舎が濕つぼくつて、壁に水氣が満ちて居たので病氣になつて、今も始終身體が痛いさうだ。
同じ級のもう一人の先生は、白髪の老人で、前には、盲學校の教師をして居られたさうだ。それか
ら立派な服を着て、眼鏡をかけて、綺麗な頬鬚を蓄へて居る先生がある。奉職中に法律を研究して
免狀を取られたので、「辯護士さん」といふ仇名が付いて居る。この先生は又、書簡文教授法の本を
著はして居られる。體操の先生は軍人風の人で、ガリバルディー將軍の部下に屬して居られたさうだ。
ミラゾーの戦で受けられたといふ刀傷が頸の所にある。それから、今一人は校長先生だ。丈の高い、
頭の禿けた先生で、金縁の眼鏡をかけて居られる。半白になつた鬚が胸の邊まで垂れて居る。何時
でも、黒い服を着て、腮のどこまでボタンを掛けて居られる。大變優しい先生だ。生徒が悪い事を
して校長室に呼び出される時は震へて行くのであるが、先生は叱りはなさらないで、その子の手を
取つて、そんな事をしてはいけないと言ふ事を、種々と善く言つて聞かされる。そして、これから善

い子になるのですねと言つて慰めてくれられる。大變優しい聲で、親切に言はれるので、子供は、罰を受けたよりは餘計に悲しくなつて、眼を赤くして出て來るのだ。校長先生は毎朝一番先に學校へ出て、生徒の來るのを待つたり、父兄の相手をしたりなさる。他の先生方が歸られた後でも、一人残つて學校の中を、あちこち廻つて見、子供が馬車にしかれたり、街中で惡戯をしたりしないかと、氣をつけられるのだ。先生の高い黒い姿が隅の方に現はれると、道草して居る子供等は、遊び道具を打つちやらかして、バット四方に散つて仕舞ふ。先生は遠くから、悲しさうな情愛に充ちた顔色をして、逃げて行く子供を嚇かしなさるのだ。

息子さんが志願兵に出て居て亡くなられてから、先生の笑顔を見たものが無いと母さんが言つて居た。校長室の小机の上に、その息子さんの寫眞がおいてある。その不幸があつてから先生は辭職を思ひ立たれて、市役所に出す辭職願書を用意して、ちやんと机の引出しに入れて居られたさうだが、生徒に別れるのがつらいので、これを出す事を躊躇して、まだ、どちらとも決定して居られなかつたさうだ。或る日僕の父さんが校長室で、先生と話をして居た時、父さんは校長先生に向つて、「辭職なさるなんて、つまらないぢや有りませんか。」と言はうとした。その時一人の男が子供を連れてはいつて來て、この子をこの學校に轉校さして呉れと願ひ出た。校長先生は、その子の顔を見

て、驚いた様子で、暫しその子の顔と、机の上の寫眞とを見比べ、その子を膝許に引き寄せて、首を上げさせて、しげくと見て居られたが、やがて「宜しい。」と言つて、その姓名を書きとめ、父子のものを歸された。それから暫く考へに沈んで居られたが、父さんが、「先生辭職なさるなんて實に困るぢやありませんか。」と言つたので、机の中から、かの辭職願書を取り出して、二つに引き割き「辭職の事はもう思ひ止まりました。」と言はれたさうだ。

兵士

二十二日 火曜日

校長先生のお子さんは陸軍の志願兵で亡くなられたので、先生は折々兵隊の行軍を見に出られる。昨日も歩兵の一個聯隊が通つた。子供等はそのあたりに集つて樂隊にあはせて、定規で、革袋や紙挾を打ち叩いて、拍子を取つて躍りまはつた。僕等も道ばたに集つて、軍隊の行進を見て居た。狭い服にしめつけられて居るガロンも、大きな麵包を噛み乍ら、立つて見て居た。綺麗な服を着たヴオティニ、鍛冶屋の子で、父親の着古しを着て居るフランティ、砲兵大尉の子で、幼兒を馬車から救つて跛赤い髪のクロシイ、無遠慮な顔をして居るフランティ、砲兵大尉の子で、幼兒を馬車から救つて跛になつたロベティ、この連中も來て居た。フランティは甕を引いて居る一人の兵士の面前で笑ひ出

した。すると忽ち彼の肩を捕へたものがある。ふり向いて見ると校長先生であつた。校長先生は、「氣を附けなさい。隊伍の中に居る兵士を嘲笑するのは、縛られて居るものを罵ると同じことで、誠に恥づべきことですぞ」と言はれた。フランテイはすぐ何處かへ影を隠して仕舞つた。兵士は四列をなして、行進して居たが、皆汗と埃まにまみれて、銃が日光にピカ／＼と輝いて居た。

校長先生は僕等に向つて、――

「あなた方は兵士達に感謝しなければならぬのですよ。あの方々は我々の防禦者です。明日にも外國の軍隊が我が國を侵す様な事があれば、我々に代つて命を捨て、下さらうといふ方なのです。あの方々も、あなた方と、そんなに年は多く違はない少年で、やはり勉強して居られるのです。御覽なさい。伊太利全國から來て居る人々といふ事が、ちやんと顔で分るでは有りませんか。シ―リ―人も、サルチニア人も、ネ―ブルス人も、ロムバルチ―人も居ます。これは千八百四十四年の戦役に加はつた古い聯隊なのです。兵士は變つて居ますけれども軍旗はやはり同じなのです。皆さんが生れるずつと前に、この軍旗の下で、國の爲に討死した人が何程あつたことですか!」

「來ましたよ!」とガロ―ンが叫んだ。本當に、すぐ近くに、兵士の頭の上に軍旗が進んで來た。

「宜しいですか、皆さん、あの三色旗がこの前を通る時に、舉手注目の敬禮をするのですよ。」と先生が言はれた。

一人の士官が聯隊旗を捧げて僕等の前を通つた。クチャ／＼に裂けて色も褪せてゐた。旗竿には勳章が懸つて居た。

一同舉手注目の禮をした。旗手は微笑して僕等の方を見て、手を舉げて答禮をした。

「皆さん、感心です。」と誰か後の方で言つた者がある。振り返つて見ると、それはボタン穴にクリミヤ戦役の従軍徽章をつけた、年の寄つた退職士官であつた。「感心です。立派な事をしましたね。」と老士官は繰りかへした。

「この時樂隊は川に沿うて方向をかへた。子供等の関の聲が、喇叭の音に和して聞えた。老士官は僕等の方を見つめて、「感心々々、若い時に、軍旗を尊敬する人は、大きくなつてから、軍旗を守る人になるのだ。」と言つた。

ネリ―君の擁護者

二十三日 水曜日

51
駝背のネリ―も、昨日兵士の行軍を見て居た。可哀さうに「僕は兵士になれない。」と思つて居るやうな様子であつた。ネリ―は善い子で、善く出来るのだが、餘り身體が小さくて、弱いので、呼吸

するの苦しさうだ。母親は小さい色の白い女でいつも學校の引ける時刻に我が子を迎へに来る。始めの程は、多くの生徒が、ネリイを嘲弄して、革袋で、あの脹れた背を叩いたりして居た。けれどもネリイは少しも逆はず、又自分が友達的笑ひ物になつて居るといふ事を、決してお母さんに知らせなかつたのだ。それで、どんなに嘲弄されても黙つて腰掛に倚りかゝつて、泣いて居たのだ。

所が或る日、ガロオンが飛び出して、皆に斯う言つた、――

『コリヤ、ネリイに指でも觸れて見ろ、三度位グル／＼舞をするほど、耳朵をはり飛ばしてやるから。』

フランテイは此の言葉に氣を止めなかつたので、ガロオンの鐵拳を見事に頂戴した。奴本當に三度グル／＼舞をした。それからといふものは、誰一人、ネリイにからかふ者がなくなつた。先生も、これを知つて、ガロオンをネリイと同じ腰掛に坐らせられた。二人は仲好になつて、ネリイがガロオンに愛着する様になつた。ネリイは教場にはいると、先づガロオンが居ないか見廻はす。歸る時には『ガロオン君、さよなら！』と言はなかつた事がない。ガロオンも同様である。ネリイが腰掛の下に、ペンや本などを落とすと、ガロオンはネリイを勞させない様に、自分が直ぐに俯いて、それを拾ひあけてやる。その外、手傳つて、道具を革袋に入れてやつたり、外套を着せてやつたりす

る。ネリイは始終ガロオンの方を見て居て、ガロオンが先生に賞められると、自分が賞められた様に喜ぶ。ネリイも遂に母親に向つて、曩には學校で皆に嘲弄されて泣いた事、それが今は一人の友達に御蔭で助かつて仲好になつた事を告げたものに見える。今日學校で、斯ういふ事があつた。僕が先生の御用で一才校長室に行くと、丁度同じ時に黒い服を着た、小さい色の白い婦人が入つて來た。これがネリイの母であつた。『校長様、ガロオンさんと云ふ方が、私の子の組にお出でですか。』と問ふ。『ハイ』と校長先生が答へられる。『一言申したい事がありますから、一寸その方をこゝへ御呼び下さいますまいか。』

校長先生は小使を呼んで、ガロオンを呼びにやられた。程なくガロオンはその大きな坊主頭を圍際にあらはした。何事だらうと、びつくりしたやうな顔つきである。その姿を見ると、かの婦人はその傍に飛んで行つてガロオンの肩に腕をかけて、幾度も／＼額に接吻して、――

『あなたがガロオンさん！私の子を助けて下さる方！あなたなのですか！本當に偉い方ね！あなたなのですか！』

斯う言つて急いで、ポケットを捜して見たり、巾着を取り出して捜して見たりしたが、何も無かつたので、小さな十字架の附いて居る、鎖を頸からはづして、それをガロオンの頸にかけてやつ

「これを上げませう。私の記念に――あなたに感謝し、常にあなたの爲に祈つて居るネリーの母の記念に、どうぞ懸けておいて下さいなね。」

級 長

二十五日 金曜日

愛の學校

ガローンは皆に好かれて居るが、デロシイは皆に感心されて居る。デロシイは何時でも一番で、一等賞を取るが、今年も屹度さうに違ひない。デロシイと競争の出来るものは一人も無い。何でも善く出来るんだもの。算術でも、作文でも、圖畫でも、皆デロシイが一等だ。何でも直ぐに分るのだ。恐ろしい記憶力がある。骨も折らないでよく出来るのだ。まるで學問が遊び事の様だ。先生が昨日デロシイに向つて斯う言はれた。

「あなたは神様から太變な賜物を享けて居ますから、それを粗末にしてはなりませんよ。」

其上、丈も高く、姿も立派で、黄金色の髪が房々と頭を蔽つて居る。身體が軽くて、一寸片手をついて、何の事もなく腰掛を飛び越える。劍術も早や習つて居る。年は十二歳で豪商の子だ。青い服に金ボタンの着いたのを着て居る。何時も元氣で、快活で、誰にでも優しくして、試験の時に教

級

へてやる。誰だつてあの子に無禮な言葉を放つたりなどするものは無い。たゞノビスとフランテイの二人だけ、デロシイを横目に睨んで居る。ヴラテイニは眼に嫉妬の光を見せて居る。けれどもデロシイはそれに氣が附かぬ様子だ。デロシイを見るに、誰だつて微笑まらずには居られなくなる。級長が成績を集めて机の間を歩くときは、皆その手を取つたりなどする。デロシイは家で貰つた繪なんかを、みんな、人に分けてやる。カラブリアの子には小さいカラブリアの地圖を描いてやつた。

物を人にやる時には、ニコ／＼と笑つて、その事を念頭にも置かないやうである。誰をも偏愛するといふ事がない、誰にも一樣にする。僕は何でも皆デロシイにかなはないと思ふと、どうも嫉ましくなる。ア、僕もヴォテイニの様に、矢張りデロシイを妬んで居るのだ。僕が一生懸命に宿題を考へて居る時に、デロシイはもう今頃は立派にやつて仕舞つて居るがなど、思ふと、嫌な氣がしてあの子が悪くなる事もある。けれど、學校に来て、あの美しいニコ／＼した顔を見、心地よい聲を聞き、丁寧な態度に接するに、自づと、嫌な悪らしいと思つた感じは、皆消えて仕舞つて、却て耻かしくなつて仕舞ふ。そして、始終デロシイと一緒に居て勉強する事が出来たら善からうと、思ふ様になる。あの姿と、聲とが、僕に勇氣と、熱心と、快活と、喜悅とを鼓吹して呉れる様だ。

先生が明日の月並講話を清書して呉れといつて、デロシイに渡された。デロシイは今日それを寫

して居たが、大そうその話に感じたと見えて、彼の顔は燃ゆるやうにほてり、眼は濡んで、唇は慄へて居た。僕はその時デロシイの方を見たが、本當に立派だつた。僕は彼の面前で斯う言つてやりたかつた。「デロシイ君、君は何でも僕よりも偉い、僕に比べると、まるで大人だ。僕は本當に君を尊敬してゐる、君を崇拜して居るよ。」

少年斥候 (月次講話)

二十六日 土曜日

千八百五十九年ロムバルディーを教はんが爲に、佛伊兩國の聯合軍が奥太利と戦つて幾度か之を破つた。其の折の事であつた。六月の或る晴れたる朝、伊國騎兵の一隊が、間道に沿うて敵を偵察しつ、徐かに進んで居た。その一隊は一士官と一軍曹とによりて指揮され、何れも口を緘んで前方を見張り、敵の前衛の、白い姿が今にも見えはしないかと、少しも瞳を離さず、斯くしてこの一隊は樹立に包まれた一軒の田舎家の前に達した。そこに十二歳許りに見える一少年が立つて居て、小刀で樹の枝を切つて杖を拵へて居た。家の窓には大きな三色旗が翻つて居るが、人も誰も居ない。家族は既に敵兵を恐れて、國旗を掲げておいて遁けたのである。少年は騎兵の近づくを認めて、杖を投げ棄て、帽子を擧げた。眼の大きい、元氣の善さうな、顔の綺麗な子で、上着を脱いで胸を露

はして居た。

「何をして居るんだ？」と士官は馬を停めて聲をかけた。「何故家族と一緒に逃げないのだ？」

「僕は家族はありません。孤兒です。人の仕事など少々仕て居ますが、今は戦争を見たくて残つて居るんです。」と答へた。

「奥國兵を見たか？」

「否、この三日間は見ないのです。」

士官は暫く考へて、馬を下り、兵士等に命じて前の方に注意させ、自分は一人その家の屋根に上つた。けれど、家が低いので、餘り遠くは見えない。士官は樹に上らなくてはだめだ。」と云つて下りて來た。丁度家の前に一本の高い樹が空に梢を動かして居る。士官は、暫く考へて、樹の梢に、兵士の顔とを見比べて居たが、突然かの少年に向つて、――

「オイ小僧、貴様眼がよく見えるかい。」

「眼ですか？一哩先の雀の子でも見えます。」

「この樹の梢に上れるかい？」

「この樹の梢に！私がですか？それこそ、半分間もかゝりはしません。」

「それぢや、貴様、これに登つて、向うに敵兵が居るか、煙や、銃劍の光や、馬など見えるか見て呉れるか。」

「やりませう！」

「いくらやらうか。」

「金がいくら要ると仰しやるんですか。要りません。快愉です！敵の爲だつたらどうしたつてやるもんでんか。國の爲ですもの。僕もロムバルディー人です。」少年は笑つてかう答へた。

「よし！上れ。」

「一寸持つて下さい、靴を脱ぎますから。」

少年は靴を脱ぎ、帯をひきしめ、帽子を草の上に投げて、幹に抱きついた。

「危いぞ！」士官ははつとして彼を止めようとして聲を立てた。少年は美しい青い眼でふり返つてみて、何事か尋ねる様な風。

「何でもない。上れ。」

少年は猫の様にスル／＼と登つた。

「前方に氣をつけろ！」と士官は兵士等に聲をかけた。少年は間もなく、樹の梢に登つて、幹に絡

みついて居た。足は木の葉に隠れて見えないけれど、身體は遠くからも見える。房々とした髪に日光が當つて黄金色に輝いて居る。木が高いので、下から見ると、少年の身體が小さく見える。

「眞直に前の方を見ろ。」と士官が聲をかけた。少年は右の手を樹からはずして眼の上にかざして見た。

「何が見える？」と士官が問ふ。

少年は下を向いて、手で口喇叭をこしらへて、答へた。「馬に乗つた人が二人、道に立つて居ます。」

「距離はいくら。」

「半哩。」

「動いて居るか。」

「じつミ立つて居ます。」

「まだ外に何か見えるか、右の方を見ろ。」少年は右の方を眺めて、「墓地の近くに、樹の間に、何か光つた者が見えます。銃劍でせう。」

「人は見えぬか。」

「見えません。殺物の中に隠れて居るでせう。」

この時ビューツといふ音がして、銃丸が空をかすめて通つた。家の後の方に消えて行つた。

「下りて来い！敵に見つかつたんだ。もう宜しい。下りて来い。」士官が叫んだ。

「怖かあ無いです。」と少年は答へる。

「下りて来い。」士官は又叫んで、「左の方には何か見えぬか。」

「左の方？」

「ウム、左の方だ。」

少年は左方に頭を轉じた。此時、前よりはもつと鋭い音が、もつと低く空を切つた。少年はギョツとして、「こん畜生！己を狙つて居やがる。」と思はず叫んだ。銃丸は少年の身體を僅かにはづれて通つた。

「下りろ！」士官は苛立つて叫んだ。

「直ぐ、下ります。けれど、木の蔭になるから、大丈夫です。左の方を見るんでせう？」

「ウム、左の方だ。だが、もう下りて来い！」

少年は體を左の方に突き出して、大きい聲で、「左の方の寺のある所に——」

又一つ鋭い響きが空を切つて通つた。忽ち少年は下りて来る様に見えたが、暫く木の幹に取りついて居ると思ふ間に、突然、腕をひろげて眞逆様に落ちて來た。

「しまった！」士官は驅けより乍ら、絶叫した。

少年は仰向に地に横はり、兩手をのばして斃れた。軍曹と二人の兵士とが馬を飛び下りて來た。

士官は少年の上に俯いて、其シャツを披いて見るに、銃丸が左の肺に入つて居る。「もうだめだ！」

と士官は嘆息した。

「否、まだ息があります！」と軍曹がいふ。

「あ、可哀想な事をした。感心な子だ！オイしつかりしろ——！」と言つて士官は手巾で創口を押へた。少年は兩眼をギロリと回して、首を後に落した。もう死んだのだ。士官は顔色青ざめて、暫く少年を見て居たが、やがて、草の上に少年の上衣を布いて、死體を靜かに其上に載せた。そして立ち上つて之を見て居た。軍曹と二人の兵も之を見つめて動かずに立つて居た。他の兵は敵の方をうちまもつて居た。

「可哀想に！この健氣な少年を！」士官は繰りかへして、俄かに思ひついて、家の窓から三色旗を取り下して、袷衣の代りに、之を死體の上にかけた。軍曹は、少年の靴、帽子、杖、ナイフなどを

集めて、その傍に置いた。彼等は暫く、無言のまゝ、立つて居たが、や、あつて士官は軍曹に向つて「擔架をよこさせよう。この子は軍人にして死んだのだから、軍人に葬らするがよい。」と云ひ終つて、少年の死骸に向つて、手を以て接吻を送り、直に兵士に向つて、

「乗馬！」と叫んだ。

一令の下に、皆馬に飛び乗り、前進を續けた。それから數時間の後に、次の如く、この少年は軍隊の敬禮を受ける事になつた。

日没の頃、伊太利軍前衛の全線が、敵に向つて行進を起した。數日前サンマルクノの丘陵を花々しく血に染めたる一大隊の射撃兵が、今朝騎兵の通行した田舎道を二列になつて進んだ。少年戦死の報知は、出發前既に全隊に傳はつて居たのだ。今一隊の進んで來た通路は、かの民家から數歩の距離にあつた。先頭の將校等は、大樹の下に三色旗もて蔽はれて横はれる少年を認めて、皆劍を拵けて、敬禮を表して通つた。一人の將校は小川の岸に屈んで、そこに咲き充ちて居る草花を摘み取つて、之を少年の死骸の上に蒔いた。之に倣つて全隊の兵士が皆花を摘んで屍の上に投げたので、少年は程なく花に包まれてしまつた。そして將校も兵卒も、皆口々に「偉いぞ、ロムバルチーの少年！」「さらば、我が友！」「金髮君萬歳！」など、いふ。一人の將校は自分のかけて居る勳章を

投げてやつた。今一人は行つてその額に接吻した。草花は猶ほついで、あらはなる足の上に、血のにじんだ胸の上に、黄金色の頭の上に、雨の様にふり注いだ。かくて少年は草の上に旗に包まれて横はり、笑むが如き白い顔を見せて居た。可哀さうに、人々の挨拶をきいて、國の爲に命を捨てた事を満足に思つて居る様に見えた。

貧民

二十九日 火曜日

我が子よ、ロムバルチーの少年の如く、國の爲に命を捨てる事は、大なる徳行であるに違ひないが、まだこの外に我等の盡さねばならぬ、小さい徳行がいくらかもあるといふ事を忘れてはならぬよ。今朝お前が私の先に立つて街を歩いて居た時、瘦せた色の青い赤ん坊を抱いて居る女乞食がお前に物を乞うたのを、お前はそれを見て、何も與へずに行つて仕舞つたね。あの時お前のポケットの中には銅貨が少しはいつて居たのだ。エンリコよ、善くお聞き。不幸な人が手を出して物を乞ふ時に、知らぬ顔するものでは無いよ。殊に、それが我が子の爲に物を乞ふ母親であつた場合には、尙更の事だ。ひよつとするとその子は飢ゑて居るかも知れぬ。若しさうであつたら、その母親の心苦しきは、如何ばかりであらうか。假令ばお前の母さんが、お前

に向つて「エンリコよ、今日は食べ物を受けられないのよ。」と言はねばならぬ様になつたと想像して御覽、その時母さんの心中は如何であらうか。

乞食に一錢銅貨を與へると、彼は眞心から感謝して、――

「神様は必ずあなたや、御家族の健康をお守り下さいます。」と言ふのだ。斯様な祝福の言葉を聞くのは、如何に快いものか、お前にはとても分るまい。斯様な言葉をきいた嬉しさは、本當に長く私共の健康を守るものゝ私は思ふ。そこで私は之を聞いて、却つて其乞食に對して感謝の思ひを起さざるを得ない。この乞食は自分が與へた物よりも、以上に自分に報いて呉れるのだ。と思つて、心に満足して家に歸るのだ。お前も時には、金入から錢を出して、たよりなき盲や、パンに飢ゑたる母親や、母親のなき孤兒に渡しなさい。學校の近傍には、いつでも貧民が居るではないか。貧民は、とりわけ、子供の施しを喜ぶものだ。その故は、大人から物を貰ふと我が身を辱しめる様に思はれるけれど、子供から貰へば恥かしく無いからだ。大人の施しは只慈善の行たるに過ぎないのだけれど、子供の施しは慈善の上に親切が加はつて居る――解りますか？譬へば、錢と花とが一緒にお前の手から落ちる様なものだ。よく考へて御覽、お前は何物にも缺乏して居ないのに、世には凡ての物に缺乏して居るものがある。お前は贅澤を求めて居

るのに、世には唯、死なぬ許りで満足して居る人がある。又考へて御覽、多くの殿堂や車馬を以て充された都會の中、美服に包まれたる子供の間には、食物に飢ゑて居る女や子供のあるといふ事は、實に寒心すべき事ではないか。食べる物が無いのだよ！可哀さうな事では無いか！お前と同じ様に性質も善く、才能もある子供が澤山この都會の眞中に、荒野に迷へる獸のやうに、食べ物に窮して居るは！お、エンリコよ、これから後、物乞ふ母親に逢つた時に、一錢も與へずに通る過ぎる様な事があつてはならぬのだよ。

父より

十二月の巻

商 法 人

一 日 木 曜 日

愛 の 學 校

父さんは皆のお友達と親密になるやう、休日には訪ねて行つたり、来て貰つたりして、交際をするが善いといつて居た。それで今度の日曜日にはあの伊達者のヴォテイニと散歩する筈である。今日はガロフイが訪ねて来た——身體が細長くて、鼻が鼻の嘴の様に尖つて居て、猶さうな目付をして居る子だ。雜貨店の息子で、中々奇人だ。何時でもポケットに錢をじやらつかせて居て、金を數へることが素敵に上手だ。暗算の巧いこと、言つたら無い。貯金もして居る。一錢でも無駄使ひをする事なんて、どんな事があつたつて有りはしない。五厘銅貨でも腰掛の下に落したのなら、一週間か、つても探し出さずにはおかないのだ、使ひ古したペンや、ビンや、蠟燭のかけらや、古郵便切手なんか、何でも拾ひ集めて、ちやんと仕舞つて居るのだ。古郵便切手は、もう二年許り集めて居るので、各國のを何百枚も、大きい帖フォルムにはりつけて居る。それが一杯になれば本屋にもつて行つて賣るんだといつて居る。本屋へ他の子供を引つ張つて行つて買はせるもんだから、本屋がこ

商 法 人

の子には雜記帳を只で呉れる。學校でも始終交易をして居る。いつも物を賣り買ひしたり、富籤をやつたり、交易をしたりして、後では又後悔して、もと戻しにしようとする。錢投げの遊びに上手で、負けた事がない。古新聞をためて、煙草屋に持つて行つて賣る。小さい手帳をもつて居て、之に會計を細かにつけて居る。學校では算術の外何も勉強しない。賞牌メダルを取りたがつて居るが、それは只人形芝居が無料で入られるからだ。こんな變な子だけれど、僕は大好きだ。僕は今日賣買ごとをして遊んだ。ガロフイは品物の値段をよく知つて居て、目方を秤るこも知つて居る。喇叭形の紙袋を作ることなんか、店番頭でもかなひはしない。學校を卒業すれば一種の新奇な商賣を初めると云つて居る。僕が外國の郵便切手を四五枚呉れてやつたら、その嬉しさうな顔といつたら無かつた。一々之はいくらに賣れるんだと僕に言つてきかした。僕等がかうして遊んで居ると、父さんは新聞を見るふりをして、じつとガロフイの云ふことを聞いて居た。そして大そう面白く思つて居られる風であつた。

ガロフイはポケットに品物を一杯入れて居て、これを長い黒い外套で隠して居る。いつも南法人の様に、何か考へて居る様な風をして居る。一番大事にして居るのは、例の郵便切手帖だ。大變な財産の様に、始終その噂をして居る。それで皆が吝ん坊だの、高利貸だの云つて居る。何か知らな

いが、僕はたゞこの子が好きだ。いろんな事を教へて呉れるので、大人の様な氣がする。『母親の命に代へる場合にだつて、あの郵便切手は、手離しはしまし。』といふものもあつたが、僕の父さんは、さうは思つて居ない。父さんは、かう言つた、――

『容易く、人を咎めるもので無い。あの子は、物惜みをするけれども、親切な所もあるよ。』

虚榮心

五日月曜日

昨日はヴォテイニとヴォテイニのお父さんと、リボリ街道の方へ散歩に行つた。スタルデイが木屋の窓の所に立つて地圖を見て居た。この人は、町中でも、何處でも構はず、勉強する人だから、何時間こゝに居たか分りやしない。僕等が撈換をしたら、一寸振り向いた許り、失敬な奴だ。

ヴォテイニは今日も、大層立派な着物を着て居た。赤い繻をしたモロッコ皮の靴をはき、小さい絹の飾ボタンの附いた繻のしてある服を着け、白い海狸の帽子をかぶり、時計を下けて、闊歩して居た。所が今日は先生、虚榮心の爲に、大失敗をやらかした。ヴォテイニのお父さんは、ゆつくり歩いて居られたので、僕等二人はすつと先になつて、道端の石の腰掛にかけた。その側に、質素な服を着けた少年が掛けて居たが、疲れて居る風で、頭を垂れて考へ込んで居た。ヴォテイニは僕

とその子との間に掛けた。忽ち自分が美服を着て居る事を思ひ出して、この少年にみせびらかさうと思つて、足をあけて、僕に斯う云つた、――

『君は僕の士官靴を見たかね。』少年に見せる積りであつたけれども、少年は一向注意しなかつた。そこでヴォテイニは、足を下ろし、絹の飾ボタンを僕に示し、少年の方を横目に見て、『この飾ボタンは、氣に入らぬから、銀ボタンに換へようと思ふ。』と言つた。けれども少年はこれをも見かへらなかつた。

今度は白い海狸帽を食指の先でクル／＼廻し出したが、その少年は――態とらしくは有つたが――これにも目をかけない。

そこでヴォテイニは苛々して時計を出して、これを開いて機械を見せた。少年はやつぱり頭を向けない。僕は、――

『銀に鍍金したのかね。』と問うた。

『イヤ金さ。』ミヴォテイニがいふ、

『純金ぢやあるまい。少しは銀が入つて居るだらう。』

『何、そんな事があるものか。』とヴォテイニは言つて、これを少年の前に突き出して、彼に向ひ、――

『君、見て御覽。純金ぢやないかね。』

少年は、そつけなく、『僕は知らない。』といふ。

『オヤ、何といふ高慢であらう！』とヴオテイニは怒つて叫んだ。

この時、ヴオテイニのお父さんが追ひついて来て、これを聞いて、暫くその少年を熟視して居られたが、やがて息子の方に向つて、鋭く、『黙れ。』といつて、それから、ヴオテイニの耳に口をよせて、『この人は盲だよ。』

ヴオテイニは、びつくりして、飛び上つた。そして少年の顔を眺めた。眼玉が硝子の様になつて居て、何にも見えないのだ。

ヴオテイニは耻ぢ入つて、物も言はず、目を地に注いで居たが、たうとう、言ひ悪くさうに斯う言つた。『僕が悪かつたんです、知らなかつたから。』

盲の少年は何もかも承知して居る様子で、親切さうな、悲しさうな聲で云つた。――

『いえ、何でも無いことです。』

なる程、ヴオテイニは、見え坊であるが、併し、全く悪氣は無いのだ。それから、散歩の終るまで、またと笑はなかつた。

初 雪

十日 土曜日

リボリ街道の散歩も、もうお仕舞ひだ。今度は綺麗な僕等の友達がやつて来た、――初雪が降つたのだ。昨日夕方から、大きいのが、ヒラ／＼ヒラ／＼降つてゐるが、今朝は眞白に積つた。學校の窓硝子に、チラ／＼あつて、窓縁に積ものを見ると本當に面白かつた。先生まで手をもんで、外の方を見て居られた。雪達摩をこさへる事や、垂氷のさがることや、夜になつて、爐に火をどんどん焚いて、面白い話をするなど考へ出して、誰も課業を受ける氣がしなかつた。只スタルデイ一人、雪なんか、見向きもしないで、課業に一心になつて居た。

學校がひけて歸る時には、あ、皆どんなに喜んだらう！頓狂な聲を出して躍り歩いて、雪をつかんだり、雪の上を駆け廻つたりした。お迎ひに来た父兄のさして居る傘の上も、丸で白くなつて居た。巡査の帽子の上にも積もつて居た。僕等の革袋も一寸の間に白くなつて仕舞つた。皆狂氣の様に喜んで居た。どんなことにも笑つた事のない鍛冶屋の息子のブレロシイも今日は笑つて居た。馬車にしかれかけて居る子供を助けたロベテイも、撞木杖に倚つて飛んで居た。まだ雪に手の觸れたことのないカラブリアの少年は、桃でもたべる様に、雪を小さく圓めて食べて居た。野菜賣の子のトミシ

イは革袋の中に雪をつめて居た。一番可笑しかつたのは「石屋さん」だ。僕の父さんが、明日家に遊びに来いと言つた時、口に雪を一杯頬張つて居たので、吐き出すことも飲み込むことも出来ず、黙つて父さんの顔を見てばかり居た。皆がこれを見て、どつと笑ひ出した。女の先生方も、走つて出て来られた。皆矢張り嬉しさうにして居られた。あの氣の毒な、僕の二年級の時の身體の弱い先生も、咳嗽をしながら、雪の中を驅けて来られた。隣の學校から、女の子供等が、ヤツ／＼いつて走つて来て、毛氈を布いた様な雪の上を躍り回つて居た。先生方は大きい聲で『早く歸れ／＼。』と言つて居なすつた。先生方も矢張り、冬が来て狂氣の様に喜ぶ子供等を見て、笑つて居られた。

エンリコよ、お前は冬の来たのを、喜んで居るが、世には、着物も、靴も、身を暖める火も無い子供が澤山にあることを忘れてはならぬよ。教場を温める爲に、霜やけで血の出る手に薪を少し宛持つて遠い路を學校に通ふ子供もゐる。又世界の中には、全く雪の中に埋れて仕舞ふ様な學校も澤山ある。そんな所では、子供等はもう、齒の根も合はずガタ／＼慄へて、しきり無しに降る雪を眺めて怖れを抱いて居るのだ。その雪が深く積もると、山から雪崩が落ちて来て、家も埋つて仕舞ふのだ。お前等は冬が来ると喜んで居るが、世には冬が来ると共に、凍えて

死ぬる様な人が澤山ある事を忘れてはならないよ。

父より

「石屋さん」

十一日 日曜日

今日は「石屋さん」が僕の家へ訪ねて呉れた。父親の着古しを着て居て、それに石の粉や、石灰がついて居た。今日は来て呉れるといふので待つて居たので、僕は大きく嬉しかつた。父さんも喜んで居た。

本當に面白い子だ。内にはひると、雪にぬれて居る破れ帽子を脱いで、ポケットの中に押し込んで、ツカ／＼とはひつて来て、林の様な顔で、キョロ／＼見廻す。食堂に入るに、道具など見まはり、駝背のボンチ繪に目をつけて、兎の顔眞似をやつた。あの兎の顔を見ては、誰だつて笑はずには居られない。

僕等は積木をして遊んだ。「石屋さん」は塔や橋などを作ることが、不思議に上手で、こんな事にかゝるに、大人の様に眞面目に辛抱強くやるのだ。積木をして居る中に自分の家の事を語つた。屋根裏の一室に住んで居るさうだ。父は夜學校に稽古に行つて居る。母は洗濯屋をして居るといふ事

も話した。両親は、この子を可愛がつて居るに違ひないと、僕は思った。着物は古くなつて居るけれども、温かく着て居り、又破れた所などは丁寧に、繕つてあり、胸襟なども、母親の手で、キチンと結んであるのだ。父親は大きい人で、戸口をはひる時は、屈んではいるさうだ。いつでも息子の事を、兎つ面くと呼んで居るさうだ。「石屋さん」は小さい方だ。

四時になると、僕等は、安樂椅子に倚つて、パンや、乾酪ドライチーズを食べた。椅子から立つと、「石屋さん」の上着の白い粉が、椅子の背に着いて居るのを見て、僕が手ではたかうとしたら、どういふわけか、父さんが、僕の手を抑へてそれを止めた。そして、後でそつと自分で拭いて居られた。

僕等が遊んで居る中に、「石屋さん」の上着のボタンが一つ取れたので、母さんがそれを縫ひつけてやつた。「石屋さん」は顔を赤くして、それを見て居た。

それから又僕がボンチ繪の本を見せた所が「石屋さん」は知らずく其繪の通りの顔をする。それを見て、父さんまで吹き出した。歸る時には大層喜んで、破れた帽子をかぶる事も忘れて居た。僕が送つて出ると、御禮にもう一度兎の顔をして見せた。名はアントニオ、ラコブといつて八年と八ヶ月になる子だ。

エンリコよ、お前が椅子をはたかうとした時、私が何故止めたか分らないのかね。それは、

友達の見て居る前で、之をはたけば、なぜこんなに汚したんだねと言つて責める事になるからだ。あの子は態としたのでは無いし、又あの子の着物について居るものは、父親が仕事をしてゐる間に着いたものだ。仕事をして着いたものは汚いものではない。石灰であらうが、漆であらうが、埃であらうが、それは汚いものではない。労働は汚物を生ぜず。労働して居る人を見て、『ア、汚い。』など、は決して言ふもので無い。彼の人は労働の痕跡を着物に止めて居る。』と言ふべきだ。之を忘れてはならぬよ。そして、お前は、「石屋さん」を愛して上げねばならぬ。第一には、お前の同窓であり、第二には、労働者の息子であるからだ。

父より

雪 球

十六日 金曜日

まだ雪が續いて降つて居る。今日學校から歸りがけに、雪の中で氣の毒な事が起つた。子供等は町へ出ると、石の様に堅い雪球を作つて盛んに投げ合つた。人が大勢そのあたりを通つて居た。「よせく、そんな悪戯するんでない。」と叱つて行く人もあつた。忽ちそこに、けた、ましい叫び聲がきこえた。見ると一人の老人が、帽子を落して仕舞つて、両手で顔を蔽うて、よろめいてゐた。一

人の少年が、その側に立つてゐて、「助けて下さい〜。」と叫んで居た。

人々が四方から走せ集つた。老人は雪球で眼を打たれたのであつた。子供等は皆散り〜に逃げて行つて仕舞つた。僕は父さんと木屋の前に立つて居たが、僕等の方へ走つて来る子供も大分あつた。その中には、パンを嚙つてゐるガローンもコレテイも、「石屋さん」も、郵便切手を集めて居るガロフイも居た。その時、老人の周囲には、大勢人が集つて、巡査も來た。あちこち走り廻つて居る人もある。「誰が投げたんだ〜？」と口々に呼ばはる。

ガロフイが僕の傍に立つてゐるが、見ると、顔は眞蒼で、身體中慄へて居た。「誰だ〜、誰がしたんだ？」と群衆は叫ぶ。

ガローンがやつて來て、低い聲でガロフイにかう言つた。「さあ、行つて白狀し給へ。黙つて居るのは卑怯だ。」「僕は故意としたんぢや無いのだから、」とガロフイは慄へ聲で答へる。「それでも自分の義務を盡さなければいけない。」「ガローンがいふ。「僕よう行かない。」「そんな事ぢやいけない。さあ來給へ。僕がついて行くから。』

巡査や人々の聲がまだ聞えて居る。「投げた奴は誰だ。眼鏡がこはれて、硝子が眼に立つたのだ。盲になつて仕舞ふよ。けしからぬ奴だ。』

ガロフイは地に倒れるであらうと僕は思つた。ガローンは「來給へ、僕が善い様にしてやるから。」といつて、ガロフイの腕をとつて、病人でも、引つ張る様にして連れて行つた。人々が之を見て、様子を知り、拳を上げて打たうとするものもあつた。ガローンは人を押しのけて「あなた方は、大人が十人もかゝつて、一人の子供に向ふのですか。」と言ふ。人々は靜まつた。

巡査がガロフイの手を取つて、群衆を押し分け〜、負傷者を臥かしてある家に引いて行つた。僕等もその後についていつた。見ると、その負傷した老人は、僕等の家の五階に、甥と共に住んで居る雇員であつた。ハンケチを目に覆つて、椅子の上に寐て居た。ガロフイは、聞きとれぬ様な聲で「私は、故意としたのでは無かつたんです。」と、怖々ながら繰りかへして居た。押しかけて來た群集の中から、「地に打伏して謝罪せよ。」と聲を勵して言つて、ガロフイを後から突き倒さうとしたものがある。この時、兩腕に彼を抱き止めて立たせ、「いや、皆さん、それはいけません。此子は自分で申し出たのですから、そんなに辱しめないでも善いぢやありませんか。」といふ人がある。皆、黙つて仕舞つた。これは、校長先生であつた。先生は、ガロフイに向つて、「お詫をしなさい。」と云はれた。ガロフイは、忽ち涙を迸らせて、老人の膝に抱きついた。老人は、手をのべて、ガロフイの頭を探り、その髪を撫でた。人々がそれを見て、

「もうお歸り。それで善いから、家にお歸り。」といふ、僕等が群集をぬけ出で、歸路についた時、父さんが、斯う言つた、――

「エンリコ、お前は、かう言ふ場合に、自分の過失を白狀して、責任を負ふ勇氣があるか。」僕は「必とさうします。」と答へた。父さんは重ねて「お前は今私の前で、必とさうするといふことを誓ひますか。」と言はれたので、僕は「ハイ、お父さん、僕誓ひます。」と言つた。

女教師

十七日 土曜日

ガロフイは、今日、先生から叱られること、思つて、恐れて居たが、先生は缺席で、助手も居なかつたので、クロミ先生といふ、一番年上の女先生が代りに來られた。この先生は、二人の大きい息子さんがあるが、一人が病氣なので、今日は悲しさうにして居られた。生徒等は女先生を見ると喝采した。先生は靜かな、おとなしい聲で「私の白髪に敬意を拂つてください。私は教員であるばかりでない、また母親ですよ。」といはれた、皆黙つて仕舞つた。獨り鐵面皮のフランチイが、竊かに、先生を嘲弄して居たばかり。

僕の弟の級の受持のデルカタイ先生は、クロミ先生の組に行かれるし、デルカタイ先生の組には、

「尼さん」といふ仇名のついた女先生が出られた。この先生は、いつでも黒い服をきて、黒い前垂をかけた方で、色の白い、髪の滑かな、眼の光つた、聲の細い人だ。始終祈禱をつぶやいて居られる様だ。大層柔和な方で、糸の様な細い聲で、殆んど聞ききれないやうに話される。大きい聲をしたり、怒つたりする様な事は、決してせられない。それでも一寸指をあげて、戒めなされると、どんな腕白小僧でも、すぐ頭を下けて靜肅になる。教場がまるでお寺の様だ。それで「尼さん」と稱ばれるのだ。

それから、今一人僕の好きな女先生がある。一年の三號室の若い先生で、顔の蔷薇色な頬に笑凹の二つある方で、小さい帽子に、大きな赤い羽をつけて、頸に小さい黄色な十字架をかけて居られる。御自分も快活だが、生徒も快活にさせられる。いつも銀の玉をころがす様な聲を出されるので、丁度歌つて居られる様だ。鞭でテーブルを打つて、手を叩いて、それで子供を静めなされる。生徒が學校から歸る時には、子供の様に走つて行つて、列を直してやつたり、帽子を直してやつたり、外套のボタンを懸かてやつたりして、風引かぬ様にと氣をつけてやられる。喧嘩などせぬ様に、町までついて行かれる。両親には家で子供を打たぬ様に注意せられ、子供が咳嗽をする時には、薬をやつたり、風引いて居るのには、手套を貸してやつたりせられる。小さい子供が、取りついて接吻を

ねだつたり、而被^ひや、外套を引つ張るには困つて居られるが、それでも、之を止めもせず、ニコニコして皆に接吻^{くちやく}をしてやられるのだ。家に歸られるときは、着物も何もクチャ／＼になつて了ふが、それでも喜んで歸られる。先生は又女の子の畫の先生で、御自分の俸給で、お母さんと弟さんとを養つて居られるさうだ。

負傷者訪問

十八日 日曜日

愛の學校

眼に負傷した雇員の甥は、あの帽子に赤い羽をつけてゐる女先生の受持の生徒だ。今日その叔父の家で見たが、叔父はこれを我が子の様に可愛がつて居る。僕が今朝、來週の月並講話『少年筆耕』といふのを先生に命ぜられたので、清書してしまふと、父さんが『さあこれから五階に行つて、あの眼を傷めた老人を、見舞つて来よう。』と言つたので、僕もついて行つた。

薄暗い室に入ると、老人は高い枕に倚りかゝつて、寐て居た。お神さんが側に坐つて居て、甥が室の隅に遊んで居た。老人は僕等を見て、大層喜んで、席を勧め、もう大變に宜しい、眼の傷は急所でなかつたので、四五日の中には治るであらうと言つて居た。

『ほんの一寸した怪我だつたんです。可哀さうに、あの子が心配して居るでせう。』と老人は言つて、

今にも醫者が来る筈だといふ。その時鈴が鳴つたので、お神さんは『それお醫者さんだ。』と振り向くミ戸が開いた。見ると――それがガロフイなのだ。長い外套をきて、闕際に立つたまゝ、首を低けて、はいり得ない様子。

『どなた?』と老人が尋ねる。

『あの雪球を投げた子です。』と父さんが云ふ。

それを聞いて老人は、――

『オ、お前さんか、おはいり、見舞に來て呉れたんだね。さうですか。もう大層宜しいから安心してお呉れ。もう直ぐ治るのだ。どうぞおはいり。』

ガロフイは、僕等が居ることには、氣のつかぬ様子で、泣きたいのをじつミ泳へて、老人の寐臺に近づいた。老人はガロフイを撫で、――

『大きに有りがたう。歸つたら、お父さんや、お母さんにも宜しく云つてお呉れ。経過が大層良いから、もう案じて下さるなつて。』ガロフイはモチ／＼して何か言ひたさうにして居る。老人は、

『何か外に用事があるのか? 何かな。』といふ。

『私、何にも外に。』

負傷者訪問

「それではお歸り、また逢ひませう。安心してお歸り。」
ガロフイは戸口の所まで立ち止つて、見送つて出た甥の顔を見て居たが、不意に何か外套の下から出して、それを甥の手に取らせ、「之は君に上げます。」と早口に低い聲でさ、やいて、電の如くに去つてしまつた。

少年は貰つた品を老人の所へ持つて來た。包紙に「進呈」と書いてある。中をあけて見て、驚いた。それはガロフイが、平生あれ程大切に居た、又あれ程骨を折つて集めた郵便切手帳であつたのだ。ガロフイは、この命にもかへぬ程の寶物を、許して貰つた御禮に持つて來たのであつた。

少年筆耕(月次講話)

校 學 愛

ギウリオは尋常五年生で、年は十二、髪は黒い、色の白い子であつた。父は鐵道の雇員で、ギウリオを頭に、大勢の子供があるので、貧しい暮しを立てかねて居た。子煩悩で、ギウリオには、何事も、言ふ様にさせてゐたが、たゞ學校の事だけは始終八釜しく言つて、「勉強せい〜」と勵まして居た。これを早く卒業させて、好い地位を得させて、暮しの助けをさせねばならぬのである。

父はもう大分年をとつてゐる上に苦勞の爲に、年よりもふけて居た。それでも、一家を支へねば

ならぬのだから、日々の勤めの外に、諸方から、書き物を受け合つて夜遅くまで、机に向つて居るのだ。この頃は、雑誌の帯封に宛名を書くことを頼まれて居る。大きい正しい文字で、それを五百枚かくき、六十錢程になるのだ。けれども、この仕事は餘程つらいと見えて、老人は食事の時、時、それを家族にこぼすのであつた。――

『どうも眼が悪い様だ。あの夜仕事に命が縮んで仕舞ふ。』

ある日ギウリオは、――

『お父さん、私が代つて書きませう。私でも、お父さん位立派に書けますよ。』と云ふ。父は、「否、お前は勉強しなければならぬ。お前は、學校の事が一番大事だから、一時間でも、お前の時間を取つてはならぬ。お前の志はありがたいが、そんな事は決して、させないから、もう其の事は言つて呉れるな。』

ギウリオは、父の兼ての性質を知つて居るので、強ひて争はず、獨り心の中に考へて居た。毎晩丁度夜半に、父が仕事を止めて、臥床に歸るのをギウリオは知つて居た。幾度も、時計が十二時を打つと、椅子を後に引く音がきこえて、父の静かな足音のするのを聞いた。そこで或る夜ギウリオは、父が臥床に入るを待つて、極く靜かに着物をつけて、抜き足して、父の室にはいつて、洋燈を

ともして机に坐つた。机の上には白紙の積んだのと、宛名の名簿とがある。ギウリオは筆をとつて、正しく父の筆跡に似せて書き出した。心は喜びに躍つた。いくら怖い様な氣もした。書いた紙を段々積み重ねて、折々ペンを置いて、手をもんでは、又元氣を起して書く、じつと耳を傾けて微笑しては筆をすゝめる。百六十枚書いた。一寸二十錢だ！之で止めて、ペンを元の位置にかへして、燈を消して、足を爪立て、自分の寢床に歸つた。

翌日の晝飯の時、父は上機嫌で膳に向つた。父は少しも氣づかない様子であつた。これはたゞ器械的に仕事をして、時間が來たら止めて、翌朝になつて、書いた帶封の數を數へて見るからである。今日はいかにも上機嫌で、ギウリオの肩を叩いて、――

愛の學校

『おいギウリオ、お父さんは中々の働き手だよ。昨夜はな、三時間の中に、例よりは三分の一だけ餘計に仕事をしてゐる。まだ、私の手は達者だ。眼だつて、まだ慥かなもんだ。』

ギウリオは黙つて聞いて居たが、心の中は嬉しかつた。あ、お父さんは、僕が書いて上げた事を知らずに、自分が若くなつた積りで居る。よし、大にやらうと心で思つた。

その夜も、十二時が打つと、ギウリオは起きて仕事にかゝつた。かうして幾日か経つたが、父はまだ知らない。唯一度、夕飯の時に、父が、『どうも不思議だ、此頃は油が大層要る』と言つて驚い

て居た。ギウリオは之を聞いて、ギクツミしたが、話はそれ切りで済んだので、その後も毎晩起きて書いた。

所が、毎晩途中で起きるので、ギウリオは睡眠不足になつて、朝起きるときは疲れを覚え、夜、學校の課業を複習する時には、眠くてならぬ様になつた。ある夜、ギウリオは、生れてから始めて、机に向つて居睡りをした。

『こら、しつかりせんか、勉強するんだ。』と、父は言つて手を拍つた。ギウリオは眼をさまして身ぶるひをして、又勉強に取りかゝつた。けれども次の夜も、又次の夜も、同じ様に居睡りをし、段々悪くなつた。いつも書物の上に突伏して眠つたり、朝寐をしたり、復習をするにも、いかにも倦怠の色が見えて、學問がいやになつたといふ様子。父は之を見て、時々注意をしたが、遂には怒る様になつた。今まで一度も子供を叱る様な事なかつた人であるのに！

或る日の朝父は息子に――

『ギウリオ、お前には困つて仕舞ふよ。一向以前の様ではなくなつたぢや無いか。氣を附けろ、一家の望みはお前の一身にかゝつて居るんだから。分つたか。』

始めて斯うひどく叱られて、ギウリオは心を痛めた。さうだ、こんな事は何時までもする譯には

行かぬ。もう止めねばなるまいと、心の中に思った。

所が、其日の夕、晚餐の時、父は大層上機嫌で、――

『皆聞け、今月は先月よりも六圓四十錢多く贏ちかかつたのだ』と言つて、食卓の引出しから、お菓子の袋を取り出して、これはお祝に買つて来たのだといふ。子供等は手を拍つて喜んだ。この時ギウリオは、又心を取り直して、元氣を恢復して心の中に、『否、やつぱり、止めない事にしよう。晝の間も一層勉強して、夜もやつぱり、働かう』と思つた。父は猶ほ語をついで『六圓四十錢餘計だぞ！これは誠に結構だが、只この子ばかりが』と言つて、ギウリオを指して、『どうも己の氣に入らぬ。』といふ。ギウリオは黙つてこの詰責をうけ、溢れ出ようとする涙を呑み込んだが、心の中は嬉しかつた。

それから又一生懸命に努力をつゞけた。けれども、疲勞に疲勞が加はつて、堪へ切れない様になつた。かうして二ヶ月経つたが、その間、父は相變らず、ギウリオを叱つた、睨みつける眼付が段怖ろしくなつた。或る日父は學校の先生を訪ねて、この事を相談するに、先生は『ハイ、出来るは出来ます。根が利發な性ですから。しかし以前の様な熱心はなくなりましたね。眠たさうで、欠伸ばかりして、氣が散つて居るのです。作文を書かせても、短いものを一寸書いて仕舞ふといふ様

な風で、文字なども、いゝ加減です。もつとくよく出来るのですがね。』と言つて呉れた。

その晩父は、ギウリオを傍に呼んで何時よりも、一層嚴かに言つてきかせた。――

『ギウリオ、お前も私がどんなに骨を折つて、一家の計を立て、居るか、分らないのか。私は、お前等の爲に命を縮めて居るのだよ。それにお前は、それを何とも思はず、親の事も兄弟の事も思はないんだ。』

『ア、否、さう言はないで下さい、お父さん』とギウリオは涙にむせんで叫んだ。それから、今迄の事を一切打明けようとして居ると、父は之を遮つて、――

『お前にも、家の事情はよく分る筈だ。皆の者が、自ら進んで、辛抱せねばならぬ必要があるといふ事は分つて居るだらう。私はこの通り、仕事を二倍にして働いて居るのぢや。今月は鐵道會社の方から、二十圓の賞與を貰ふ積りで、あてにして居た所が、今朝になつて、それが少しも貰へない事になつたといふ事が分つたのだ。』

ギウリオはこれ聞いて、口許まで出かけて居た口葉を抑へて、心の中に繰りかへした。――

『イヤ、何も言ふまい。どこまでも隠して、やつぱりお父さんの手傳をして上げよう。一方でかける心配を、他の一方で償はう、學校でも勉強して及第せねばならぬが、何より大事な事は、お

父さんを助けて、一家の計を立て、また少しでもお父さんの疲れを休めてあげる事だ。さうだ、さうだ。」

それから又二ヶ月経つた。息子はやはり、夜仕事をして、晝は疲れ切つて居る。父はやつぱり、怒つて居た。所が一番困つた事には、父親が息子に對して段々冷淡になつて、もうこの子は到底見込のない、不實者であると思つた風で、ギウリオにはあまり物も言はず、ギウリオの目を避ける様になつたのだ。ギウリオはこれを見て、心苦しさに堪へず、父が向ふを向いて居る時に、後から竊かに拜む様な身振をして居た。悲しみと疲れとの爲に、彼は益々瘦せ衰へ、顔色青ざめて、愈々その學業を怠る様になつた。もう何時かは、こんな事を止めねばならぬといふ事は、自分にも分つて居るので、毎夕床につく時には、「今夜から愈々、起きない事にしよう。」と言つて眠る。けれど十二時が打つのを聴くと、前の決心は忽ちゆるんで、どうも床の中にねて居るのは、自分の義務を怠る様に思はれて、家の金を二十錢宛盗む様な氣がしてならぬ。そこで又起きあがる。何時かは父が目醒して、自分を見つける事もあらうし、或は何か偶然の事で、父が帶封を數へて見る様な事があつて、自分の偽りが發覺する様な事もあらう。さうすれば、自分の方から別に白狀しなくとも自然に分る様になるであらうと思つて、やはり夜の仕事をつけた。

或日の夕飯の時、母親がギウリオを見て、常より大そう顔色が悪い様に思つて、――

「ギウリオ、お前は氣分が悪いぢやないか。」と言つて、夫に向つて、

「ギウリオはどうかしたのですよ。あの色の青い事を御覽なさい――ギウリオ、マアお前は、どうしたのかい。」と心配さうに言ふ。

父はギリウオの方をジロツツと見て、

「病氣になるのも自分の業だ。以前に勉強して居た頃には、さうで無かつたのだ。」

「だつて、あなた、病氣ぢやありませんか。」と母が云ふと、

「もう彼奴の事は構はぬ。」といふ。

この言葉を聞いて、ギウリオは胸を刺される様に感じた。あ、お父さんは、もう自分を構つて下さらんのか。自分が一寸咳嗽をしても、あれ程大騒ぎをしたお父さんが！もうお父さんは、自分を愛して居ないのだ。それに違ひない。お父さんの眼中に、もう自分といふものは無いのだ。あ、お父さん、お父さん！私はあなたの愛が無ければ生きて居られない――どうしてもこれは取りかへさねばならぬ。何もかも言つて仕舞ひます。もうあなたを欺きません。あなたが再び私を愛してさへ下されば、私はどんな事があつても昔の通りに勉強します。あ、今度こそは愈々決心しましたと、

胸につまる様な思ひをした。

けれども、その夜も習慣の力で、自づと起き上つた。起き上ると、今一度、今まで働いた室に行つて暇をして來たくなる。行つてランプを燈して、その机の上にある帶封用紙の束を見るに、何だかこれだけで止めるのが悲しくなる。我を忘れてペンを取つてまた書き初める。所が手を延ばすはすみに一冊の本に當つて、それが下に落ちた。満身の血が一時に胸に集まつた。若し父が目醒したらばどうであらう。尤も悪い事をして捕へられるといふ譯ではなし、自分も今までに、幾度か白狀して仕舞はうと思つた事ではあるが、併し、今、若し父が目醒して、こちらの方へ歩いて來る足音が聞えたらば！そして此處で見つけられたらば！母がどんなに驚くであらう！それに今までは思ひも附かなかつたが、父が自分に對して、いかにきまり悪く思ふことであらう——こんな色々な考が一時に起つて來てギウリオはブル／＼と慄へた。耳を傾け、息をこらして聞くに、何の音も聞えない。一家は皆眠靜まつて居る。父は聞かなかつたのだ。ギウリオはホツトため息をして、仕事にかかつた。

外には淋しい町に逡巡の靴音が聞える。それから馬車の轟きが遠くに消えてゆく。暫くして、荷車のガタ／＼といふ音が通る。それから又靜まり返つて、時々犬の遠吠がきこえるだけ。ギウリオ

はセツ／＼と書いて居る。ペンの音がキ、と耳につく。

此の時父はギウリオの後に立つて居たのだ。父は本の音に目を醒して起き上り、長い間待つて居たのだ。荷車の音が父の足音や、戸をあける音を消してしまつたのだ。今や父は、その室に入つて、白髪頭をギウリオの小さい黒い頭の上に傾けて、ペンの走るのを見て居る。忽ち、今迄の事がすつかり分つて仕舞つた。やるせなき後悔の念と同時に、可愛さが胸にせまつて、其處に釘付になつて仕舞つた。

突然ギウリオはキャーと叫び出した。人の兩腕が自分の頭を抱いて慄へたのだ。

「ア、お父さん／＼助忍して下さい／＼／＼」彼は父の啜泣の聲をきいて、斯く叫んだ。

父は涙にむせんで、息子の顔に接吻しながら、――

「お前こそ許して呉れ。もう分つた。何もかも分つた。おれこそ助忍して貰はねばならぬ。サアお出で。」といつて、息子を抱へる様にして、母親の寐床に連れゆき、既に目をさまして居た母の腕に抱かせて、――

「この愛しい子を接吻しておやり、可愛さうに。この三ヶ月の間眠らずに居て一家の爲に働いて居たのだ。おれは、あの通りに怒つて許り居たのに。」

母は可愛い我が子を胸に抱きしめて、物もよう言はなかつたが、――

『さあ坊や、行つてお休み。あなたどうぞ連れて行つて下さいな。』といふ。

父は母の腕よりギウリオを抱き上げ、彼の寢室につれて行つて床にねかし、枕を直したり、蒲團をかけてやつたりした。

息子は幾度も繰りかへして言つた、――

『お父さん、有りがたう。もう行つてお休みなさい。私はもう宜しいのです。さあお休みなさい。』

けれど、父は寐臺の側に膝まづいて、息子の眠入るのを待ち、その手をとつて、――

『寐ろく坊や。』と言つて居た。

ギウリオは疲れ切つて居たので早速寐入つた。數ヶ月以來初めて安眠して、長く楽しい夢を結んだ。目を開いた時は、朝日が高く上つて居たが、この時初めて氣がついて見ると、自分の胸に近く寐臺の端に、父の白髪頭が横はつて居る。父は斯様にして、一夜を過したのだ。額を息子の胸につけて、猶ほ、眠つて居るのであつた。

鐵 石 心

二十八日 水曜日

右の少年筆耕のやつた様な事の出来るものは、僕等の組でスタルデイ一人だ。今朝學校で二つの事件があつた。一つはガロソイがあゝの老人から例の郵便切手帖にグアテマラ共和國の切手を三枚添へて返されたので大喜びして居た事。その筈で、ガロソイはこの三ヶ月間、グアテマラの切手を求めて居たのだもの。今一つの事件は、スタルデイが二等賞を貰つた事。あの馬鹿みたいなスタルデイが、デロシイに次いで二番になつたんだもの！皆が驚いて仕舞つた。十月であつた、スタルデイの父親が初めてスタルデイを學校へ連れて来て、皆の前で先生に向つて、

『どうも餘程御面倒を見て頂かなければなりません。この子は何も分らないのですから。』と言つた時、誰が今日の事があらうと思ひもかけようか、皆初めからスタイルデイは馬鹿だと思つて居た。けれど、彼は少しもかまはず、『斃れて後己む』と言つて居た。そして晝でも、夜でも、家でも、學校でも、町を歩いて居るときでも、一生懸命に勉強した。人が何といつても、相手にならず、邪魔するものは、蹴飛ばしておいて、ズン／＼やつたので、たうとうこの馬鹿が、偉い事になつて仕舞つた。初めは算術はちつとも分らず、作文だつて譯の分らぬ事ばかり書いたもので、一句も記憶することが出来なかつたのだが、今は算術の問題もよく出来るし、作文もかけるし、本は唱歌の様に暗誦して居る。

スタイルヂイの鐵石心はあの容貌を見れば、すぐ分る。太くて、丈が低く、頭が四角で、頸が無
い様で、手が短くて大きく、聲がドス聲ときて居る。新聞の切れでも、芝居の廣告でも、何んでも
かでも、之を讀んで覺えるのだ。十錢も金が出来ればすぐ本を買ふ。もう小さい圖書室を拵らへて
居るさうだ。僕を連れて行つて見せて呉れると言つて居た。誰にも物を言はず、誰とも遊ばず、學
校では、兩手で顛顛の所を押えて岩の様に固くなつて先生の仰しやる事を聞いて居る。あれが二番
になるとは、どんなに勉強したか知れない。可哀さうに！

先生は今日大分御機嫌が悪い様であつたが、それでもスタルヂイの賞牌を渡すときには、斯う言
ひなすつた、――

『スタルヂイさん、感心です。精神一到何事が成らざらんやです。』

スタルヂイは之を聞いて、一向得意になつた様子もなく、微笑ともしなかつた。賞牌をもらつて
席へ返ると、また顛顛に拳をあて、一層こり固まつて聞いて居た。

一番面白かつたのは學校から歸りがけであつた。スタルヂイの父親が玄關まで迎へに来て居た。
この人は鍼醫者で、息子と同じ様に太くて丈の低い、顔の大きい、聲の太い人だ。我が子が賞牌を
貰はうとは思ひもかけなかつたので、容易に之を信ぜず、たうとう先生が出て、本當にさうだと言

つて聞かせなすつた。すると父親はカラ／＼と笑つて、息子の背を叩いて、聲に力を入れて、――
『結構／＼、南瓜野郎、お前は物になるぞ。』と言つた。僕等はこれを聞いて皆笑つたが、スタルヂ
イ一人は、微笑ともせず、大きな頭をかゝへて、明日の課業の稽古を初めて居た。

感 恩

三十一日 土曜日

エンリコよ、お前の友人スタルヂイなら、決して先生の事を不足に思ふ様な事はあるまい。

お前は『先生は御機嫌が悪かつた。』と、さも腹立たしさうに言つて居るが、お前自身は、父さ
んや、母さんに對してさへ、機嫌を悪くする事があるぢやないか。先生が時々御機嫌の悪いの
も誠に無理の無い事だ。この長い年月、子供の爲に働いて、いらつしやるぢや無いか。生徒の
中には随分情愛の深い人もあるけれど、中には先生の親切を無視して、その御骨折を何とも思
はぬ様な、恩知らずがあつて、平均していふと、満足よりは、つらい方が多いのだ。みんな聖
人でも、あんな地位に居れば、時々腹も立たうでは無いか。お負けに御氣分の悪いのを押し
て、時々病氣の生徒にまで、行つて教へてやられるのだから、機嫌の悪うなるのも無理は無
い。

だから先生を敬愛するのです。父さんが敬愛して居る人だから、さうするのです。自分を忘れて仕舞ふ様な子供の爲に一身を捧げて居る人だから、そして、お前の精神を開いてくださる人だから、先生を愛するのですよ。今にお前も大人になつて、父さんも先生も、この世に亡い様になつてから、お前は初めて、父さんの事と共に先生の事を思ひ出すであらう。その時は、先生の疲れた様な悲しさうな顔を思ひ出して、今日の非を悔ゆる事であらう。伊太利全國、五萬の小學校教員は、お前等、未來の國民の精神上の父である。彼等は社會の裏面に立ち、輕少の報酬を受けて、我が國民の進歩發達の爲に働いて居るのである。お前の先生もその中の一人であるから、敬愛するのです。お前が如何に私を愛して呉れても、若しお前の恩人、殊に先生をも愛して呉れなかつたならば、私は一向、嬉しくない。先生を叔父さんのやうにおもつて愛するのです。先生がお前を可愛がられる時にも、責められるときにも、愛するのです。先生が正しい時にも、正しくない様に思はれる時にも、愛するのです。先生が機嫌のよい時ばかりでなく、悲しさうにして居らるゝ時には尙更愛しなければならぬ。いつでも先生を愛するのですよ。先生の名はいつも敬意を以て呼ぶのです。先生の名は父の名に次いで、世の中で最も貴く、最もなつかしい名であるのだから。

父より

一月の卷

助手先生

四日水曜日

父さんの言つた通り、先生の御機嫌の悪かつたのは、病氣の故であつた。この三日間、先生は缺席で、助手の先生が、代つて來られた。鬚の無い、子供の様な、小さい方だ。今日學校で、恥かしいことが起つた。この助手の先生は、どんなことを言はれても、怒らず、只「皆さん、どうぞ、おとなしく願ひます。」と言つてばかり居られるので、昨日も一昨日も、教場は大騒ぎであつたが、今朝は、全く、始末におへなかつた。大變の騒ぎで、先生の聲なんか、さつぱり聞えはしない。説諭しても、懇願しても、馬の耳に風だ。校長先生が二度まで、戸口から、のぞかれたが、校長先生が見えなくなると、騒ぎが、忽ち初まる。デロシイとガローンとが、後に向いて、生徒等に相圖をして、止めさせようとしても、誰も止めさうにしない。スタルデイ一人、靜かに机に肘をついて、顚額を抑へて考へ込んで居た。あの鼻の曲つた、郵便切手屋のガロフイは、一人前一錢宛出して、インキ入を取る富籤の名簿を作りにかゝり切つて居た。他の者は、しやべつたり、笑つたり、机に

ペン先を打込んだり、靴下止めのゴムで紙丸を投げつけ合つたりして居た。

助手先生は、一人一人、腕をつかまへて、ゆすぶつたり、壁に向けて直立させたりなさつたけれど——だめだ。もう仕様がないので、おとなしく！

「あなた方は、さうしてこんなにするんですか。罰が受けたいのですかね。」

斯う言つて、拳で机を打ち、怒り悲しめる聲で叫ばれる。「静かに——」。中々聞えはしない。騒ぎは、やつぱり続く。フランチイは先生に紙丸を投げつけた。口笛をふく者もある。頭をつ、き合ふものもある。何が何やら、さつぱり譯が分らぬ。その時小使が入つて来て、——

「先生、校長様から、あなたに御用で御座います。」といふ。

先生は、立ち上つて、失望した様な風で、急いで出て行かれた。騷擾は一層激烈になつた。

ガローンが俄かに立ち上つた。顔をブル／＼と慄はせ、拳を握り固めて、怒りの聲をあげて叫んだ。——

「止めろ、畜生共！、先生が親切だからつて、つけあがつて居る。若しか、先生が腕力でも出されたものなら、貴様らは、犬の様にへたばつて仕舞ふであらうに。卑怯者奴ら！今一度、先生を嘲弄して見ろ。僕がぶちのめしてやるから、親の前だつて、構ふもんでない！」

一同、静まつた。眼から火の出で様に、怒つて立つて居るガローンの風采は、實に立派であつた。まるで荒れたる若獅子であつた。一番悪さうな奴から、一人づつ、睨みつけた。すると皆頭を下けた。助手の先生が眼を赤くして、はいつて來られた時には、呼吸の音も聞えない位であつた。先生は意外に驚いて、すつくと立たれた。ガローンが、まだ、怒に身を振はして、立つて居るのを見て、それと氣づき、兄弟にでも物いふやうに、情愛の籠つた聲で、——

「ガローン君、有りがたう」と云はれた。

スタルデイ君の圖書室

99

學校の向側に住んで居るスタルデイの家に行つた。その圖書室を見て、僕は羨ましくなつて仕舞つた。スタルデイは金持で無いから、本を澤山買ふことは出来ないのだけれど、學校の教科書だの、親戚に貰つた本だの、みんな好く保存しておいて、又貰つた丈の錢は、皆本にするのだ。こんなにして、大分、本を集めて居る。立派な栗の木の本箱に入れて、緑色の覆がかけてある。お父さんが作つて下さつたのださうな。細い紐を引くと、緑色の覆ひが、片方に寄つて、三段になつた本が、あらはれる。色々な色の本が、ちやんま揃つて居て、金文字が光つて居る。お話の本やら、旅行記や

ら、詩集やら、又繪本もある。色の配合が大變旨いので、遠くから見ると、大層綺麗だ。白い本を赤の隣りにおき、黄を黒の次におき、又青が白の側においてあるといふ様な風で、スタルデイは、時々之を並べ變へて喜んで居る。自分で圖書目錄をつくつて、圖書館長然として居る。始終木箱の近くに居て、塵を拂つたり、本を繰りかへしたり、とちを調べて見たりする。あの太い指で本を繰りひろけて、紙の間へ、息を吹き込んだり何かするのを、見て居ると、本當に面白い。本はみな新しくしてゐるのだ。僕のなんか、みんな、いたんでしまつて居る。スタルデイは、新しい本を買つて来て、之を磨き上げて、飾り付け、又取り出しては、眺めて見たりして、實の様に大事にするのが何より楽しみださうな。僕はスタルデイの家に一時間も居たが、外には何も見せて呉れなかつた。暫くして、大きな、太つたお父さんが出て来て、スタルデイの頸の付根を叩き、息子と同じ様な大きい聲で、僕に向つて、――

『此奴はどうでせうな。この唐金頭は、随分、しつかりして居ますから、物になりませうね』といふ。

スタルデイは、こんなになぶられて、大きな獵犬の様に眼を半分閉ぢて居た。

どういふものか、僕はスタルデイに對して、冗談が言へなかつた。僕より、たつた、一ツ年上だ

とは、さしても思はれない位だ。僕が歸る時、スタルデイは送つて出て、しかつめらしく、――
『それぢや、又お目にかゝりませう』と言ふので、僕も思はず、大人にいふ様に『どうぞ御機嫌よう』と言つて出た。

僕は家へ歸つて父さんに、斯う言つた、――

『スタルデイは、才もなく、行儀もよくないので、顔を見ると、吹き出したくなるのだけれど、さういふものか、あの子に逢ふと、いろいろ教へられるこゝがあるのですよ。』すると、父さんは、『それはあの人には、しつかりした所があるのだから』と言つた。僕は又、『あの子の家へ、行つてもあんまり話もしません玩物も見せて呉れなかつただけで、それでも私はあそこに行くのが好きなのです』といふと、父さんは『それはお前があの子に心服して居るのだ』といつた。

鍛冶屋の息子

さうだ、父さんの言ふ通りだ。だが、僕はブレコシにも心服して居る。心服して居る。心服して居るではまだ云ひ足りない位だ。ブレコシは、あの鍛冶屋の息子で、瘦せて居て、身が弱くて、悲しき眼付をして、おづく／＼して、誰に向つても、『御免なさい／＼』といふ。それでもよく勉強

する子だ。父親は酒に酔つて歸つて、何の譯もなく、あの子を打擲したり、本や筆記帳など、投げ散らしたりするさうだ。よく、顔に黒い痕や、青い痕をつけて、學校に来る。どうかすると、顔の脹れて居る事もある。眼を泣きはらして居ることもある。それでも父親が打つたなどは、どんなことがあつても言ひはしないのだ。『お父さんが打つたんだね』と友達がいふと、ブレコシは直ぐに『嘘だ〜』と言つて父親をかばふのだ。

ある日、先生が、半ば焼けて居る作文帳を見つけて、ブレコシに、――

『これは君が焼いたのぢやなからう。』

といはれた。すると、ブレコシは慄へ聲で、――

『否、私が火の中に落したのです』といふ。本當は、父親が酔拂つて歸つて来て、机でも、ランプでも蹴たはしたのに違ひない。

ブレコシの家族は、僕等の家の屋根裏に住んで居るので、門番が、僕の母さんに何もかも、話してきかすのだ。シルヴィア姉さんが或る日、ブレコシの泣いて居るのを聞いた。その時は、文法を買ふ錢を父親に乞ふたので、父親が階段から、蹴落したのであつた。父は、酒ばかり飲んで、仕事をしないで、家族は飢ゑに苦しんでゐる。ブレコシも度々ひもじい腹を抱へて、學校に来て居て、

ガーロンにパンを貰つて嚙つたり、一年の時に教はつた赤い羽をつけた女先生に林檎を貰つてたべて居る事もある。それでも、『お父さんが食べ物を買へない』なんていふ様な事はありはしない。

父は學校に立ち寄ることもある。色が蒼ざめて足はよろ／＼して、恐ろしい顔をして、髪は眼の上に覆ひかぶさり、帽子を歪めて、かぶつて居る。ブレコシは町で父親の姿を見ると、ブル／＼と慄へて居るが、それでも、直ぐ走つて傍へ行く。父は我が子を認める様子もなく、何か外の事を考へて居る風だ。

可愛さうにブレコシは破れた筆記帳を繕つたり、人の本を借りたりして勉強するのだ。シャツの破れをピンで止めたりして居る。大き過ぎる靴をはき、ズボンに地に引きすり、長すぎる上着をきて、肘の所まで袖を折りかへして居る。あれを見ると本當に可愛さうになる。それでも、よく勉強する。家で、無難に勉強することが出来たなら、よい成績をさるに違ひない。

今朝は頬に爪の痕をつけて、學校に来たので、皆が、――

『お父さんぢやらう、今度は嘘さはいはないね。そんな目にあはすものは、君のお父さんに違ひない。校長先生に云ひ給へ。さうすりや、呼んで説諭して下さるから』といふ。

ブレコシは、飛び立つて、赤くなつて、怒りに聲慄はして、斯ういふ。――

『嘘だ、父さんは僕を打ちなんかしない。』

それでも、あとで、課業書間に、机の上に、涙を落して居た。人が見ると、涙を押しかくして、可愛さうに！笑顔を見せようとするのだ。明日はデロシイと、コレテイと、ネリイとが、僕の家へ来て呉れる筈なので、ブレコシも一緒に呼んでやらうと思ふ。御馳走してやつたり、本を見せてやつたり、家中、つれまばして、見せてやつたり、歸る時には、果物をポケットに詰め込んでやりたものだ。あんな善い、健氣な子を、只の一度でも喜ばせて、やりたいものだ。

友人の來訪

十二日 木曜日

今日は、今年中で、一番面白い、木曜日であつた。丁度二時に、デロシイと、コレテイとが、駝背のネリイをつれて來た。ブレコツは、親◎が來るのを許して呉れなかつたのだ。デロシイとコレテイとは、途中で、野菜賣の子のクロシイに逢つたといつて、笑つて居た。クロシイは、大きな甘藍かんらんを提げて居たさうだが、それを賣つて、貰つた錢でペンを買ふと言つて居たさうだ。それに父親が近い中にアメリカから歸るといふ手紙が来たといつて大さう喜んで居たさうだ。

三人の友人は、僕の家にて二時間ばかり居たが、あの位面白かつた事は無い。デロシイとコレテイ

とは級中で一番面白い子供だ。父さんまで、二人が好きになつて仕舞つた。コレテイは茶色のズボンをはいて、猫の皮の帽子を被つて居た。活潑な子で、いつも何かして居ないと、すまないの、そこらのものを、動かして見たり、まぜかへしたりする。今日も、朝から、薪を半車丈、擔いださうだ。それでも、疲れた様子もなく、家中かけまはつて、何やかや、氣をつけて見たり、始終何かしやべつて、栗鼠りすの様にピン／＼してゐた。臺所へ行つて、下女に、此の家では薪を、一べいくらに買ふかと聞いて居た。コレテイの店では二十錢宛ださうだ。よく自分の父が四十九聯隊にはいつて居てクストザの戦争に、ウムベルト親王の麾下に屬して戦つた時の話をする。行儀がよほ善い。薪の中に生れて育つて居ても、あの子の精神には、天晴貴族の血が通つて居ると、父さんが言つて居た。

デロシイは、僕等に面白い話をして聞かせた。地理を知つて居ることは、まるで先生の様だ。眼を閉ぢて、斯う言ふのだ、――

『僕は今、伊太利全國が、目の前に見える様だ。あそこにアペナイン山脈が、アイオニアン海の中にすつと突き出し居て、河があそこ、に流れ、白い都會があり、灣があり青い内海があり、緑の島々がある』と、地名を順序通りに言ふ。まるで地圖を見て居て、讀む様だ。あの子が、金ボタン

のついた青い服を着て、金髪の頭を高く舉げて、目を閉ぢて、石像の様に眞直に立つて居る姿を見て、僕等は皆、その風采に感心して仕舞つた。デロシイは明後日の大葬紀念日に暗誦する筈の三頁ばかりの文章を、一時間の中に、すつかりおぼえて仕舞つた。ネリイまで之に見とれて、悲しさうな眼付に微笑を浮べて居た。

今日の來訪は大層面白かつた、そればかりでない。僕の胸に火花のやうなものを残して呉れた。三人が歸る時には、丈の高い二人が、か弱いネリイを間にして、腕をとつて連れて歩いて、可笑しい事を言つて、今まで一度も笑つた事のない、ネリイを笑はせたので、僕は嬉しかつた。食堂へ歸つて見ると、平生からそこに張つてあつた駝背のボンチ繪が無くなつて居た。之は父さんがネリイが見ない様に態々はぎ取つておいたのだ。

グイットリオ、エマヌエレ王の大葬

一月十七日

今日午後二時、僕等が、教場に入ると、先生がデロシイに聲をかけられた。デロシイはすぐに出て、僕等の方に向いて、小さいテーブルの前に立つて暗誦を初めた。初めは聲が少し慄へて居たが、

段々はつきりした聲になつて、顔に紅い血が走つて居た、――

「今より正に四年前、今日、この時刻に、前國王、グイットリオ、エマヌエレ二世陛下の王^{ひつぎ}は、羅馬大廟の正門に到着したりき。ヅマツドリオ、エマヌエレ二世陛下は、實に伊太利建國の君にましくつて、從來七個の小邦に分裂して、外敵の侵略、暴主の壓制に苦しむたる我が伊太利の祖國は、王が治世の間に、合して一個の王國となり、その自由獨立を確立せり。王は、二十九年の治世の間、勇武絶倫、危難に際して畏れず、勝利を得て、驕らず、逆境に沈淪して、易らず、偏に、國光を發揚し、人民を愛撫するに努め給へり。王の柩車は、天革雨ふる、羅馬の市街を通過するに、沿道には伊太利全國より集まれる無数の群集、沈黙靜肅に、大葬の行列を拜觀せり。柩車の前には幾多の將軍、大臣、皇族あり、一隊の儀仗兵、林なせる軍族、三百の都市より來れる代表者、その他一國の威力と光榮とを代表すべきもの、皆従はざるはなし。かくの如くにして大葬の行列は、崇嚴なる殿堂の前に到着せり。この時十二人の騎兵、王棺を柩車より移し奉る。伊太利王國はこの一瞬間に、愛慕おく能はざりし老王に最後の別れを告げぬ。二十九年の間、父となり、將軍となり、國家を愛撫し給ひし、前國王に永久の別れを告げぬ。これ實に崇高森嚴なる一瞬間なり。上下皆王棺の影を望み、憂ひに沈める八十旒の軍旗を見て面を覆へり。この軍旗こそ、實に、無数の戦死者、數量の

鮮血を回想せしめ、我が最も尊き光榮最も神聖なる犠牲、最も悲惨なる不幸を回想せしむるものなれ。玉棺はやがて、騎兵に運ばれて過ぎぬ。軍旗は一齊に前に傾きぬ。——新しき聯隊の旗もあり、幾度の戦ひに破れ裂けたる、古き聯隊旗あり、八十の黒布、前に垂れ、無数の勳章、旗竿に觸れて玲瓏たる音響を發す。萬衆の胸にしみ渡れるその響は、恰も、幾千人の聲打ちそろへて、「いざさらば、我が君、太陽の伊太利を照さん限り、君が魂しひはとこしへに、我等臣民の胸中に止らん」といふもの、如し。

軍旗は再び頭を空にもたけぬ。而して我がヴィットリオ、エマヌエレ二世陛下は靈廟の中にて、不朽なる光榮に入り給へり。』

フランテイ君の放校

二十一日 土曜日

デロシイがヴィットリオ、エマヌエレ王の弔詞を讀んで居た時に、笑つたものは唯一人、それはフランテイであつた。厭な奴だ。彼奴は人が悪い。父親が學校へ叱りに來ると、却つて喜んで居る人が泣くと笑ふ。ガーロンの前では慄へて居る癖に、弱い「石屋さん」や、腕の利かぬクロシイをいぢめる。外の人が敬服して居るブレコシを嘲弄する。幼兒を助けて跛になつた。あの三年生のロ

ベテイにまで、からかふのだ。自分より弱いものに喧嘩をふきかけては、自分が大變に腹を立て、傷を負はせようとする。帽子を眼深にかぶつて居る眼附が、何か悪意を含んで居る様で、之を見ると、誰でも、ぞつとする。誰にも遠慮しないで、先生の前でも、吹き出して笑ふのだ。機會さへあれば、盗みをするし、そしてちつとも知らぬ顔をしてゐる。始終誰でも喧嘩して、學校へ大きなピンを持つて來て、それで人をついたりする。自分のでも人のでも、上着のボタンをむしつて、それをもつて遊ぶ、あの子の紙や、本や、筆記帳などは皆いたんで破れて、よごれて居る。定規はきすだらけで、ペンは噛みひしぎ、爪はかみ切り、着物はよごして破つて居る。母親はあの子の爲に心配して病氣になつたさうだ。父親はあの子を三度も家から追ひ出したさうだ。母親が折々學校へ様子を聞きに來るが、何時でも眼を泣き脹らして歸る。フランテイは、學校を嫌ひ、友達を嫌ひ、先生を嫌つて居る。先生は時々彼奴が行儀の悪いのを見ぬふりして居られる。すると、彼奴、なほ悪く出るのだ。深切にしてやると、嘲弄する、ひどく叱りつけると、手に顔を當て、泣くまねをして、蔭で笑つて居る。三日間停學になつて居たが、今度出て來た時には、尙更ねちけて、亂暴をした。ある日、デロシイが、「止めろ、先生がどんなに困つて居られるか、分らないのか」と言つた。するとフランテイは、「どつ腹に釘打ち込んでやるぞ」と脅迫した。

今日はとうとうフランテイが犬の様に追ひ出される事になった。先生がガロンに、一月の講話、『少年鼓手』の草稿を渡して居られた時に、フランテイが床の上へ爆烈弾を投げつけた。それが爆発して、小銃でも發つた様に、教場に反響した。皆ビツクリした。先生も飛び上つて、――

『フランテイ、外へ出ろ!』と言はれた。

『僕ではありません』とフランテイはしらをきつて笑つた。先生は再び、

『出ろ!』と繰り返へされた。

『いやです』とフランテイが反抗する。

そこで先生が怒つて、彼にとびかゝり、腕をつかまへて席から引き離された。フランテイは齒がみをして、抵抗したけれど、とうとう、腕力づくで、引つ張り出された。フランテイは中々重いのだけれど、先生は、とうとう校長室まで、引つ張られて行つた。

暫くすると、先生は一人で教場に歸つて來て席につき、頭を両手に挟んで、息を切らして居られた。餘程疲れたと見えて、その苦しさうな様子は、見て居るのも氣の毒であつた。

『三十年も學校に勤めて居て、こんな目に逢ふとはと!』悲しさうに言つて頭を振られる。

皆、息を止めて居た。先生の手は、なほ、怒りに慄へて居た。額の中央の縦皺が深くなつて傷の

様に見えて居た。可愛さうに、皆氣の毒に思つて居た。デロシイはフト立ち上つて、――

『先生、悲しみなさいますな、私共は皆先生を敬愛して居るのですから』と云ふ。

するに、先生は少し落ちついて、――

『さあ、課業を初めませう。』

少年鼓手 (月次講話)

千八百四十八年、七月二十四日、クストザ戰役の第一日の事である。一棟の離れ家を占領せん爲に派遣されたる、我が軍の歩兵、六十人許の一隊は、忽ち奧太利軍の二中隊に攻撃される事になつた。敵は四面より攻め寄せて、彈丸を雨霰の如くにあびせかけた。さしもの我が軍も、若干の死傷を蒙て、その家屋の中に退却して、辛うじて戸を閉じる事が出来た。戸を鎖してから、我が軍の兵士は、一階二階に窓に走せ寄つて、敵に向つて烈しく應戦した。敵は段々近づいて、半圓形をなしてひし／＼と攻寄せる。我が軍を指揮せる大尉は、丈の高い、武骨な老人で、髪も鬚も眞白な人であつた。六十人の中には一人の少年鼓手があつた。サルヂニアの生れで、十四歳を少し越えて居るけれど、まだ十二歳にも見えない位、色の淺黒い、眼の光つた少年であつた。大尉は二階から、

防戦を指揮してゐるが、時々ピストルの響の様な、ピチ／＼した號令を發する。彼の鐵で鍛へた様な顔には一點感情の影も見えず、いかにも部下を戰慄せしめるやうな面相。少年鼓手は、少し色青ざめて居たが、それでも足は、しつかり立つて、卓の上に飛び上り、窓から頸を突き出して、烟の間から、近づいて來る塙軍の白服を見て居た。

この家は高い崖の頂にあつた。崖に向つて居る方面は、屋根裏に一つの小さい窓があるばかりで、外は皆壁であつた。それで塙軍は、この方面を棄て、おいて、他の三方ばかり攻めたてた。それで、この方面は無事であつた。随分烈しい砲撃で、彈丸が霰のやうにふつて來る。壁を破り、瓦を碎き、天井や、窓や、道具や戸を、紛微塵に打ち碎いた。木片が空に飛んで、硝子や、陶器のこはれる音が、ガラ／＼／＼／＼と、頭の骨でもこはれる様なひびきであつた。窓によつて射撃して居る兵士が負傷して、床の上に倒れると、それが一方に片づけられる。傷に手を當て、あちらこちら、よろめきまはる者もある。臺所には、もう額をやられて、斃れて居るものもある。敵の半圓形は段々に迫つて來る。

暫くすると、今までびくともしなかつた大尉が、俄かに不安の色を示はして、一人の軍曹をつれて、大足に歩いてその室を去る。三分間程立つと、その軍曹が走せ歸つて來て、少年鼓手を手招き

する。少年はついて行つて、急ぎ足に階段をかけたのぼり、屋根裏の室に登る。大尉はかの小さい窓に倚つて、紙切に何か書いて居る。その足許には釣瓶の綱がおいてあつた。

大尉は紙片をた、んで兵士等を戰慄させる。あの凄い眼をぢつと少年の方に注いで、鋭く呼びかけた、――

「鼓手！」

鼓手は帽の庇に手を上げた。

「貴様は勇氣があるか」と大尉がいふ。

少年の眼が、ピカ／＼とひかつて、

「ハイ大尉殿」と答へる。

大尉は少年を窓のきには押しやつて、

「こゝから下を見ろ！向ふの家の近くに、銃剣の光が見えるであらう。あそこに我が軍の本隊が居るのだ。貴様この書付をもて、綱を傳つて窓を下りるんだ。そして急いで坂をかけ下りるんだ。畑を横ぎつてかけるんだ。そして、我が軍の陣地に駆けつけて、誰にでも將校に會つて、之を渡すのぢやぞ。帯皮と背囊とは取つてしまへ。」

鼓手は帯皮と背囊とを取り去つて、書付をポケットにさし込んだ。軍曹は綱を窓から垂れた。片端を自分の手にかたく巻きつける。大尉は少年を助けて窓から出してやり、背を外の方に向けさせて、――

『オイ、この分隊の安危は貴様の勇氣と貴様の脚によつて定まるんだぞ。』

『大丈夫です。大尉殿』と鼓手は答へて、下りる。

大尉は軍曹と共に綱を握つて、――

『坂を下りる時は身を屈めるんだぞ。』

『大丈夫です。』

『旨く、やつてくれ。』

する／＼と、鼓手は地に下りた。軍曹は綱を敗り入れて去つた。大尉は氣ぜはしさうに、窓の前を歩みながら、少年の坂の下るのを見て居た。

もう大丈夫成功したと思つて居ると、忽ち少年の前後數歩の間に、土烟が五つ六つ立つた。塙軍が、彼を見つけて、高地から、打ち下したのだ。少年は一生懸命に駈けてゐたが、突然地に倒れた。

『しまった！』と大尉は、拳を噴んでうなつた。けれど、それを云ひ終らぬに、鼓手は勢よく立ち

上つた。『ア、倒れたはつかりか？』と大尉は獨言をいつて息をついた。鼓手は一生懸命に駈け出したけれど跛をひいてゐる『くるぶしをたがはしたナ』と大尉は思つた。つゞいて土烟が少年のあたりに起つたが、皆遠くて當らない。『うまい／＼』と大尉は喜んだ。少年から目を離さない。機一髪の際の事として、オド／＼してゐる。あの書付を以て、甘く本隊に到着すれば、直に援兵が来るのだが、間違へば六十人は變になるか、敵の捕虜となる外はないのだ。

少年は暫くかけ出したかと見ると、又歩をゆるめて跛を引く。また駈け出しては、段々弱つて幾度も、躓いて休む。

『大方丸が擦過たのだらう』と大尉は思つた。そして少年の行動を目からはなさなかつた。心は激して身體を震へてゐた。炎のやうにかゝやく眼で、走つて居る少年と、遙か向ふの畑中に日光を反射して居る銃剣との間の距離を目測して居た。下の室には、銃丸の物に當る音、士官や軍曹の怒れる叫び聲、切るやうな負傷者の泣き聲、道具のこはれる音、物の落ちる響が入り交つてきこえる。

大尉はもう遠くなつた鼓手を目送して叫んだ。

『しつかり／＼、走れ／＼、ヤ止まつたぞ。畜生奴、ア、又歩くんぞ。』

一人の士官が息を切らして、駈けて來た。敵は少しも砲火をゆるめないで、白旗を擧げて、降服

を勤めて居ると告げた。

大尉は少年から目を離さない。「返答するに及ばぬ」といふ。少年はもう平地に出て居るけれど、最早走つては居ない。漸く足を引きすつて居るやうに見えた。

大尉は齒がみをして、拳を固めて「行け！走れ！死んでしまへ！こん畜生！走れ！」と云ふ。今度は怖ろしい言葉をだした。「エー卑怯者が！坐りこんで仕舞つた！」

今まで畑中に見えて居た。少年の頭は、倒れでもしたのか、突然見えなくなつた。すると一分間ばかりして、その頭がまた見えてきた。それがとうとう籬のかけになつて、大尉はもう其の姿を見なかつた。

愛の學校

大尉は急いで下におりた。彈丸は雨霰のやうにそ、がれて居る。室は負傷者で、一杯になつてゐる。あるものは、酔漢のやうに轉け廻つて、道具などにつかみついてゐる。壁や床は血で眞赤だ。澤山の死骸が戸口を塞いで居る。副官は腕を打碎かれて居た。烟と埃はあたりのものをつ、んでしまつてゐる。

大尉は聲をはけましてよぶ。

『大膽にやれ。一步も退くな。もう援兵が来る。もう暫くだ。しつかりやれ。』

少年の鼓手

敵軍は益々近づいた。敵兵の顔が、烟の中から見えるやうになつた。銃の響に交つて怖ろしい関の聲がきこえる。罵る聲がきこえる。降服をせよ。でなければ撃にするぞとおどして居るのだ。我が軍の兵士が膽を失うて、窓から身をひくと軍曹がまた追ひたて、前にす、ませる。けれど、防禦軍の火力は、次第に弱つた。絶望の色が兵士の顔にあらはれて來た。もうこの上は抵抗をつ、ける事は不可能である。すると、敵の火力が薄らいで、轟ろくやうな聲で『降服しろ』と叫んでゐるのが哮えるやうな聲で聞える。

『否』と大尉が、窓からだなつた。

兩軍の砲火は再び烈しくなつた。味方の兵士はまた續いて仆れる。一方の窓はもう守り手が無くなつた。最後の時は近づいた。大尉は、絞る様な聲で、――

『援兵は來ないのだ！』とよびつ、けて、野獸のやうにとびまはり、震へる手に軍刀をにぎりしめて、戦死しようと決心した。この時軍曹が屋根裏から下りて來て、するどい聲で、――

『援兵が來ました』と叫んだ。

『援兵が來た！』と大尉は喜の聲をもつてこたへた。

この聲をきいて、健やかなものも、手を負へるものも、軍曹も士官も、ひとしく窓際に突進して

抵抗は再び猛烈になつた。

程なく、敵軍は色めいてみえた。陣が亂れ立つて來た。大尉は急いで生き残つて居る少數の兵を集めて、銃に劍をつけて、突撃の用意をさせた。それから二階に駆け上つた。同時に大地を動かすやうな突撃の聲と共に、忙しい足音がきこえてきた。窓からのぞくと、伊太利騎兵の一中隊が全速力を以て煙のなかをかけて來るのが見える。劍が閃々ときらめいて、敵兵の頭の上、肩の上、背の上に落ちるのがみえる。その時我が軍は、銃劍を構へて突撃して出た。敵は、動搖した、混亂した、退却を初めた。道は開かれて、暫時の後、二個大隊の歩兵と二門の大砲とで高地を占領してしまつた。

大尉は殘兵を率ゐて自分の屬する聯隊に復つた。戦は猶つゞけられた。最後の突撃の時、流丸に當つて、彼は左の手に負傷した。

その日の戦鬪は我が軍の勝利で終つた。翌日戦は再び開かれた。伊軍は勇敢に抵抗したけれど、衆寡敵せず、廿七日の朝、とうとうミンチオ川の方面に退却する様になつた。

大尉は、負傷したけれど、部下の兵士を率ゐて、徒歩で行進をつゞけた。兵士等は疲勞困憊して言葉を出すものもなかつた。日が暮れて、ミンチオ河岸のゴイトといふに達した。そこで副官を捜

した。副官は、腕を打たれたので、衛生隊に救はれて、大尉に先だつて、此の地に來て居る筈である。大尉は臨時野戦病院になつて居るお寺に行つた。お寺には、負傷兵が一杯居て、寢臺が二列に並んでゐる。床の上にも寢床をおいてあつた。二人の醫師と、幾多の助手とが忙しさに、往來して居た。抑へつけたやうな泣き聲、唸り聲が聞えた。

お寺にはいると、大尉は副官を尋ねて見ました。その時『大尉殿』と弱い聲で呼ぶものがある。大尉は振り向いた。それは少年鼓手であつた。釣寢臺の上に寢て居る。胸まで、粗い窓掛の布で覆はれて青く細つた兩腕を外に出して居る。けれど眼はやはり黒い寶石の様に光つてゐた。大尉は驚いた。けれど聲を鋭くして、

『貴様か。偉かつたぞ、よく本分を盡した。』

『全力を盡しました』と少年は答へた。

『貴様、負傷したのだつたか』大尉はあたりの寢臺に副官を捜しながら、重ねて問ふた。

『案外でしたよ』と少年はこたへる。彼れは言葉をだしたので、元氣づいた。そして此時始めて負傷したことを大いなる名譽に感じた。この満足の感じがなかつたら、この大尉の前で口をひらく力はなかつたのであらう。『随分走つたのです。前に屈んで隠れるやうにしたのですけれど、ふいに敵

に見つけられたのです。打たれさへしなけりや、もう二十分位早く行けたのでした。好い工合に参謀の大尉に逢ひました。書付を渡しました。でもやられてからは、全く歩かれはしないのでした。咽が乾いて、死ぬやうでした。とてもさきまでは、行けなからうと思ひました。私が暇どればひまどる程討死する人が多くなるのだと思ふと、泣きたくなるのでしたけれど、好かつたでした。私は一生懸命にやりました。思ひおくことはないのです。でも、大尉殿御免ください。あなた、御氣をつけなさらねばいけません。血が滴つてゐます。」

彼の云つた通り、滴々と血が下手に繃帯された大尉の指から落ちてゐた。

少年は「繃帯を直さして下さい。一寸手をかして下さい」といふ。

大尉は左の手をさしのべた。右の手で、少年を助けた。少年は大尉の繃帯を解いて、結び直した。けれど、少年は枕を離れるとたちまち青くなつた。それでも一度頭をおろさねばならなかつた。

「もう宜しい。もう宜しい」と大尉は少年の様子を見て、繃帯した手を引つこめようとする。少年はそれを離すまいとする。大尉は、――

「おれのことを心配しないで自分の事に氣をつけるのだ。些細な傷でも、棄つておくとひどくなるからね。」

鼓手は頭を振つた。

大尉は彼を熟視して、「しかし、貴様は、こんなに弱るとは、随分澤山な血が出たのだらうね」といふ。少年は、

「血が澤山出たらうつてですか」少年は微笑んで云つた。「血ばかりぢやありません。此處を御覽ください」そして、布をかきのけた。

大尉は、ぎよつとして、一步退つた。少年は片足無いのである。左の足は膝の上から切断してあつて、切られたところは血がにじんだ布で括つてある。

その時、背の低い太つた軍醫が、シャツのまゝの姿で通つた。鼓手の方を顧みてうなづきながら、大尉に言葉をかけた。

「ア、大尉さん、こいつは残念でした。あんな無理な骨折をしなければ、足が一本助かる所でしたにね——ひどい炎症をおこしたんですよ。とうとう膝の上から切つて仕舞ひました。しかし健氣な少年ですな。涙一滴、おとさず、聲さへ立てなかつたんですからね。私が手術をしてゐると、

伊太利男兒だと言つて、威張つて居ましたよ。きつと氏が善いんですな。」

斯う言つて、軍醫は急ぎ足で去つた。

大尉はその重い白い眉の根に皺をよせた。少年をヂツと見つめた。覆をもとのとほり着せた。そして徐かに、知らず知らずといった風に、それでもなほ少年をヂツと見つめながら、頭に手を舉げて、帽子をとつた。

『大尉殿！』少年は驚いて叫んだ。『何をなさります。私に！』

今まで目下のものに、柔かい言葉をかけた事のない武骨な大尉は、その時、何とも言ひ様のない、優しい、情愛のこもつた聲で、――

『わたしは大尉にすぎない。お前は英雄だ。』かう言つて、腕をひろけて、少年の上に身をなげかけて、少年の胸に三度接吻した。

愛 國

二十四日 金曜日

我が愛兒よ。少年鼓手の話を聞いて感心したのだから、今日の試験に『我が伊太利を愛する理由』といふ作文を書くのも、譯の無い事であつたらう。自分の母が伊太利に生れたのだから、それで伊太利を愛するのだ。我が脈管に流れて居る血は伊太利の血であるからだ。伊太利は我が祖先墳墓の地であるからだ。自分の生れた所は、伊太利の町であるからだ。自分の語る國語

も、自分の讀む本も皆伊太利語であるからだ。我が兄弟姉妹も友人も、我を取り圍んで居る。偉い人々も我を取りまいて居る。美しい自然もその他、自分が見、自分が愛し、自分が研究し、崇拜するものは、皆、伊太利のものであるからだ。それで伊太利を愛するのである。我が祖國に對するこの感情、お前は、充分に解することは出来ないであらう。大人になつたらそれが分るのだ。長く外國に出て居て、久しぶりに故國に歸るまき、船側に立つて、遙か水天彷彿の際に、故國の青山を眺めた時、その時、やるせなき涙が目に溢れ、自からなる叫びが心の底から湧いて出るであらう。また、遠い外國に行つて居る時、街を通つてゐて、我國の言葉をきいたら、その言葉を發した勞働者の方へ思はず足が進むであらう。外國人が、自國に對して無禮の言を放つたのを聞いた時には、怒、心頭に發するにちがひない。一朝外國と事を構へることのあつた日には、祖國に對する愛が一層つよくおこるであらう。戦ひ終つて、疲弊した軍隊が凱旋して來るとき、彈丸に破れた軍旗の通るのを見、頭に繙帯したる兵士が折れたる武器を高くさ、けて、群衆喝采の中を通るのを見ることのおつたならば、その時お前の喜びは、いかばかりであらう。その時、お前は、愛國といふ言葉の意味を本當にさとることが出来るであらう。その時には、お前の國家を、自分自身の如くに感ずることが出来るであらう。これは實に立派

な。神聖な感情である。私は他日、お前が國家の爲に戦つて、無事に凱旋するのを迎へたいものだ——お前は私の骨肉であるから、その無事を喜ぶのは言ふまでもない。しかしながら、若し卑怯未練な事をして、をめぐり生きて還る様な事があつたならば、今日お前が學校から歸るのを斯様に歡んで迎へる父は、万斛の涙を以てお前を迎へ、再びお前を愛することが出来なくなつて、遂に斷腸憤死することであらう。

父より

嫉妬

二十五日水曜日

愛國の作文を、一番よく書いたのは、やはりデロシイであつた。ボチニは、今度は間違なく、自分が一等賞を取るのだと思つて居た——ボチニは、虚榮心があつて、少ししやれ過ぎるけれど、僕はその子は好きだ——けれど、あの子がデロシイを嫉んで居るのを見ると、いやになつて仕舞ふ。彼れは、いつも、デロシイに負けないつもりで、一生懸命に勉強するのだけれど、逆もデロシイには叶ひはしない。デロシイの方が、何事にかけても、十倍も、偉いものだ。それにハチニは始終、デロシイを嘲弄する。カルロ、ノビスも、デロシイを嫉んで居るけれど、それを、おくびにも出さ

ない様につとめて居るが、ボチニはさうでなく、顔に出して居るのだ。家へ歸つても先生が不公平だと不足を言つて居るさうだ。デロシイが、先生の間に對して、一番早く適切な答へをすると、彼は顔をしかめる。頭をさける。聞かぬ風をする。わざとらしく笑ふ。その笑ひ様が甚だまづい。それを皆が知つて居るので、先生がデロシイを褒めると、皆ボチニの方を見る。すると、ボチニはきつと、苦蟲喰つた顔をしてゐる。「石屋さん」は彼れに兎の顔をして見せる。

今日、ボチニは大變な耻をかいた。校長先生が教場にはいつて來られて、試験の成績を知らされた。

「デロシイが百點で一等賞」といられると、ボチニは大きな嘘をした。校長先生は彼れの顔を見られた。直ぐに容子をさとられた。——

「ボチニや、嫉妬の蛇を飼つてゐてはいけない。その蛇はお前の頭を噛んだり、心を壊はしたりするものだ。」

デロシイの外は皆ボチニの方を見た。ボチニは何か返事をしようとしたが、出来ないで、顔を青くして、石の様に固つて仕舞つた。それから先生が授業をして居られる間に、ボチニは、紙片に大きい文字で、こんな事を書いた、——

『吾等は偏頗と不正によりて一等賞を得たるものを羨むものに非ず。』
 之は、デロシイに渡さうと思つて書いたのだ。この時デロシイの近くに居る子供等が、互にさ、やいて居た。そしてその一人が紙で大きな賞牌をこさへて、之に黒い蛇を書いた。ボチニは之を知らないのだ。先生が一寸外に出られると、デロシイの近くのはみな立ち上つて、席を離れて、ボチニに其紙のメダルを渡さうとする。教場には殺氣が満ちわつた。ボチニは全身慄へ出した。すると、デロシイがかう云つた。『それ、僕に呉れ』デロシイは賞牌を取つて小さく引き裂いてしまつた。その時先生が入つて來られて課業をつげられた。ボチニは火の様に赤くなつてゐたが、自分の書いて居た紙片をそつと取つて、夫を丸めて口の中に入れて噛んでベンチの上に吐き出した。課業が終つた時、ボチニは少し取りのぼせてゐて、デロシイの前を通る時、吸墨紙をとり落した。デロシイは丁寧ていねいにそれを拾ひあけて、革袋かわぶくろの中に入れてやつて、紐をしめてやつた。ボチニは顔をあげ得なかつた。

フランテイ君の母

二十八日 土曜日

ボチニの癖は容易に治らない。昨日の朝、宗教の時間に、校長先生の前で、先生がデロシイに

讀本の中にある、

『いづ方に向ひても、われは、汝、大なる神をみる』

といふ聯句を暗記して居るかと問はれた。デロシイは覺えて居ないと答へた。するとボチニが出しぬけに、『僕、知つて居ます』と言つて、デロシイにあてつけた様に冷笑した。けれど、其時、フランテイのお母さんが、突然教場に駆け込んで來たので、ボチニは暗誦をせずに仕舞つた。

フランテイのお母さんは、息を切らして、白髪頭をふり亂して、全身雪にぬれて、一週間前に退學になつた我が子を前に押しやりながらはいつて來た。どんな事件が初まるかと、僕等は、片唾をのんだ。可愛さうに！フランテイのお母さんは、校長先生の前に膝まづいて、手を合して懇願するのだ。――

『あ、校長様、どうぞお慈悲にこの子を、學校にかへらして下さいませ。この三日の間、私が家に隠しておきましたが、若し親父がこのことを知りましたなら、殺して仕舞ふかも知れませぬ。どういたしませう！、どうぞ御願ひで御座います、御助けくださいませ。』

校長先生は、その女を外へ連れて出ようとなすつたけれど、女はきかない。やはり泣いて、願つて居る。――

「あ、先生様、この子が今まで、どれ丈、私に苦勞をかけたか、それを御承知であつたら、私に同情なすつて下さるに違ひありません。さうぞ後生で御座います。私はもう永くは生きて居ますまい。校長様、死ぬるのは覺悟して居ますが、どうぞ、この子が改まるのを見て、死にたいので御座います。こんなものでも——」斯う言ひかけて、泣き入つて仕舞つた。——『私には子で御座いますもの、可愛ので御座います——私は絶望して死んで仕舞ます！校長様、どうぞ、一家の不幸を救ふと思召して、もう一度、どうぞ、この子を學校に入れて下さいまし。私に免じて、どうぞ御許し下さいましよ』言ひ終つて、顔に手をあて、啜泣きをした。

フランテイは何とも思はない風に、頭を垂れて居た。校長先生はフランテイを見て、少し考へて、『フランテイさん、席に就きなさい。』といはれた。

婦人は、顔から手を取つた。喜んで、お禮の言葉をくりかへしくりかへしのべて、校長先生には、物も言はせないで、目を拭きながら、戸口の方へ出て行つた。其の時口早やに、——『どうぞ氣をつけておくれよ。お前——皆さん。堪忍してやつて下さい。——校長様、あり難うございます。あなたは功德をなさいました——大人しくするのだよ——さよなら。皆さん——有り難う。校長様、さよなら、哀れな母親を御許し下さいまし。』

戸口へ出てから、今一度、我が子の方を顧みて、懇願する様な眼付をして出て行つた。顔色は蒼ざめて、身體は前に屈んで、頭はやはり震へて居た。階段を下りてしまふまで、咳嗽をする聲が聞えた。

全級は静まりかへつて居た。校長先生は、ヂツとフランテイを見つめて、極めて嚴かな調子で、『フランテイさん、あなたは、お母さんを殺しつゝ、あるのですよ。』

僕等は皆フランテイの方を向いた。すると、耻知らずの子は、笑つてゐるのだ。

希望

二十九日 日曜日

エンリコよ。お前が宗教の話を聞いて、歸つて来て、母さんの胸にとびついた。あの烈しいやうすは本當に美しかつたよ。先生は結構なおはなしをして下さるのね。神様が、私共を抱きあはしてくだすつたのだ。二人は最早はなつれこはないね。私が死ぬ時にも、父さんが死なれる時にも、私共は、『母さん、父さん、エンリコ、もうこれ切り逢はれないの！』といふ様な、絶望の言葉をかはすことは入らないのです。私共はまた他の世界で逢へるんですもの。この世で多く苦しんだものは、あの世でもまた報いを受けるのです。この世で多く人を愛したものは、

あの世で、自分の愛をしてゐた人に逢へるのです。そこには、罪もなければ悲しみもなく、死といふこともないのです。けれどね、わたくしどもは、自分で努めて、罪や汚れの無いその世界へ行かれる様にしなければなりません。かうなのよエンリコ、一切の善き行、誠の心からの情愛、友人に對する親切、一切の高尙な考、かういふのは、皆、あの他界に行く階段なんですよ。又あらゆる不幸は、お前の身を、その世界に近づけるのです。悲哀といふものは、罪を消すもの、涙は心の汚れを洗ひ去るのです。今日は昨日よりもつぎ善くならう。もつと人に親切をしようといふ様に、心がけなさい。毎朝起きたとき、かう心のうちに決心なさい。「今日は自分の良心がほめてくれるやうなこゝ、そして父さんの喜びなされるやうなこゝをしよう。友人や、先生や、兄弟たちに愛せられる様な事をしよう」と、そしてその決心を實行することのできる力を與へてくださるやう、神に祈りなさい。

「主よ、私は、善良で、高尙で、勇敢で、温和で、誠實でありたいと願ひます。どうぞ御助け下さい。毎夜、母が私に接吻をしてくださるこゝ、母さん。あなたはね。今晚は、昨夜よりもつと、高尙で、もつと價値のある少年に接吻をしてゐるなされるのですよ」と言ふことのできる様に成らして下さい」と、斯う言つて祈るのです。

來らん世では、天使のやうな潔いエンリコになるのだと、いつも心にしめて忘れなされるな。そして祈りをなさい。祈禱の喜びをお前はまだ想像することができまい。その子が、殊勝に祈りをあけてゐるのを見たら、母親はどんなにかうれしく思ふことでせう。お前が祈りをしてゐるのをみると、母さんは、誰かお前を見てゐて、お前の祈りを聞いてゐて下さる方が、あるとしか思はれないのです。そんな時私は、大慈大悲に在す至善の神がいらつしやるといふ事を、常よりは一層確く、信するのです。さうすると、私は一層お前を愛する心がおこり、一層仕事に精が出、一層辛棒する氣になり、心から人の罪をも許し、靜かな氣分で死を思ふことも出来るやうになるのです。あゝ、至大至仁の神様！あの世で、再び母の聲をき、再び子供にめぐりあひ、ふた、び愛らしきエンリコ―潔められて限りなき生命を得ましたるエンリコに逢つて永遠に永遠に決して離れることのない抱擁をなすことを得させ給へ！さあ、祈りませう！、何時も祈禱をして、互に相愛して、善きことをなして、此の聖なる希望を心の中に、わが貴きエンリコの魂のなかに、かたく記しておきませうよ。